始

130

表紙繪　清原齊筆

特219
763

中里介山著

大菩薩峠

第三冊

東京
第一書房

戰時體制版　小引

小說大菩薩峠は、明治の末に起稿し、大正の初に發表し、昭和の今日（十四年・卽ち西曆一九三九）に至りて猶ほ未だ完結せざる長篇小說なり。時間よりすれば執筆以來三十年、分量を以てすれば十五冊三十九卷八千頁三百萬言に及ぶ。實に人類あつて以來の最大長篇小說にして、從來世界に於ける最長篇と稱せられたる日本の八犬傳に越ゆること數倍也。以て日本は世界の最長篇小說の第一と第二とを保有するものと稱すべしと雖も、然れども徒らに數と量とを誇りて文獻を粉飾するは愚にあらずんば陋。抑々小說大菩薩峠の著者は、此の尨大なるカンバスを用ひて何物を寫さんとするや、敢て狂繪の墮罪を甘んじて、この作物を爲す所以のものは、「衆生業相ノ展開ヲ曲盡シ、ソノ遊戯神通ヲ寫シテ遂ニ入曼陀羅ノ實相ニ歸スル」の結構に在つて存する也。强ひて名目を附すれば無二創開の大乘文學と稱すべきものにして、世の所謂藝術文學或は大衆文學とは根本に於いてその性質と出立とを異にす。

この書、すでに種々の形式に於いて世に行はるること久し、今又その若干を第一書房主が戰時體制版として發行の希望切也。然れども、余は數年前感ずる所ありて、自己一切の著作物を自社に於いて統一し、意を當代の出版界に斷ち、全く名利の念を脱却するの途に出でたるを以て固辭して不受、適適第一書房の所謂戰時體制版なるものは、純眞なる慰安を忠勇なる戰線の吾が同胞に贈らんとするを主意とするものなるを聞き、未だ書房主長谷川君その人を知らずと雖も、些か率公の一念を以て、本出版に同意するに至れり。事、若し所期に副はずんば直に絶叛に附するや共に異議なき處とす。記して以て後日の鑑照と爲す所以也。

己卯元旦

武州西蕨草廬に於て

著者敬白

大菩薩峠　目次　第三冊

九　女子と小人の巻……五
十　市中騒動の巻……一一三
十一　駒井能登守の巻……二三三
十二　伯耆の安綱の巻……三三九

九

女子と小人の巻

一

伊勢から歸つた後の道庵先生は別に變つたこともなく、道庵流に暮らして居りました。

醫術にかけては其れを施すことも親切であるが、それを研究することも根がよく、暇があれば古今の醫書を繙いて細かに調べてゐるのだが、如何したものか先生の病で

「醫者なんといふ者は當にならねえ、人の病氣なんぞは人間業で癒せるもので無え」

と云つて、自分で自分を輕蔑したやうな事を云ふから變り者にされてしまひます。さうかと思ふと

「人の命を取る事にかけては新選組の近藤勇よりも、おれの方がズツト上手だ、今まで、おれの手にかけて殺した人間が二千人からある」

なんといふやうな事を言ひ出すから穩かでなくなつてしまふのです。何處から手に入れたか、此の日は舶來の解剖圖を擴げて、それと一緒に一挺のナイフを弄りながら獨り言を云つてゐます。

「毛唐は面白いものを作る、斯うすれば鎌になる」

ナイフの刄を角に折曲げて鎌の形にし

「それからまた斯うすれば燧に使へる」

「斯うして引出せば庖丁にもなり剃刀にもなる」

他愛ないことを言つて、ナイフをおもちやにして解剖圖を研究してゐる處へ

「先生」

「何だ」

「お客でございます」

「お客、今勉強してゐる處だから大概のお客なら追拂つちまへ」

「與八さんが來ました」

「與八が」

「與八さんが馬を曳いて來ました」

「與八が馬を引いて來た、そいつは面白い、此方へ通せ」

與八が澤井から久し振りで道庵先生を訪れて來ました。

「與八、お前が來たから、今日はおれも久しぶりで江戸見物をやる、どうだ、兩國へでも行つて見ようか」

「お伴をしませう」

その翌日道庵は與八をつれて兩國へ出かけました。與八の背には郁太郎が溫和しく眠つてゐます。道庵先生は兩國へ行く途中も例の道庵流を發揮して通りかかりの人を笑はせました。

「彼處が兩國だ、大きな川があるだらう、間を流るる隅田川といふのがあれだ、向ふは上總の國で、

此方が武藏の江戸だから昔兩國橋と云つたものだが、今は彼方も此方もお江戸の中だ、どうだい、景氣が宜いだらう、幟があの通り立つてらあ、橋の向ふと此方に見世物小屋が並んでる、見物人がいつでもあの通り眞黑だ、木戸番が聲を嗄らしてゐやがる、與八、うつかりあの前へ行つてボカンと立つてゐると巾着切に巾着を切られるから用心しろ、愚圖々々してゐると迷兒になるから、おれの袖を確かり捉めえてろ、自分の足を踏まれぬやうに、背中の子供を押しつぶされねえやうに氣をつけて」

斯うして二人は兩國の人混みへ入り込んで行きました。

「先生、こりや何だい」

與八は一々見世物の繪看板の前で立ち止まる。

「こりや其の駱駝の見世物だ」

「駱駝といふのは何だらう、馬見たやうな變てこなものだな」

「そりや南蠻の馬だ」

「背中に瘤がある」

「あれが鞍の代りになる」

「でけえ瘤だな」

「ははは」

「先生、こりや何だ」

「これは籠細工といふものだ、今はやりの籠細工といふものだ」
「綺麗だなあ」
「その次は竹細工、糸細工、硝子細工、紙細工」
「綺麗だなあ」
「それから駒廻し」
「やあ駒から水が出てゐる」
「今度は機關」
「やあ、機關まである」
「女盗賊三島のお仙と來たな、こりや三座太夫だ、次がおでこ芝居」
「芝居で齒磨を賣るのは可笑しい」
「ははは」
「それでも先生、へおあいきやう手踊り御齒磨調合人、岩井管五郎〉と書いてある」
「いや、こいつ等は、もと齒磨賣として其の筋へ願つてあるのだ、芝居をすると云つて初めたのではない、それだから今でも齒磨の看板を出してゐるのだ」
「ああ、打掛を着たお姫樣が向ふを向いてゐる、ありや何だ」
「與八、あんなものを見るものではない、ありや士君子の見るべからざるものだ」

「皆んな中で笑つてゐる」
「因果娘、蛇使ひ、こんなものの前は眼をつぶつて通れ」
「さうですか」
「後から見ると、あの通り美しい女に見えるが、前に廻つて見れば言語道斷のものだ、さあ與八、ここに輕業がある」
「成程、こりあ輕業だ、輕業、足藝、力持、やあ大した看板だ、この小屋が今までのうちで一番でけえね、これなら一萬五千人位、人が入れべえ」
「そんなに入れるものか、千人は入れるだらうな」
「やあ、あんな高い處で、よくあんな藝當が出來るものだなあ、あんな綺麗な面をした娘が倒さになつて足で鹽を組み上げて其の上で三味線を彈いてらあ、エライものだなあ、こつちの方は綱渡りか」
與八は餘念なく此の立看板を仰向いて見て行くうちに
「大評判、印度人槍使ひ」
丁度、まん中の處に掲げられた、別けて大きくした繪看板の前まで來ました。
「先生、この槍遣ひの面は、こりや何といふ面だ」
「ははは」
「面も身體も眞黑で眼を光らかして裸體で槍を持つて立つてゐるが」

「こりや印度人だよ、印度といつて天竺の事だ」
「へえ」
「印度から來た槍遣と書いてある」
「成程、印度にも槍があるのかねえ、印度の槍といふのは、あんなものかねえ」
「さうだ」
「印度の人といふのは、皆んな彼んなに面も身體も黑いのかねえ」
「黑ん坊とさへ云ふからな」
「如何して彼んなに黑くなるんだらうな、染めたわけぢや有るまいねえ」
「染めた譯ぢや無い、印度は熱い國だから日に燒ける、日に燒けると色があんなに黑くなる」
「へえ」
「何しろ冬といふものが無くつて、夏ばかりある國だ、その夏がまた日本よりも十層倍も暑いのだから、そこに住む奴等は照りつけられて、あんなに黑くなる」
「隨分黑いなあ」
さあ評判々々、印度の國はガンヂス河の河岸で生れました稀代の槍使ひはこれでござい、御覽の通り、身の丈、僅か四尺一寸なれども、槍を使うては神妙不可思議、これまで、この男の槍先に斃されました處の虎が三十八頭、豹が二十五頭、その外猛獸毒蛇をこの一本の槍先で仕留めましたること數

知れず、或時ヒマラヤ山の麓に於きまして不意に一頭の猛虎に襲はれましたる折に、右の股を牙にかけられ、すでに斯うよと見えたる處を、取り直して、グサと突込みました一槍で、猛虎の口から尻まで突き通して仕留めました其働きが國王殿下のお耳に入り、この通り首にかけたる金銀メタル、これが印度國王殿下からの賜はり物にござりまあす、それより以來、當人は右足の自由を失ひまして片足の藝當、高い處は十丈の梁の上を走り、低い處は水の底をくぐる、馬に乘りまして、この槍を使ひますれば馬上の槍、我が朝に於きましては寶藏院の入道、高田又兵衛といへども、これには及ばず、嘘偽りと思召すなら御見物の方々御持合せの手裏劍なり、鐵扇なり、または備へ置きましたる半弓、石、瓦の類をもつて、御遠慮なく當人の四肢五體いづれへなりともお覘ひつけ下し置かれ、萬一當人の身に一つでも當りませうならば、其の場に於て、ここにござりまする虎の皮三枚、豹の皮二枚、これをお土産までにどなた樣にも差上げまする、長い浮世に短い命、斯ういふものが二度と二たび、日本の土地へ參りませうならお目にかかりまする、孫子に至るまでのお話の種、評判の印度人ガンヂス河の槍使ひは是れでござい！
「ははあ、これが此の頃評判の槍使ひだな」
「先生、本當だんべえかね、本當に印度から此んなエライ槍使ひが來てゐるのかね」
「口上云ひの云ふ事は當にならねえが、それでも此の頃は、この見世物が馬鹿に評判だ、丸つきり嘘を云つて評判を立てる譯にも行くめえから本當かも知れねえよ」

「さうかなあ」

與八は頻りに其印度人槍使ひの大看板をながめてゐますから、道庵が

「與八、これが其んなに氣に入つたか、それでは、こいつを一つ見せてやらう」

「さうしてお呉んなさい」

「俺も此奴を一つ見たいと思つてゐたのだ」

二十四文づつの木戸錢を拂つて道庵と與八は此の小屋の中へ入りました。

小屋の中は摺鉢のやうになつて、眞中の處が興行場になつてゐて、見物は相撲を見ると同じやうに四方から圍んで見ることになつてゐます。

道庵と與八とは土間の程よい處に陣取つて、與八は郁太郎を降ろして膝にかかへ、物珍らしさうに此の大きな小屋がけの天井から板圍、一杯になつた見物人の方をながめて

「大變人が入つてゐる」

この時の前藝は駒廻しで、その次が足藝。

紋附を着て袴を穿いて襷をかけた娘が三人出て來て、臺の上へ仰向きに寢て足で色々の藝をやる、それから力持、相撲のやうに太つた女、諸肌脱ぎで和藤内のやうな風をしてゐる其の女の腹の上へ臼を載せて其の上で餅を搗いたり、其の臼をまた手玉に取つたりする。

道庵は其れを見ながら、與八を相手にあたり構はず無茶を云つては、鮨と饅頭を山の如く取つて與

八に食はせ、自分も食ひながら

「今度は、例の印度人の槍使ひだな」

問題の印度人、書き入れの藝當、長い浮世に短い命、二度と二たびは日本の土地で見られないと口上が言つた。前にも後にも始めての舶來、看板でおどかし、呼込で景氣をつけ、次に中入前に、ワザワザ時間を置いて勿體をつけて、また改めて口上言ひが出て

「さて皆々樣、これよりお待兼の印度人槍使ひの藝當……」

前のに尾鰭をつけて長々と、槍使ひ一代の履歴を述べ、散々能書を並べて、見物に氣を持たせて置いて、口上が引込むと拍子木カチカチと東口から現れたのが其の印度人であります。

「成程、こりや黑ん坊だ、看板に僞は無え」

見物は其の異樣な風采で先づ大滿足の意を表します。成程背四尺一寸と看板に書いてあつた通り、手に持つた槍、柄は眞赤に塗つてあつて尖が菱のやうになつてゐる、それも看板と間違ひはない、身體は漆のやうに黑く、眼ばかり光つて、唇が拵へたやうに厚く、唇の色が塗つたやうに朱い、頭の毛は散切で縮れてゐる、腰の周圍には更紗のやうな巾を卷いてゐる、首に例の國王殿下から賜はつたといふ金銀のメタルが輪になつて輝いてゐる、それもこれも皆んな看板と同じこと、それが東口から赤柄の菱槍を突いて出て來る足許は一歩は高く一歩は低いものであります。

「成程……あの足だな、あれがヒマラヤ山で虎に食はれた足なんだ」

その跛足がまた大喝采。

「イヨー、舶來の加藤清正！」

「虎狩の名人！　日本一！　世界一！」

見物は喚く。

「先生」

「與八」

「看板の通りだね」

「看板の通りだよ」

やがて眞中の土俵まで出て來た印度人、光る眼をギョロつかせて四方を見る。どんな心持でゐるのだか、色が黑いから、面の上へは情がうつりません。

「キーキーキー」

白い齒を剝き出して、猿の啼くやうな聲を出して、左の手を高く擧げました。

「あれが向ふの挨拶なんだね、日本で今日はと云ふのを、印度ではキーキーと云ふんだらう」

「それに違えねえ」

印度人はキーキーと云ひながら、右の手には槍を持ち、左の手は高く擧げたままグルリと見物を一週り見廻して正面を切ると、一心に見てゐた道庵先生と期せずして面がピタリ合ひました。

道庵の面をしばらく見詰めてゐた印度人、他目には誰も何とも氣がつかなかつたが、印度人はブルブルと慄へて、危なく槍を取り落す處を、しつかりと持ち直して、わざとらしく横を向きました。

「はて、ヲカしいぞ」

道庵先生も亦この時首を捻りましたが、

「何だね、先生」

「どうも、ヲカしい、あの印度人は見たことのあるやうな印度人だ」

「先生は印度人にも友達があるのかね」

「どうも、あの時より肉は少し落ちてゐるが、骨組に代りはなし、跛足に申し分もなし、こいつはいよいよをかしい」

道庵先生は、クワキ頭を振り立てて印度人の恰好を横から見、縱から見てゐましたが

「あはははは」

突然大きな聲で笑ひ出しました。

時々、變な事を云ひ出すお醫者さんと思つて、あたりの見物も氣に留めなかつたが、この時は笑ひ方があまり仰山であつたから、皆んなが道庵の方を振り向いて見ました。

「先生、何を笑つてるだ」

與八も驚かされました。

「あはははは」
道庵はやはり大口を開いて笑ひます。
「何が可笑いだか」
與八は受取れぬ面。
「先づ前藝と致しまして槍投げの一曲、宙天に投げたる槍を片手に受止める……」
口上云ひが言ふ。
印度人が槍を取り直して、ヒューと上へ投げる。
「旨いぞ！　あはははは」
道庵先生が囃すと、印度人はブルブルと慄へて、落ちて來た槍を危ない所で受留める。手足にワナワナと顫へが見えるのが不思議です。
「黒さん、確かり頼むよ」
道庵先生に言葉をかけられる度に、印度人がドギマギして、他の人が見てもをかしいと思ふ位に、槍の扱ひがしどろになつてしまふから、見物が
「何だか危なつかしい手つきだ」
幸ひに面の色は眞黒だから、表情が更にわからないけれど、どうも黒さんの調子が甚だ變なのであります。それでもやつと數番の槍投げを了へて

「次は槍飛び！」
口上がかかると
「確かりやれ、道庵がついてるぞ」
道庵がまた大きな聲。
槍飛びの藝當にかかる筈の印度人がこの時ふいと舞臺から逃げ出しました。
「おお、黒さん」
口上言ひが驚いて呼び止める。それを耳にも入れないで、印度人は、槍を突いて跛足を飛ばして樂屋の方へ逃げ込みます。
「おや、黒さん、どうしたんだい」
口上言ひや出方が飛んで行つて、印度人を連れ戻さうとするのを、印度人は頓着なしに樂屋へ逃げ込んでしまひます。
いよいよ本藝にかからうとする前に肝腎の太夫さんが默つて逃げ出したのだから
「如何したんだ」
「怪しいな」
「急病でも出たのかな」
「ひよいと出て、ひよいと引込んでしまやがつた」

「をかしな奴だよ」
「出方が追つかけて行かあ」
「あれ、樂屋へ逃げ込んでしまつたぞ」
「如何した譯なんだ」
「やあい、黑、如何したんだ」
「黑！」
「黑ん坊！」
「早く出ろ、黑やあい」
見物は、漸く沸き立つて來ました。
「東西」
口上云ひが、沸き立つ見物の前へ出て來て
「只今、印度人が急病さし起りまして、暫らく樂屋に休憩とございます、何分熱國より氣候の違つた日本の土地に初めて參りました事故……」
「あはははは」
口上の申譯半ばに道庵が笑ふ。口上は腰を折られて變な目をして道庵を見たが、また申譯をつづけて

「食あたり水あたりの爲に頭痛眩暈を致し何分藝當相勤め兼ねまするにより……」
「その病氣なら俺が癒してやる」
又しても道庵の差出口。
「當人病氣休息の間代つて手品水藝の一席を御覽に入れまあする」
「馬鹿野郎」
見物が承知しませんでした。
「手品なんぞは見たくねえ、早く黑を出せやい、黑ん坊を出せ」
「新宿の八丁目から、わざわざ黑ん坊を見に來たんだい」半疊が飛ぶ。
自分の樂屋へ逃げて來た印度人、樂屋にはお玉のお君が胡弓を合せてゐました。
「どうしたの、友さん」
「駄目だ、駄目だ」
ここへ來ると印度人は樂な日本語です。
「まだ、お前、引込む時間ではないのだらう」
「可けねえ」
印度人は、お君の傍へ倒れるやうに坐つて首を振りました。

「如何したんですよ」
お君は胡弓をさし置いて心配さう。
「現れちやつた、現れちやつた」
「まあ」
お君も安からぬ色。
「誰か、お前が印度人でないと云ふ人があつたの」
「うん」
「ぢやあ何かい、お前が宇治山田の友さんのお化だといふ事を誰か見物が言つたの」
「さうは言はねえけれど、知つてゐる人に見つかつちやつた」
「知つてる人、それは誰」
「それは、俺らが世話になつたお醫者さんだ」
「お醫者さん、伊勢のお醫者さんかえ」
「いいや、いつかもお前に話したらう、俺等が隱れが岡で突き落されて一ぺん死んだ奴を生かして呉れたお醫者さんだ」
「それでは、あの下谷の長者町にいらつしやるといふ先生かい」
「さうだ、その道庵先生が見物に來てゐるのだよ」

「まあ、そりや驚いたね、それだつてお前、何にも心配することは有りやしないよ、お前の方では道庵先生だと判つても、先生の方ではお前が友さんだと判る氣遣ひはないからね、傍にゐるわたしだつて、さう云はれなければ判らないのだから、心配しなくても宜いちやないか」
「處が駄目なんだ」
「判つちまつたのかい」
「何しろ、俺の身體は頭の上に毛が幾本あつて足の踵に筋が幾つあるといふことまで、ちやあんと呑込んでる先生だから、一目で見破られちまつた」
「そりや困つたね、でもね、先生は惡い方ぢや無いんだらう、だから此處でお前を素破抜いて恥を掻かすやうな事はなさりやすまいから」
「そんな事はしねえ、素破抜きなんぞはやりやあしねえが、あははは と大きな聲で笑ふ」
「そりや知つた人が見りや可笑いだらうよ」
「さうして、〈黑、確かりやれ、俺が附いてる〉なんて云ふのだ、あの先生醉つぱらつてゐるからね」
「何と言つたつて構やしないぢやないか、怖いことは無いだらう」
「だつて、お前、俺らには氣恥しくつてやつてゐられねえ」
「困つたねえ」

「俺らはもう印度人は廢業だ、親方に旨く持ちかけられて、お前までがやつて見ろと言ふものだから、こんなに黑くなつてしまつたが、今日といふ今日は、とても遣り切れねえ」

「困つたねえ」

「印度人は俺らの性に合はねえ」

「困つたねえ」

この時見物席の方で罵り噪ぐ聲がここまで喧ましく響いて來る。

「あれ、あんなにお客が騷いでゐるぢやないか、お前が中途で引込んだからなのだらう、お客樣は皆んなお前を見たがつて來るのだからね」

「俺らは此處へ寢てしまふ」

この印度人の正體が米友であることは申すまでもない事で、米友は今刺繍の衣裳などが掛けてある帳の中へ入つて寢込んでしまはうとすると

「黑さん」

樂屋へ來たのは洗ひ髪の中年增、色が白くて光澤がある、朱羅宇の煙管と煙草盆とを下げて、辨慶縞の大柄に男帶をグルグル卷つけて

「如何したんだい」

背後には屈强な若者が三人控へてゐます。

「親方濟まねえが……」

米友は此の年增を親方といふ、さうして濟まねえと云つて一目置く。

「濟まないと云つたつて、お前、あの通りお客が湧いてるぢやないか」

「現れちやつたんだ、親方」

「現れたつて、誰もそんなことを言やしないよ、あの通り騷いでゐるのは皆んなお前を見たがつて騷いでるのぢやないか、お前がイカサマだつていふことを一人も言つてゐるものは無いぢやないか」

「けれども親方、たつた一人知つてる奴があるんだから、何とかしてお呉んなさい」

「何と云つたつて駄目なんだよ、お前が出て挨拶しなけりやお客は納まらないんだよ」

「では親方、病氣だと云つて休ましてお呉んなさい、今日一日休ましてお呉んなさい、今晩よく考へて置きますから」

「困るよ、そんな事を言つたつて、あれ、あの通り大騷ぎが始まつてるぢやないか、それではお前ちよつと出て挨拶してお呉れ、病氣で藝が出來ませんからつて、お前の面で挨拶をしなければお客樣は納まらないんだよ」

「俺らは出るのは忌だ」

「忌だとお云ひかえ」

お君は其れと心配して

「友さん、そんな事を云はずに出てお呉れよう、出て何とか云つてお呉れよう」
「うむ」
「さあ、早く出て行つてお呉れよう」
「うむ」
米友は、やつぱり進まないで
「挨拶をしろつたつて、キーキーキーだけでは濟むめえ、何と云つて宜いか俺らには判らねえ」
「何とでも宜い加減に印度らしいことを言つてお呉れ、さうすれば口上の方でいい加減に誤魔化してしまふから」
「どうも俺らあ、もう氣恥しくてキーキーも云へなくなつた」
「あれさ、早く出ないと、あれあの通り土瓶や茶碗が降つてるぢやないか」
「弱つたなあ」
「早く出でお呉れ、ね」
「親方、それぢやあね、俺ら一寸ばかり面を出してね、出鱈目を言ふから、口上の方で誤魔化してお呉んなさい」
「宜いよ、呑み込んでゐるよ」
「それから、親方」

「何だね、早くおし、相談なら後で悠くりしようではないか」
「俺らは此處で挨拶したら、もう印度人は廢業だよ、黒ん坊は御免を蒙るよ」
「そんな事は後で宜いから早く」
「ねえ君ちやん、イカサマをやつて人の目を晦ますと、此んな思ひをしなくつちやあならねえ、もう印度人には懲り懲りだ」
「そんな事を言はないで早く」
「初めは一寸出るばかりで宜いと言ふもんだから、お茶番をするつもりで印度人になつて見たら、いつか知らねえうちに大看板を上げてしまつて、やれ虎を三十五匹殺したの、印度の王様から勲章を貰つたのと、いい加減な事を書き立てて事を大きくしてしまやがつたから、俺らの引込みがつかねえ、そこで到頭こん目に會つちまつた、馬鹿々々しい」
「そんな小言を今言つたつて仕方がないよ、早く出てお呉れ」
親方の年増は、だますやうにして米友を伴れて行きました。
「先生、大へんな騒ぎになつちまつたね」
與八は道庵に向つて云ふ。
「あはははは」

道庵は笑つてゐる。

「何とも云はずに黒ん坊が引込んでしまつたね」

「あはははは、俺を見たから引込んだのだ、俺の面に怖れをなして逃げだしたのだ、どうだ與八、おれの豪い事を今知つたか、三十五頭の虎を退治した奴が、おれの面を見ただけで逃げてしまつた」

「冗談ばかり云つてる」

「冗談ぢやねえ、斯うして見ろ、黒ん坊が出ない爲に見物が湧き出した、これで黒が出て來れば宜し、出なければ小屋が引繰返る、いよいよ事が六づかしくなつた場合には、おれが行つて黒を引出して見せる」

「それぢや先生、あの黒ん坊とお前さんは知合なんだね」

「何でも宜いから見て居ろ」

「先生、印度の言葉が判るのかね」

「判るとも、印度の言葉であれ、和蘭の言葉であれ、ちやんと心得てゐる」

「豪いもんだな」

「いよいよ楽屋の方へ押しかけて行つたな、旨く黒を引張つて來ればいいがな、さあ黒が來て何と云ふか、よく聞いて居ろ、この中に印度の言葉が判る奴は憚りながら此の道庵の外には無え、なあに楽屋の奴等だつて印度の言葉が判るものか、出て來たら奴の挨拶の仕様によつて、おれが一番通辯を

して見物の奴等をあつと云はせてやる、出て來なければ俺が迎へに行つて連れて來て見せる、俺が來いと云へば二つ返事で來る、若し病氣だといへばお手の物だから俺が診察をしてやる、日本廣しと雖も印度人の病氣を見出すには此の道庵より上手な醫者は無え」

「先生、餘り大きな事を云ふと見物の人に撲られるよ」

「なあに、大丈夫、おれは印度の言葉を心得てゐる、その上に印度人の病氣を見出すことが上手だ」

「先生、出て來ましたぜ」

「やあ、來た來た、黒、またやつて來たな、確かりやれ」

「東西――」

口上言ひと出方とが黒を引張つて、場の眞中へ出て來ました。黒は元氣のない歩きつきをして道庵の方を見るのが、鼠が猫を見るやうな態度であります。

黒が出て來たので見物はやつと納まりました。

「いよう、黒ん坊！」

「御見物の皆々様へ申し上げます、御覽の通り色が黒うございますから喜怒哀楽の心持が現れませぬ、どうぞ此の足取りの萎れた處で御覽下さいまし、虎を手取に致す程の豪傑も、人間は頗る内氣でございまして、子供のやうな處がございます、只今腹痛がさし起りまして、とても藝當が致し兼ねると申して、皆々様に御斷りも申し上げず引込んで駄々を捏ねますのを漸くの事で引き出して參りまし

た。今日は何うぞ、これにて御免を願ひ上げまする、その代りと致しまして、明日は殘らず藝當を取り揃へて御覽に入れまする……」

口上言ひがべらべら喋ると、聞いてゐた印度人の米友、其の手を後からグイグイと引く。

「明日は間違ひがございません……」

また手を引く。

「槍投げ、槍飛び、馬上の槍、水中の槍、綱渡りの槍、飛越えの槍、矢切の槍、鐵砲避けの槍……」

「嘘を言ふな！　明日は遣らねえ」

怺へ兼ねた印度人の米友、我を忘れて口上言ひを力に任せて後へ引くと口上言ひは尻餅を搗く。

「おや！」見物は驚く。

「嘘だ！」米友が喚く。

「おや、あの印度人が日本の言葉を使つたぜ、さうして口上を引繰り返した」

見物はまた沸く。

「あはははは」

道庵先生が、また大笑ひをする。

その晩に、お君と米友は此の見世物小屋を追ん出されてしまひました。

「友さん」

お君は泣き出しさうな面をして、三味線だけを小脇にかかへ

「お前は、あんまり氣が短いから可けないのだよ」

「だつて仕方が無え」

米友は、この時はもう黑ではない、黑い處はすつかり洗ひ落されて、昔に變るのは茶筌を押立てた頭が散切になつただけの事、身體には盲目縞の筒袖を着てゐました。

「口上さんが、申し譯をしてゐる時に、あんな事を云ひ出さなければ宜かつたに、あれで全然失敗つてしまつたんだよ、それでも聞き咎めた人は幾人も無かつたから宜いけれど、本當に現れた時にはそれこそ小屋を壞されてどんな目に合ふか知れなかつたよ」

「あの時は、ついあんな譯で、口上の言草が癪に觸るから」

「當り前なら、袋叩きにされた上に小屋を拋り出されるのだけれども、お前が槍が出來るし、それに僞の印度人だといふ評判が立つては惡いから、斯うして默つて追ひ出されたんだといふから、まあ仕合せだと思つてゐますよ」

「うん、俺らも、もうあんな處には居て呉れといつたつて一日も居られやしねえ、丁度いい幸ひだ」

「だけれど、あの親方は、そんなに惡い人ぢやないよ、何しろ女の身でもつて、あれだけの事を踏まへて行かうと云ふんだから、中々しつかりした處があるねえ」

「さうだ、あの親方はあれで中々いい處があるよ」
「第一俠氣があるね、ほら、二人が三島まで來て、お金が無くなつて困つてゐた時に、あの親方に助けられたんだらう、わたしの三味線が可いから下座に使つてやると云つて、中へ入れて呉れたから、お關所も無事に通ることが出來たんだよ」
「さうだ、それから到頭、おれを印度人に化けさせやがつた、はじめの考へでは、俺等はあの道處先生を頼つて行くつもりであつたが、途中で印度人に化けるやうな事になつちまつた」
「これから如何しようね」
「如何しようと云つたつて、まあ今夜は何處か木賃へでも泊つて、悠くり相談するとしよう」
「あの親方が言ふのにはね、君ちやん、お前は一旦ここを出ても、氣があつたらまた戻つておいで、どんなにも相談に乘つて上げるからと出る時に親切に云つて呉れたのよ」
「俺らには、そんな事を云はなかつたが、お前にだけ其んな事を云つたのかい」
「さうだよ、わたしにだけ内密に云つてくれたの、江戸に居悪ければ旅へ出た時に、まだ仕事はいくらでもあるから、何處へか落着いたら居所を知らせてくれと云つて呉れましたよ、さうして今晩泊る處がなければ、兩國橋を渡ると向ふに知り合ひの宿屋があるから、其處へ云つて親方の名をいへば何時でも泊めて呉れると、其の所や宿屋の名前まで、よく敎へて呉れましたよ」
「はは、それでは親方は俺らには愛想を盡かしたけれども、お前の方にはまだ見込があるんだな、

お前、また彼處へ行つて見る氣があるのかい」
「さうですねえ、あの親方さんが親切に云つて呉れるものだから」
「さうか……」
二人は兩國橋を渡ります。夜風が吹いて川を渡るのに見世物場では賑やかな燈火、二人は越方と行末を話し合つて後ろに跟いて來たムクの事を忘れてゐました。

二

「君ちやん、俺等も漸く奉公口が定まつたよ」
米友が云つて來たのは其れから幾らも經たない後の事でありました。
「さうかい、それは宜かつたねえ、どんな處なの」
着物を疊んでゐたお君が莞爾しました。
「金貸の家だよ、この頃、金貸を初めた家なんだよ」
「金貸、お金を貸して利息を取る商賣なの」
「さうだよ」
「金貸は貧乏人泣かせで、罪な商賣だといふぢやないか」

「罪な商賣かも知れねえが、俺らが其れをやるわけぢやない、俺等はただ奉公人なんだから」
「そりやさうさ、まあ何でもよく勤めさへすりやいいんだらう」
「家の留守番をして、庭でも掃いてゐりや宜いんだとさ、俺等は片足が不自由だけれども力があるから、泥坊の用心に宜いからつて、其れで雇はれることになつたんだ」
「左様だらうねえ、金貸の家なんぞは泥坊に覘はれるだらうねえ、家の用心もしなくちゃあ可けないけれど、自分の身も用心しなくちゃ可けないよ」
「大丈夫だ」
「それで家の人數は多いのかい、雇人はお前の外に澤山ゐるだらうねえ」
「うんにや、俺らの外には飯焚が一人、その外に他から來てゐる人は居ねえ」
「大へんに小締りした金貸さんだねえ、それでは家の者が多いのでせう、息子さんだとか娘さんだとか」
「其れも隨分少いのだよ、よく考へて見ると、をかしな家だよ」
「をかしな家とは」
「でも、主人といふのは子供なんだからね、子供といつても十四か五位だ、それが主人で、其のお母さんともつかず姉さんともつかない女が一人、其の子は、をばさんをばさんと云つてゐるが、其の二人きりなんだ」

「その女の人と子供と二人で金貸をしてゐるの」
「うむ、さうだよ、代々やつてゐるのかと思へば、さうでもなく、ほんの近頃始めたらしいんだから」
「では、其のをばさんといふのが、先の御亭主か何かが殘して置いたお金をもつて、それを寢かして置くのも惜しいから、金貸をして暮らさうとでも云ふんだらう」
「そんな事だらうと思ふよ、其の子供がまた、馬鹿にマセた子供でね、主人氣取りで、俺らを使ひ廻す氣になつてゐて、うつかり坊ちゃんなんて云はうものなら怖い眼をして睨むんだから可笑いや」
「其の子供さんが番頭をするだらうから、お前は番頭さんといへば宜いぢやないか」
「番頭さんでも氣に入らないんだ、旦那様と云はないと納まらないんだから可笑いやな」
「旦那様といふのは少し可笑いね、十四や十五の子供をつかまへて」
「けれども旦那様と云ふことになつたんだ、さうして見ると、俺等はあのをばさんと云ふ人の方を何と云つて宜いか、それを今考へてゐるんだ」
「其子供が旦那様では、眞逆奥様とも云へないしね」
「さうかと云つて、まだお婆さんといふ年でも無いんだ、やつぱり奥様と云つてゐるより仕方がゐるめえ」
「何でも宜いから其時の都合のいいやうにお言ひ、それからお前、短氣を出さないでよく奉公をし

なくては可けないよ」
「旨く勤まるか如何だか、それにしても君ちやん、お前の方は如何なるのだい、お前はあの輕業と一緒に旅に出る氣なのかい」
「ああ、少しの間だから行つて見ようと思ふの、いつまで斯うしてゐたつて仕方がないから、わたしも、あの人達のお伴をして旅に出て見ることにしようと思ふの」
「もう返事をしてしまつたのかい」
「ええ」
「旅に出るのは危ないぜ」
「でも永いことぢやないから」
「何方の方へ行くんだい」
「甲州とやらへ」
「甲州へ」
「直ぐ、歸つて來ますよ」
お君は疊みかけてゐた着物をまた疊みはじめます。
「君ちやん」
米友は燈下に着物を疊むお君の姿を横の方から暫くながめてゐて、思出したやうに名を呼びました。

「何だえ」
お君は着物を疊みながら返事。
「お前は旅へ行く、俺らは奉公に行く。さうすると、また暫く會へないね」
「何だい、友さん、そんなに心細いやうな事を言つてさ」
「でも暫く會へないぢやないか」
「暫く會へないには違ひないけれど、お前の言ふのは何だか一生會へないやうな心細い云ひ方をするから」
「一生會へないかも知れないからさ」
「緣起でもないことを言つてお呉れでない、一生會へないなんて」
「それでも何だか其んな氣がする、これつきり一生會へないやうな氣持がする」
「また其んな事を」
「お前、その疊んでゐる着物は、そりや、あの親方さんから貰つたんだね」
「さうだよ、丁度わたしの身體に合つてゐるから、持つてお出でと云つて、あの親方さんが呉れたの、まだ一度位しきや手を通した事が無いんだよ」
「綺麗な着物だね」
「それからお前、櫛だの簪だの、足袋から下駄まで、そつくり拵へて呉れたのだよ、中々金目のも

ので、わたし達が二年や三年稼いだからつて此れだけのものは出來やしない」
「お前、そんなに澤山貰つて嬉しいかい、有難いと思つてるのかい」
「そりや誰だつて、こんなに結構なものを貰へば嬉しいと思ひますわ、嬉しいと思へばお禮の言葉も出るぢやありませんか」
「左樣だらうなあ」
「ほんたうに、あの親方さんは親切な人ですよ、自分の妹のやうに、わたしの面倒を見て呉れますから」
「けれどもね、君ちやん」
「ええ」
「あれは本當の親切ですると、お前は思つてゐるのかね」
「本當の親切……本當も嘘もありやしない、此のセチ辛い世の中に、こんなにして下さる人が二人と有りませうか」
「君ちやん、お前は正直だから、何でも人のする事を、する通りに受けてしまふんだが、伊勢の拜田村にゐた時はそれで宜いけれど、江戸といふ處は其れでは通らないことがあるんだから」
「ホホホ、お前は可笑しな事をいふ、何處の國へ行つたつて人情に變りといふものがある筈はないぢやないか」

「處が中々、そんなわけにばかりは行かないのだよ、俺らの身にしたつて、あんな約束では無かつたのだけれど、江戸へ來て見ると、直に眞黑く塗られたのは、この通り洗へば落ちるけれども、君ちやん、お前が若し眞黑く塗られると、洗つたつて如何したつて落ちやしないよ」
米友は今更のやうに自分の腕を撫でて見て、それから散切になつた頭の毛をコキ上げる。
「ホホホ、友さん、お前は今日は如何かしてゐるね」
お君は無邪氣に笑ひます。
「まさか、わたしを眞黑にして印度人に仕立てるやうな事も無いでせう、そんな事をしたつて、わたしでは見物が納まりませんからね」
「眞黑にするといふのは、其の事ぢや無えんだ、お前の身體を眞黑にしようと云ふんぢや無えのだ」
「何處が黑くなるの」
「はは、まだお前は其れが氣が附かねえんだ、心が黑くなると可けねえんだ」
「心が黑くなる、馬鹿な事をお言ひでない、心なんていふものには色は有りやしない」
「それは無いさ、今の處、お前の心には色が無いんだから、それで大事にしなくちや可けねえ」
「友さん、お前は學者だから、心が如何だなんて云ふんだらうけれど、わたしは學問が無いから其んな事は知らないよ、黑くなつたら洗へば宜いぢやないか」
「洗つても落ちねえ」

「何だか、お前の言ふことは判らない」
「判らねえから、それで俺らは心配なんだ、黒くなると二度と洗ひ落すことは出來ないんだから」
「まだ、あんな事を言つてゐる」
それで暫く二人の無邪氣な會話は杜切れたが、着物を疊んでゐるお君の手は休まない、米友は兩手で頤を押へて下を向いてゐたが
「君ちやん、どうだい、旅へ出ることを止しにしてしまつたら」
「ええ、わたしに旅へ出るのを止めにしろつて」
お君は疊みかけた手を休めて米友の方を向いて眼を圓くする。
「左樣して呉れると、いつまでも一緒に居られるんだ」
「そんな事を言つたつてお前、もう二三日で此處に泊つてゐる宿賃も無くなつてしまふのに、お前は奉公に行くんだらう、とても二人一緒に過ごして行ける事は出來ないぢやないか、それにお前、今になつて急に行けないなんて、あれほど恩になつた親方さんの前へ其んな事が言へるものかね」
「其れは左樣だらう、其れぢやあ如何も仕方が無えから行つてお出で」
「情ない言ひ方をするねえ、もつと威勢よく力を附けて言つて呉れなくちや」
お君は何處までも、米友の言ふことを氣にしないで、いつもの通り輕くあしらつて、着物を疊んでゐるが、米友は、やつぱり浮かない面をしてゐると、破障子の裏で、猫！

「ああ、忘れてゐた、ムクにまだ夕飯をやらなかつた」
米友は、あわて氣味に頭を上げると
「ああ、さうさう、可哀想にムクにまだ夕飯をやらなかつたのね」
お君も面を上げる。米友は立つて障子を開けると、椽側に首を乘せてムクが尾を振つて鼻を鳴らしてゐます。
「ムクや」
米友は直ぐに臺所から食物を持つて來てムクに食べさせました。
「ムクや」
尾を輕く振つて夕飯を食つてゐるムク、それを見ながら米友が
「ムク、俺らは明日から奉公に行くんだぞ、君ちやんは近いうち旅へ出るんだぞ、俺等はお前をつれて行く事は出來ねえが……さうだ、お前は君ちやんに附いて行け、俺らの代りに君ちやんに附いて行け」斯う云つて米友の面が急に明るくなつて
「君ちやん、君ちやん」
「何」
「旅へ出るにもムクは伴れて行くんだらうな、ムクを伴れて行つても親方は叱言を言やしないんだらうね」

お君は頷いて
「ああ、それは宜いんだよ、ムクには此れから藝を仕込むなんて、親方も大へん可愛がつてるから」
「それで安心した、行つてお出で、行つてお出で」
米友はホツと息をつきました。

三

米友が庭を掃いてゐると、木戸口をガラリと開けて入つて來たのは十四五の少年であります。子供の癖に氣取つた容姿をして、小風呂敷を抱へた容子が、いかにもこまつちやくれてゐるが、よく見ると其れは甲州の山の中で金を探してゐた忠作でした。
「友造、誰も來なかつたか」
「へえ、誰も參りませんよ」
「ああ、さうか」
頤をしやくつて忠作は家の中へ入つてしまふと、米友は其の後を見送つて
「馬鹿にしてやがら」
相變らず跛足を引きながら庭を掃いてゐると

「友造、友造」
奥の方で呼ぶ聲がします。
「馬鹿にしてやがら、友造、友造と嚙んで吐き出すやうに言やがる」
「友造、友造」
「自暴になつて呼んでやがる、返事をしてやらねえ」
「友造、友造」
「ははははのはだ、友造が如何したんだ、友造で惡けりや勝手にしろ」
「友造、友造」
「此方へ遣つて來るな、怒つてやがる、小餓鬼の癖に金貸なんぞをしやがつて、生意氣な野郎だから返事をしてやらねえ」
「友造、友造」
キンキンした聲で怒鳴りながら奥から飛んで來る容子。
「隱れろ、隱れろ」
友造の米友は椽の下へソツと隱れました。
「おや、此處にも居ない、友造、何處へ行つたんだ、友造」
「ははははのはだ」

米友が椽の下で舌を出すと、忠作はその上で床板を踏み鳴らします。

「友造、友造」

「はーい」

椽の下から返事。

「椽の下に居やがる、何をしてゐるんだ、先から彼れほど呼んだのが聞えないのか」

「聞えませんでした」

「嘘を吐くな」

「嘘ぢやありませんよ」

「嘘でなけりや貴様は聾だ、跛足の上に聾と來ては形なしだ」

「何だと」

「何！　主人に向つて貴様は口答へをするか、主人に向つて」

いつもの米友ならば中々默つてはゐないのだが、今日は奉公人の友造、短氣をしては可けないといふことが、お君からの呉々もの餞別の言葉でもあり、折角仲人に立つて呉れた道庵先生への義理でもあると感心に辛抱しました。

「如何も仕方がねえ、成程お前さんは主人だ」

米友――ここへ來てからは友造といふ名に改められたが、面を膨らかして、御主人様のいふ事を默

つて聞いてゐると

「馬鹿、日なしを集めに行つて來い」

「へい」

「さつさと掃いてしまつて此方へ廻れ、よく呑込めるやうにしてやるから」

忠作は障子を荒々しく締め切つて奥へ行つてしまひました。

「ちえッ」

友造は舌打ちをして

「厭になつちまふな、また日なし集めにやられるんだ、日なし集めは俺等は大嫌ひだ、ナゼだと云へば、あの申譯を聞くのが厭なんだ、さうかと云つて思ふやうに集まらねえと、あの小僧ッ子の御主人様が、ガミガミ云やがる、嫌だなあ、嫌だなあ」

友造は口小言を云つて庭を廻りました。

米友の友造が貸金を集めに行つたあとでも、忠作はなほ一生懸命に算盤と首つ引きをしてゐる處へ入り込んで來たのが丸髷の町家風の年増でありました。いつの間に變つたか、これは妻戀坂のお絹であります。

「七軒町の小間物屋さんが申譯に來たから、そんなら其れで宜いと云つて歸してしまひましたよ」

「歸してしまつたつて」忠作は澁面を造つて後を見返り
「歸してしまつては困るぢやありませんか、あの口は十五兩一分で貸してあるんですよ、今時ああいふ走りの金を十五兩一分で融通するなんといふのは格別の計ひなんですよ、それを有難いとも思はずに待つて呉れ、待つて呉れで、今日で三日目だらう、いいわ、いいわで歸して貰つちゃ困りますね」
「でも、あの人は氣前のいい人だから有りさへすりやあ還すんだらうけれども、無いから還せないのだらう、性の知れた人だから少し位待つて上げたつていいだらう」
「これは驚いた、そんな了簡で金貸が出來るものか、今度來たら私の處へ取次いで下さい、私が掛合ふから、いや其んな間緩い事を云つては居られん、今晩にも私が出向いて行つて取つて來ますから」
「可いぢやあないかね、二日や三日は」
「可けません、そんな了簡では金貸は出來ません」
「金貸といふ商賣も思つたより忙しい商賣だねえ」
「忙しくつて結構、忙しくないやうでは上つたりですよ、お蔭樣で、これ御覽なさい、帳面尻が鼠算のやうに殖えて行く、どうです、をばさん、元金が利息を生み、利息がまた子を產むんですからね、その子がまた孫を產むんですから、放つて置いてもメキメキと殖えて行くんですよ、をばさんも少し算盤の勘定を覺えて下さい、利息の見つもりなんぞを呑み込んで置いて呉れないと困る、私一人で朝から晩までやつてゐるのも面白いけれども、をばさんにも少し覺えて置いて貰はないと困ることがあ

るでせう」
「使ふ方なら幾らでも引受けるが儲ける方は性に合はない」
「さうではありませんよ、その道へ入つて見ると此んな面白いことはない、何しろ廿五兩一分といふのが利息の通り相場で、廿五兩貸して月に一分の利息を上げる、其れより上を取つてはならない事にお上で定めてあるんだが、どうしてどうして裏は其んなものではない、十五兩一分から十兩一分、五兩一分なんといふのも珍しくはないのですからね、それで向ふが折入つて御無心に來る、此方が高く止まつて其れで忌やならおよしなさいといふ腹でゐると、背に腹は換られないから向ふが往生してしまふんでさあ、向ふに働かして此方は懷手をしてゐて旨い汁は皆んな吸ひ上げてしまふ、こんな面白い商賣は又とあるもんぢやない、これから追々大盡金といふのを初めて見ようと思つてゐますよ、大盡金といふのは大身や金持の若旦那なんぞが親や家來に內密で遊ぶ金を貸すんですね、これは思ひ切つて高い利息を取つて、さうして取りはづれのない仕事、ナニ證文面は御規則通り廿五兩一分にして置くから、罷り間違つて表沙汰になつた處で、其れだけの金は取れるんだ、そんな心配はありませんよ、此方が表沙汰にしようと思つても向ふで折入つて來るから……」
忠作は帳面と算盤を見比べながら獨り悅に入るのを、お絹は面白くもない面をして
「わたしの知つてる人が證人に立つから百兩融通して貰ひたいと云つて來たが如何だらう、借主は兩國で景氣のいい見世物師だといふ話だが、證人が確かだから……」

「見世物師」
「ええ、兩國に出てゐたのが今度、旅を打つて廻らうといふのに、仕込や何かで金がかかるから少しばかり借りて置きたいと云ふんですよ」
「成程、見世物師なんといふものは、日錢が上がつてあれで當ると中々儲かるものだから都合して上げてもいいが……」
「今晩、また相談に來ると云つてゐたよ、よく其の時に聞いて見たら宜いでせう」
「向ふの話ばかり聞いてゐても駄目、實地に行つて容子を見て、それから抵當になりさうなものの目利をした上で……」
「そんなら行つて御覽」
「外にも廻る處があるから、夕飯が濟んだら出かけませう、兩國は何と云ひましたかね」
「何と云つたか、わたしも能く知らない、名札が置いてあつた筈だから見て上げよう」
お絹は氣のないやうに、これだけの事を言ひぱなしにして自分の居間へ歸つてしまひました。居間へ歸つてからお絹は、机に凭れてホツと息をついて
「ほんとに厭になつてしまふ、あんな子供の癖に朝から晩までお金の事、元金が幾らで利息が幾ら、それより外に言ふことは有りやしない、彼地から來るときは賢さうな子だから、見處がありさうに思つて、伴れて來て何かと世話をしてやらうと來て見れば、殿様は甲州勤番、わたしも此れから如何し

て世渡りをしようかと途まどひをしてゐた處へ、どうしてあの子が聞き出して來たか、金貸をすると儲かると言ひ出して、その利息勘定などを、わたしの目の前へ持つて來て見せるものだから、わたしも眼から鼻へ抜けるやうなあの子の賢いのに感心して、それではまあ、やつて御覽と云つて、それからあの子の持つてゐた金の塊と、わたしの使ひ殘りのお金を資本にして、初めさせて見ると、調子はいいにはいいが、ああ細かくなつて元金と利息の外には眼がないやうになつてしまつたのでは、末の事が思はれる、この頃ではコマシヤクれた厭やな餓鬼だ、見るのも厭になつてしまつた、何とかしてわたしはわたしだけのお金を持つて勝手に暮して行きたい、さうしなくちや馬鹿々々しくて仕方がない」
お絹は續いてこんな事を考へ
「今晩は何處へか出かけてやらう、それにしても困つたのはお金、一々あの子が勘定をして封印をして、他の人には手もつけさせないやうにしてあるんだが、一つ探して見てやらうか、あとで文句を云ふだらう、成程斯うして置けば、お金はズンズン利に利を産んで殖えて行くだらうけれど、遣へないお金では全くつまらない、よし、歸つて來たら相談をして、わたしの取るだけのものは取つて別れてしまはう、わたしは其の金で、一軒を立てて、お花のお師匠……もう其んな事をしても居られない、いい加減の相手があれば、と云つて好いたらしいのは頼みにならないし、頼みになりさうなのは碌でもなし、如何していいかわからない」

お絹は忠作を旨く使つて、番頭も小僧も兼ねた仕事をさせ、自分は蔭で好きな事をして面白をかしく暮さうといふ目算であつたのが、その事業は、どうやら思ふやうに行くが、お絹の目算は外れ、肝腎の金錢の出納、收支の自由は忠作が一手に握つてしまつて、一分一朱も帳面が固く、お絹が却て虚器を擁するやうになつてしまつたから厭氣がさして堪まらないのです。

四

貸金を集めに一廻りして來た米友。

神田の柳原河岸を通りかかつたのは、今で云へば夜の八時頃でした、懐中には十兩餘の金があつて跛足を引き引きやつて來ると闇の中から

「ちよいと、旦那」

呼ばれて足をとどめた米友の友造が

「誰だ」

「容子のよい旦那」

闇い處から呼んでゐるのは女の聲。丁度その時分、他に往來が途斷えてゐたから、友造を見かけて呼んだものに違ひないと思はれます。

「俺らに何か用があるのかい」

「此方へいらつしやいよ」

「お前は其處で何をしてるんだ」

「そんな事を云はずに此方へいらつしやいよ、ほんたうに容子のいいお方」

「馬鹿にしてやがら」

「小作りで華奢なお方」

「馬鹿にしてやがら、小作りだらうと大作りだらうとお前の世話にやならねえ」

「ねえ旦那」

「用があるなら早く云ひねえな」

「何を云つてるんですよ、用があるから呼んだんぢやないか」

「そんなら早く云つてしまひねえ、俺らはこれでも主人のお使先だ」

「まあ悠くりしておいでなさいよ」

「大事の金を懐中に持つてるんだ、主人の金だから大事だ」

「お金、頼もしいわ、そんなに大事なお金なら暫らく預かつて上げやうぢやありませんか」

「お前は俺らを調戯ふつもりなんだな、女の癖に、この暗い處で、男をつかまへて調戯ふとは呆れたもんだ、俺らだからいいけれども外の男だと飛んだ目に逢ふぜ」

「あははだ、お前さん、此の柳原の土手を始めて通るんだね」
「初めてなもんかい、これで三度目だい」
「三度目、それでも夜になつて通るのは初めてだらう」
「そりや左様よ」
「左様だらうと思つた、この柳原は晝間通るのと、夜通るのとは規則が違ふんですからね、夜になつてから此の通りを通るには税金がかかる事を知らないだらう」
「税金がかかる」
「税金をわたしに納めてからでなければ通れない規則なんですからね」
「馬鹿野郎」
女がからみついて來るから友造は面倒がつて逃げ出しました。逃げ出すといつても足の不自由な友造だから、早速は逃げられないで家鴨のやうな恰好をして駈け出しました。女は其れきり追ひもしないで
「ホホホ、小柄で華奢で、さうして歩よのお上手な旦那、またいらつしやいよ」
友造の逃げつぷりを立つて見て笑つてゐました。息せききつて逃げて來た友造。
「馬鹿にしてやがら、女でなければ、打ちのめして呉れるんだが」
漸くにして長者町の奉公先へ歸つた友造は御主人の居間へ行つて見ましたが、何處へか出て行つた

らしく、暫らく待つて見ても歸る容子がないから、自分の部屋へ歸つて一息ついてゐる間に、疲れが出てついうとうとと寢込んでしまひました。翌朝になつて忠作の前へ呼び出された友造が
「困つたなア」
「馬鹿」
忠作の爲に頭ごなしに叱られました。
「だから財布は首へ掛けなくちやならんと言つて置いたぢやないか、グルグル捲にして懐中へ突つ込んで置くから此んな事になるんだ」
「エエと、柳原の土手だ、たしかに彼の時に落したに違えねえ」
「柳原の土手で如何したんだ」
「あの土手で女の追剝が出やがつたから其奴を追拂つて逃げた時」
「馬鹿、女の追剝といふ奴があるか」忠作は苦りきつて
「ありや夜鷹といふものだ」
「成程」
「何が成程だ、その夜鷹に捲き上げられたんだらう」
「如何も仕方が無え、もう一ぺん行つて探して來る」
「うむ、探して來い、出なけりや道庵さんに話して、折角だがお前に暇を出すから、そのつもりで

確かり探して來い」

昨晩、十兩餘りの金を何時何處へ落したとも知らずに落してしまつたが、その晩は疲れて寢込んだから今朝まで氣がつきませんでした、いざ御主人忠作の前へ並べようと見ると其の金が無いので、米友も色を變へてしまつた、といふわけで、思ひ當るのは昨晩の柳原へ出た奇怪な女の振舞であります。あの邊に少し出入をしたものは誰でも知つてゐる筈の夜鷹です。それを米友はまだ夜鷹と知らないでゐるのに、忠作はまた友造が夜鷹に引つかかつて捲き上げられたとばかり邪推して、金が出なければ米友を追出すことに了簡を定めてゐるらしい。

「弱つたな」

跛足を引き引き柳原の方を差して行く。柳原へ行つて見た處で、あの女が取つたものならば、出て來る筈はないし、落したものなら最早拾はれてしまつてゐる筈。斯うと知つたらあの女の面をよく見て置けば好かつたものをと米友は今更に悔みます。悔んだ處で、闇い處から出て來たものだから面の見定めやうもなかつたし、ただ聲に聞き覺えがあるといへばあるのだが、それだつて別段耳に立つ程の聲でも無かつたから、聲だけでは今眼の前へ其の女が現はれて來た處でわからう筈はありません。

「小作りで華奢で、歩よのお上手な旦那と云やがつた、馬鹿にしてやがら」

米友は昨晩の女の言草を思ひ出して腹を立てました。そんなに冷かされては米友だつて腹を立つのは無理もないやうなものだが、それよりも、人の懐中物を奪はうとするやうな性質の惡い女が江戸の

市中に徘徊してゐるかと思へば、それが憤慨に堪へないのです。

「向ふでは知つてるだらう、向ふでは、俺らの歩きつきまで見てゐるんだから、俺らが柳原を通れば、若しあの女が正直な女でありさへすりや、拾つた金を返して呉れるに定まつてゐるが、夜鷹でもする位の奴だから、拾つた處で知らん面をしてゐるに定まつてる、さうなると俺らはまたあの家を追出されるんだ、何方へ行つてもホントに詰らねえ」

米友は且つ憤慨し、且つ悲觀してしまつて柳原の昨晩騒ぎのあつた處まで來て見たけれども、河岸に材木が轉がつてゐたり葭簀張がしてあつたりする位のもので、別段其處に人が住んでゐる容子もないし

「ちよいと、容子のよい旦那」

と云つて呼びかけるやうな女の氣配も見えないから、ボカンとして立ち盡して居ました。

十兩と少しの金を尋ね出さなければ米友は御主人の家へ歸ることが出來ないのです。

神田と淺草の方面を當もなく歩き廻つてゐたが當のないことは何處まで行つても當がないから、一ぜん飯を食べて腹をこしらへて、再び柳原通りの和泉橋の袂へ戻つて來ました。

「詰らねえ」

この時後の方から蓙のやうな卷いたものを抱へて三人連の女がやつて來ました。其の三人の女をよく見ると、その一人は手拭を被らないで、頭の上へ御幣のやうな白紙を結んでゐます。その白紙がひ

らひらと河岸の夕風で踊つてゐる處が何となく目につきました。
「ちよいと旦那」
呼びかけられて米友は眼をパチパチしました。
「もし小柄で華奢なお方」
「ナニ」
米友は、慥かに聞いた聲だと思ひました。
「何を其處で考へてゐるんですよ」
「少し探し物があるんだ」
「おや、探し物」
と云つた女は、ヅカヅカと米友の傍に寄つて來ました。
「其處に突立つてゐたつて、探し物は出て來やしませんよ、歩いて御覽なさい、小柄で華奢で歩よのお上手なお方」
「おや、お前は」
「探し物といふのはお金でせう、鬱金の財布に入れたお金の事でせう、それをお前さんは探して出でなさるんでせう」
「それ、それだ」

「そんなら御心配なさいますな、ちやあんとわたしが預かつてありますから」
「あ、さうか、それは宜かつた」
米友はホッと安心の胸を撫で下ろすのを女は笑つて
「意氣地のない人だねえ、女を見て、あんなに逃げなくつてもいいぢやないか」
「うむ」
「お前さんの逃げつぷりが餘まり可笑しいから後を暫く見送つてゐましたのよ、さうすると、足許に落ちてゐたのが財布、手に取つて見た時分には、もうお前さんの姿が見えなかつたから、少しばかり追ひかけて見たけれど、何方へお出でなすつたか分らなかつたから預かつて置きました」
「有難う、あれは俺らの金ぢやないんだ、主人の金なんだから」
「念の爲に、わたしは中をよく調べて置きました、さうして直ぐにお係りへ屆けようと思つたけれど、さうすると面倒になるし、仲間の者に見せれば、直ぐに使はれてしまひますから、見てごらんなさい、こんな細工をしましたのよ、わたしの頭の上の仕掛を」
女は御幣のやうな白い紙の片がひらひらしてゐる頭を米友の前へ突き出して
「お前さん、この白い紙を取つて頂戴、お前さんに取らせようと思つて、わたしはワザワザ此んな事をしたんだから、わたしが、こんなことをして置いたのは、若しやお前さんがお金を失くして探しに來やしないかと思つて、その時の目印なんですよ、暗い處だからお互に面付がわかるんぢやなし、

わたしの方では、お前さんの小柄なのと、歩きつきのお上手なのに覺えがあるんだけれども、お前さんの方ではわたしがわかるまいと思つて、其の目印に此の紙を頭に附けたんだから、この紙をお前さんに取つて貰へば本望といふものだよ」

「ああ、さうか、俺らはさつきから何の爲にお前がそんな紙きれを頭へ結ひつけてゐるのかわからなかつた」

「此方へお出でなさい、今いふ通り人に知れると面倒になるから、誰にも知れないやうにわたしが善い處へそつと隱して置いて上げたのだから」

女は米友を土藏の裏へ引張つて行つて河岸の水際まで米友をつれて來た時に

「その石を轉がしてごらんなさい」

「あ、これだ、これだ」

石を轉がすと其の下にあつたのは正に自分の持つて居た財布。

「早く持つてお歸りなさい、それが爲に御主人を失敗るやうな事があると、お前さんもまだお若い人だから爲にならないから、さうしてこれを御緣にまた遊びにお出でなさいよ」

「お前さんの家は何處で、名前は何んといふんだ、改めてお禮に上らなくちやならねえ」

「わたしの家、そんな事は如何でも好うございますよ、お禮なんぞは可けません——名前だけは言ひませう、お蝶と云ふんですよ、此處へ來て、今時分、お蝶お蝶といへば、大概お目にかかれますわ」

二

落した金をお蝶といふ夜鷹の女から受取つた米友は不思議な感じに打たれます。

賣女のうちでも一番卑しい夜鷹、二十文か三十文の金で、女の一番大切な操を切賣りする女、この女に十兩の金が欲しくはないだらうか、取つても隱しても罪にはならない十兩の金は大事に預かつて、返しても返さなくても知れる筈のない人へ返してやる、さうして掛け替の無い大事な操は二十文三十文の金に替へて惜氣がないといふことが兎にも角にも不思議です。

不思議に思ひながら長者町へ歸つて來て、主人忠作の家へ來るには來たが、厭な厭な氣持に打たれてしまひました。もう一足も此の家へ足を入れる氣にはなりませんでした。何等の理窟もなしに此の家が厭で厭で堪まらなくなりました。

「金は持つて來たぞ、そうら、確にお歸し申す」

米友は大音を揚げて財布ぐるみそつくりと格子戸の中へ投げ込むや否や、物に逐はれるやうに一目散に逃げ出して來ました。跛足の足で逃げ出しました。

又も忠作の家を追ん出てしまつた米友は何處をどうブラブラ歩いて來たか、やがて下谷の山崎町の太郎稲荷の處まで來てしまひました。そこへ來ると門前に黒山のやうに人がたかつてゐます。

「貧窮組が出來たんだ、貧窮組」

米友が社前をのぞいて見ると、大釜が据ゑてあつて其れでお粥を煮てゐます。世話人のやうな威勢のいいのが五六人で、そのお粥の給仕をしてやると、群がり集まつた連中が旨さうに食つてゐます。切溜の中には澤庵や煮染や樣々のお菜が入れてあります。

「有難え、貧窮組が出來た」

その大釜からお粥を貰つて食つてゐる人を見ると、貧乏人ばかりではないやうです。乞食非人の體の者などは一人もゐないで、小さくとも一家を持つてゐるやうな人間ばかりですから、米友も變に思つて見てゐると、しまひには給仕をしてゐた世話人らしいのが、其のお粥を食ひはじめます。さうすると今まで食さして貰つた貧窮人が今度は替り合つてお給仕をしてやつてゐるから、米友はいよいよ變に想つて

「施しをするんだか、されるんだか判らねえ」

と云つてる口許へ、世話人がお粥の椀を持つて來て

「さあ食ひねえ、貧窮組」

米友は煙に捲かれて其のお椀を手に取りました。あとからあとからとやつて來る連中、見れば必らずしも食ふに困るやうな貧乏人のみではないと見えるが

「貧窮組が出來たさうで、どうかお仲間にして戴きたうございます」

お粥を貰つては食べ、食べてしまふと給仕方に廻る、誰も少しも遠慮をするでもなければお禮を申述べるでもないから米友も調子に乘つて其のお粥を食べてしまひました。腹の空いてゐる時だから旨い、ペロリと一杯を平げた時、またお代りを世話人が鼻先へ持つて來て呉れたから、それもペロリと平げてしまひました。たうとう四杯まで米友が其のお粥を平げてしまつて澤庵をかじつてゐると

「さあ、これから廣小路へ押し出すんだ」

この連中が雪崩を打つて太郎稲荷を押し出したから米友も其れと一緒になつて跛足を引きます。

「貧窮組」といふのも可笑なもので誰がもくろんで、誰が煽動たともないうちに斯うして大勢が集まつて町内から町内へと繰込んで行くのです。物持の家へ行つては、米とお菜と金を貰つて、それでお粥をこしらへて食ひます。それを食つてしまふと、また鬨の聲を上げて次の町内へ繰込みます。こちらに一組出來るとあちらに一組出來ます。けれども可笑な事には別に其れが亂暴を働くといふのではありません。ただ斯うして町内から町内を食つて歩くだけの事らしいのです。それに江戸名物の彌次馬が面白がつて食付いて飛び出す、出ないと幅が利かなくなつたり憎まれたりするから、表通りの商人までが此の貧窮組へ飛び込んでお粥の施しを受け、一ぱしの貧窮人らしい面をします。

この連中が、昌平橋の處へ來て、町角へ大釜を据ゑました。誰が何處から持つて來たか、荷車が二三臺、米とお菜が澤山に積んであります。さうすると川の向ふと此方から貧窮人が眞黑くなつて押出して來ました。

併しながら昌平橋で貧窮組と別れた米友はひとり柳原河岸へやつて來ました。

「お蝶さん」

「誰あれ」

米友に呼ばれた夜鷹のお蝶は土藏の裏から出て來ました。

「あら、お前さんはお金を落した人」

「お蝶さん、俺らはお禮に來たんだ」

「お禮なんぞ……」

「お禮と云つた處で、何も土産を持つて來やしないよ、俺らは主人の家を追出ちまつたんだから一

「まあ、追出されたの」

「追出されたんぢやねえ、追ん出たんだ」

「如何して追ん出たの」

「自分から出ちまつたんだ、あんまり癪にさはるから出ちまつたんだ、お前さんに拾つて貰つた財布を家の中へ叩き込んで、それつきりで家を追ん出ちまつたんだ、それだから、今の俺らは一文無しで宿なしよ、お前さんにはお禮をしなくちや濟まねえのだが、さういふわけで、折角お金を拾つて貰つたが、お禮をする事が出來ねえんだ、けれどもね、默つてゐちや惡いから、口だけで、お禮を言ひに來たんだ、また俺らが何處か奉公口が見つかつて、小遣ひでも出來たら改めてお禮に來るから、惡

くなく思つて貰ひてえ」

「まあ、お前さんは中々感心な人ね、その心持だけで澤山よ、けれども旦那の家をムカツ腹で飛び出すなんて、それはお前さんが若いからよ、思ひ直してお詫をしてお歸りよ」

「嫌な事だ、嫌な事だ」

「一刻な人だねえ、さうしてこれから何處へ行くつもりなの」

「何處へ行くといつて當は無えんだ」

「どうもお前さんは口の利きつぷりや何かが可笑しな人だよ、心持に毒のなかりさうな人だよ、ほんとに行く處が無ければわたしの家へお出でなさいな、親方に話して上げるから、わたしの親方の家は本所の鐘撞道新道にあるのよ」

六

福士川から徳間入をした宇津木兵馬と七兵衞は、机龍之助を發見することなくして、却てがんりきの百藏を發見してしまひました。

「兄い、氣を確かり持たなくちや可けねえ」

「あッ、拔いちや可けません、先生、お拔きなすつちや可けません、拔いてしまつちや納まりがつ

きません」

がんりきは引つづいて囈言ばかり云つてゐます。此の山入りでは、僅かにがんりきを得ただけで山道を元の通りに下つて、一行は又富士川の岸に出ました。

富士川を登る舟は追手を孕んだ時は却て下る船よりも速いことがあります。福士から此の船に乗つた兵馬と七兵衛とがんきりと三人は早くも甲府に着きました。

机龍之助の居る所は彼の白根の麓。かうしてゐる中に秋も闌けてしまつて雪にでもなつては道の難儀が思ひやられる。兵馬は心急がれてゐたけれども、名にし負ふ山また山、相當の用意なくては入ることの出來ない處であります。

甲府の南の郊外にある一蓮寺といふのは遊行念佛の道場で聞えた寺。

折柄そこの鎭守にお祭禮がありました。

「江戸名物、女輕業大一座」

本堂の屋根よりも高く幕張をした小屋。泥繪具で描いた看板の强い色彩。高い處へ登つて片足を撞木にかけて逆にブラ下がつてゐる處、社祢を着て高足駄を穿いて三寶を積み重ねた上に立つてゐる娘の頭から水が吹き出す、力持ちの女の便々たる腹の上で大の男が立臼を据ゑて餅を搗く、そんなやうな繪が幾枚も幾枚も並べられてある眞中の處に

「所作事、道成寺入相鐘」

怪しげな拙亭流、それを思ひ切つて筆太に書いた下には、鱗の衣裳を振り亂した美しい姫。大鐘と撞木と、坊主が數十人。繪の具が、ベトベトとして生な色。

そのあたりは押返されないほどの人混の中へ一人の身扮卑しからぬ武士が伴をつれて割り込んで來ました。

頭巾こそ被つてゐるけれども此れは紛れもなく神尾主膳の微行姿であります。

「ははあ、江戸名物、女輕業大一座」

神尾主膳も亦此の繪看板を打ち仰ぐと

「評判でござりまする、女といふので評判なのでござりまする、太夫から下座に至るまで皆んな年頃の女、それが評判で、御覽の通り大入を占めて居りまする」

草履取が說明を申上げると

「成程、兎も角江戸から出て來たものに違ひはなからう、見物して參らう、跟いて來い」

木戸口に立つと

「如何やら御重役のお微行らしい」

木戸番が頭取に耳うちをしました。

この輕業の一行は兩國に出てゐた一行。米友を黑ん坊に仕立てた一座、女の輕業足藝の類は多くは前の通りで、新に加はつたお君が「道成寺」を出すといふ事が人氣でありました。

「君ちやん、御贔負があるよ」
樂屋ではお角が長い煙草から煙を吹いて
「着物を着替へて面を直したら、ちよいと御挨拶に行つておいで、正面の棧敷に頭巾を被つて、お伴の衆と一緒に見物しておいでなすつた彼のお方さ、お前さんで無ければならないと仰有るんだよ、早く行つて御機嫌を取り結んでおいで、ザラにあるお侍さんとは違つて事によつたら御城代樣か御支配樣あたりのお微行かも知れないよ、早く行つてお出で、柳屋に待つていらつしやると御家來衆がお沙汰に來て下すつたんだから」
「お伺ひしなくては惡いでせうか、誰か代りに行つてもらひたうございますねえ」
「そんな事は出來ません、お前を名指なんだから」
「それでも親方さん、お酒を飲めの、泊つて行けのと御冗談を仰有ると、わたしにはお取持が出來ませんからね」
「いい時分には此方から迎へにやりますから安心しておいでなさい」
「お鶴さんか、お富さんが一緒に行つて下さるといいけれど」
「あの人達は、まだこれから藝にかかるんだから身體が明いてないよ」
「このまんまでは失禮でございますね」
「男衆の手も空いてゐないし、わたしが、ちよつと島田に纏めて上げよう」

「濟みません」
「どうせ碌な事は出來やしないけれど手取り早いのでは若い時から自慢なのよ」
鏡臺の前でお角はお君の眞黑な髪を梳きながら
「君ちやん、お前の毛は良い毛だねえ、斯うして摑んでゐると指が染まりさうだよ、さうしてお前さんには島田が一番よく似合つてよ、もう二三年すると丸髷が似合ふやうになるだらう、わたしもお前さんを何時までも此んな處へ置くのは惜しいと思つてるんだよ、だから早く何とかして上げたいと思つてゐるんだから、そのつもりで稼いで下さいよ、そのうちに容貌望みで玉の輿といふやうな事もないとは限らないから、下らないものに引掛らないやうに、口上言ひや折助なんぞがいくら色目を使つても白い齒は見せちや可けないよ、その代り身分と身上の確かな人であつたら、年の違ひや男振りなどは如何でも宜いから……」
こんな事を云ひながら親方の女は見てゐる間にお君の島田を結ひ上げてしまひました。
「それでは行つて參ります」
「ああ、行つておいで」
親方の女は、また煙草を吹かしながら、自分が結んでやつた島田髷の手際を自分ながら惚々と見てゐます。
「何だか一人では極まりが惡い、親方さん、おのムクを連れて行つても宜うございませう、わたしは

ムクを連れて行きたい」
「ムクを連れて行く……ムクは此れから梯登りをするんぢやないか」
「それでもムクを連れて行きたうございますわ」
「子供のやうな事をお言ひでないよ、ムクの梯登りと火の輪くぐりは呼物になつてゐて、あれで一枚看板の役者なんだから抜くことは出來ませんね」
「それでは、ムクの藝が濟みましたらば、ムクをわたしの迎へに柳屋まで寄越して下さいな、外の方が來て下さるのも宜いけれど、ムクを寄越して下されば、なほわたしは有難いと思ひますわ」
「それは藝が濟みさへすればムクを迎へに出してやりますよ、それから三味線を忘れずに持つておいで、お客様にお好みが無ければ其れまでだけれど、持つて行つても邪魔にはなるまいから」
さう云はれてお君は手慣れた三味を抱へて小屋の裏を出ました。丁度、空が澄んで月が出てゐました。
時は秋の末でも小屋の中の蒸しあつい空氣から外へ出て見るとひやりと身に沁みる寂しい心。
三味を抱へて客に招かれて行くわが身の影を見ると間の山の過ぎし昔が思はれます。故郷を出でて身は今甲州の山の夜の露。わづか三月とは經たぬ間に變れば變るものかな。それにつけてもムクを連れないのが、何とも云はれず心細くて堪りません。古市の大樓へ招かれては、夕べあしたの鐘の聲を古調で歌つて聞かせる時、追つても叱つてもムクばかりは離れることも無かつたのに、今宵他郷で久

し振に三味を抱へて、月にうつる我が影がたつた一つであることが悲しくなつて、ハラリと涙をこぼします……ムクは死んだわけでも殺されたのでも何でもなし、つい呼べば來る處にゐるのだけれど、お君は昔を思ひ出したからつい泣いてしまひました。

七

「役割、今日は一蓮寺のお開帳に行つて見やうぢやどざんせんか」
金助といつて小才の利く折助。
「さうよな、度々呼び出しを受けてるんだから行つて見てもいい」
役割の市五郎は、金助から誘はれて一蓮寺へ出かけて見ようといふ氣になつたのは一蓮寺の祭の夜は大きな賭場が開けてゐるからです。
「お伴を致しやせう」
二人は相携へて城内から一蓮寺をさして出掛けました。
「神尾の殿様にも困りものでどざいますな、ああなると手が附けられませんからな」
金助がいふ。
「むむ、全く困りものだ、甲府勝手へ廻されたのを自暴でああしておいでなさるんだから何をする

か知れたものぢやねえ、金公、お前抜からず目附をしてゐて呉れねえと困る」

「へえ、承知でございます、お頼まれ申した通り神尾の殿様のなさる事は一から十まで、わつしが方へ筒抜になつてゐますから、今日なんぞも一蓮寺の和歌の會へお出かけなさつて、まだお歸りの無え事まで、ちやんと心得てゐるのでございます」

「さうか、大將、もう一蓮寺へ出かけてゐるのか、では向ふへ行つて、變な處でぶつつかるかも知れねえ、金公、ここいらで一杯飲んで行かう、中へ入ると落着かねえから」

市五郎が先に立つて金助を柳屋といふのへ引張り込みました。

この別室には、問題の神尾主膳がお君の來るのを待つてゐるとは知らないで、二人は其處で一杯飲むことになりました。

「如何もヲカしいぞ、彼處に供待をしてゐるのは、ありや確かに神尾の草履取」

金助は手を洗ひに行つてから席へ戻つて斯ういひました。

「それぢや神尾が此處へ來てゐるのだらう、何處にゐるか當つて見ねえ」

「宜しうございますとも」金助は得意の腕を見せるのは此の時だと思つて

「それでは役割、ここは拙者が引受けますから、お開帳の方へは一人でお出かけなすつてお呉んなさいまし」

それとは知らず、別の座敷で神尾主膳は

「苦しうない、お君、初對面ではあるまいし、馴染の上の其方、遠慮は要らぬ」

馴染と云はれてお君は思はず面を上げた。併しどう思ひ返しても、こんなお侍に馴染と呼ばれるほど贔負にされた覺えはありません。

「お前の方で見覺えのないのも無理はない、此方ではよく覺えてゐる、伊勢の古市の備前屋でお前の面を見て、よく覺えてゐる、珍らしい處で會つたから其れで昔馴染のやうな氣がして、ツイそちを此處へ呼んで見る氣になつたのぢやわい」

「まあ、左樣でございましたか、伊勢の古市で……」

そこでお君も思ひ當つたけれども、古市で呼ばれた客の數は多數であります。このお侍が其のうちのドノお客であつたかといふことは、お君の記憶に殘つてゐませんでしたけれども、あの時分に贔負を受けた事のあるお客とすれば、やつぱりそれでも昔馴染。

「それとは存じませず失禮を致しました、お忘れなく御贔負下されまして重ね重ね有難う存じまする」

「それで宜しい、ここへ來て盃を受けて呉れ、そして久しぶりであの間の山節をまた一曲聞かせて貰ひたい」

「恐れ多うございますから此方で」

「何故其のやうに遠慮をする」
敷居より内へは入らないお君。それをもどかしがつて神尾主膳は疊を叩く。
「あのお座敷では恐れ多うございますから、お庭先で御機嫌を伺つた方が手前の勝手にございます
る。あの古市で致しました通り、このお庭で御挨拶を申上げませう」
「成程、古市では座敷へ上がらずに庭へ莚を敷いて聞かせて呉れたな、併しそれはあの土地の慣例
であらう、ここへ來てまで其の慣例を守らうとは愚かな遠慮」
その時に此の庭の石燈籠の蔭で人の氣配がするのを神尾主膳は早くも見咎めました。

八

金助と離れた役割の市五郎は、ひとりで、例の女輕業の見世物小屋の前までやつて來ました。
「成程、これが評判の女輕業か、一つ見てやらう」
懐手をしてヌツと木戸番の前を通り抜けようとして木戸を突かれました。木戸番も役割とは知らな
かつたものか、それとも知つて居ながら面が憎かつたものか、兎に角市五郎がヌツと懐手で中へ入ら
うとするのを押へてしまつて
「旦那、お錢をいただきます、木戸錢をお拂ひ下さいまし」

と云つたから、市五郎納まらないで
「やい、面を見て物を云へ」
ウンと木戸番を睨みつけましたが、木戸番とはいへ、多少江戸ッ兒の氣風を持つてゐたものと見え、
肝腎の市五郎の面を見て却つてフフンと笑つてしまひました。
市五郎に取つては容易ならぬ侮辱ですから、ムカツと怒つて、ポカリと一つ木戸番の横面を撲りつ
けました。
「この木偶の坊、巫山戯た眞似をしやがる」
木戸番は飛び下りて市五郎の横面を撲り返しました。
「此の野郎、俺を見損つたな、俺は役割だ、城内の役割だぞ」
「役割だか薪割だか知らねえが、あんまり巫山戯た野郎だ」
木戸番と役割とが此處で組打を始めてしまふと、最初から此の近い處にゐた口上言ひや出方や世話
役の連中、これもあんまり市五郎が横柄で亂暴だから飛んで來て
「おい、役割さんだといふぢやないか、役割さんを撲つては可けねえ」
仲裁する振をしてポカリと撲ります。
「役割さんに失禮をしては濟まねえ、八公謝罪つちまひな」
と云つて、またポカリポカリと撲ります。

「薪割ならば幾ら撲つてもいいけれど、役割さんを撲るやうな事があつては後で申譯がないから早く手を放したり」

と云つてはポカリポカリポカリと撲ります。

「役割を撲るのは善くねえ、役割を十八も撲るなんて其んな事があるものか、せめて十三位にして置け」

續け様にポカポカと撲りました。木戸の前に居た見物も、どちらかと云へば見世物側に同情があつて、市五郎の大面を憎がつてゐたのですから、さうなると面白がつて

「お前方は役割を撲るなんて、飛んでもないことをする、まあ俺達に任して呉れ」

と云つては市五郎をポカポカと撲る、氣の毒なのは市五郎で、ポカポカと八方から拳の雨を蒙つて、半死半生の體にまで袋叩きにされてしまひました。

「覺えてゐやがれ、役割の市五郎に、よくも恥をかかせやがつたな」

役割が撲られたといふ噂が八方へ散ると、丁度、その邊の賭場や何かに集まつてゐた多數の折助が共れを聞きつけたからソレと云つて飛び出して來ました。それで事が大きくなりました。

折助連中といへども、さう役割ばかりを有難がつてゐるものはない。中には市五郎がテラを取つたり頭を刎たり、自分ばかり甘い汁を吸つて、こちと等にはケチで、その癖忌に大物ぶつてゐるのを面憎がつてゐるのもあるのですから、市五郎が此處で撲られた事を却つて面白がつて、都合によつては自分も大勢と一緒に袋叩きの方へ廻らうといふ連中もないではないのですから、事情を聞けば、騒ぎは其んなに大きくならなかつたかも知れませんが、何しろ役割も市五郎ばかりではなく、中には人望のある役割もあるのだから、その何れの役割が撲られたのか、次第によつては折助一統の面にかかはると思つて博奕半で飛び出すと、かねて折助と懇意にしてゐる遊び人連中が其の加勢にと飛び出して哄と女輕業の前へ押寄せて來ました。

斯うなると、此の女輕業一軒ではなく、すべての見世物小屋がバッタリと商賣を止めて、女藝人や年寄は避難させ、丈夫さうな奴だけが合戰の用意をはじめます。長井兵助などは長い刀を頻りに振廻しました。

けれども騒動の中心になつたのはやはり女輕業、木戸も看板も滅茶々々に叩きこはされて、木戸前で組んづほぐれつしてゐた群集はドッとばかりに場内へ亂入してしまひました、其處で、また敵味方、彌次馬諸共に、入り亂れて撲り合ひ嚙み合ひになりました。

見物の中で血の氣の多いのは賴まれもしないに彌次馬の中へ飛び込んで喰ひ合ひ嚙み合ひます。幸ひに見物の中に氣の利いたのは菰張や板圍ひを切りほどいて女子供を其處から逃がしたから怪我人は大分あつたけれども、見物から死人は出さないで一通りは逃がしたけれど、可哀想に輕業をする美人連は、逃げ場を失うて、櫓の高みや輕業の臺の上に固まつて高みから泣き聲をあげてゐました。

「まあ如何しようねえ、お國さん、おやまさん、あれ、家の男衆が皆んな殺されちまふぢやないか、

わたし達は如何なるんでせうねえ、親方さん、どうしませう、助けて下さい、助けて下さい」

「其んなに騒がないで靜かにしておいで、其のうちにお役人が來て鎭めて下さるから、何だね、お前達は其んな意氣地のない、日頃危ない藝當をして命の綱を渡つてゐる癖に、もう少し確かりおし、愈ゝの時には梁を傳はつても逃げられるぢやないか」

「それでも親方さん、危ない、如何うしませうねえ、力持のおせいさん、お前は力持だからわたしを負つて逃げて下さいな、わたしはお前さんの蔭に隱れてゐるわ」

平常は危い藝當を平氣でやつてゐる輕業の美人連も、實地の修羅場では如何していいか解らないで、一固まりになつて慄へてゐると、其處へ一手の折助と遊び人とが梯傳ひにわつと集まつて來ました。

「あれ、下へ來ましたよ、怖い、親方さん、力持のおせいさん」

美人連は號泣する、折助共は先を爭うて梯子から此の美人國へ亂入しようとして、わーつと喚いて折重なつて梯子から落ちました。

それは力持のおせいさんが、今必死の場合に商賣物の立臼を目よりも高く差上げて投げて落すと、臼に打たれた折助十餘人が一度に轉び落ちたものです。

立臼の一擊で折助共も少し萎んだが、直ぐに盛り返して梯子や小屋の丸太を足場にして續々と登りはじめました。上からは有り合すもの、衣裳葛籠、煙草盆、煙管、茶碗、湯呑、香箱の類、太鼓、皷、笛や三味線までも投げ盡したが、もう立臼のやうな投げて投げ甲斐のあるものがありませんでした。

力持のおせいさんは、鐵の棒を舞臺に置いて來たことを齒噛をして口惜しがるけれども、ここには最早莚より外に獲物が無くなつてしまつたから、已むを得ず莚をクルクルと捲いて其れを打ち振り打ち振つて登り來る奴ばらを惱ましてゐます。

下では、折助と遊び人と木戸番と口上言ひと出方と彌次馬とが組んづほぐれつ揉み合つてゐると、近所の小屋からまたまた加勢が來る、彌次馬が來る、それを他にして、この美人連の隱れ家を見付け出した連中は可い氣になつて此の一角を占領して、美人連を分取らうとの興味から、蟻の甘きに附くが如く、投げられようと拂はれようと離れることではありません。

それと見て親方のお角は齒噛をしながら

「さあ、皆んな何でもいいから刄物をお持ち、剃刀も此處に五挺ばかりあるから分けて上げるよ、舞臺で使ふ脇差、刄引がしてあるけれども、此れでも無いにはマシだよ、傍へ寄つたら其の剃刀で面でも腕でも何處でも拘はないから、無茶苦茶に切つておやり、其の脇差は切れないんだから突いておやり、眼玉でも鼻でも遠慮することはないから突いておやり、何にも持たない人は簪を確かりと持つてゐて、いよいよ傍へ來た時に面の眞中へ突き通してやるんだよ、若し刄物を取られたら喰付いておやり、何處でも拘はず喰付いて引搔いておやり、おせいさん、お前は力持だから、お前を皆んなが恃みにしてゐるよ、確かり賴みますよ、お前さん一人で十人も廿人も手玉に取つておやり、お前さんは刄物を持たない方がいいよ、なに、わたしだつて五人や十人は相手になつて見せるからね、高の知

れた折助なんぞに、此の身體へ指でもさされて堪まるものか」
お角は剃刀一挺を手に持つて頻りと一座の美人連を勵まして、自分も城を枕に討死の覺悟。
力持のおせいさんは此れに勵まされて、持つてゐた莚を拋り出し、素手になつて、登り來る折助ばらの鼻向、眉間、眞向を突き落し撲り落す、その他の連中も、剃刀、脇差、簪の類、獲物々々を確かりと持つて必死の覺悟。
「あれ——火が附いた」
吊られてあつた篝火が、誰が切つたか、地に落ちて其れが小屋の一角に燃えうつる。誰も消す人はない。
「あれ親方さん、火が、この小屋が燒けてしまひますよ」
火を見た美人連は、折角勵まされた勇氣が一時に沮喪しました。莚張りと幕と板圍ひの小屋。火の手は附木を燒くより早い、メラメラと天井まで揚る赤い舌。
「そうれ、火事だ」
組んづほぐれつしてゐた命知らず、さすがに火には驚いて、組打をしながら逃げようとして一層の大混亂。美人連を取り圍んだ一隊は早く攻め落して分取を恣まにしてから火を避けようと強襲また強襲。
火の威勢がいよいよ天井を這ひ上つて黑い煙と白い煙が場內に濛々と湧き出した其の中から

「うわーう」
旺然として物の吼ゆる聲が起りました。これは獸の吼る聲、此の場の人間共の怒號叫喚愚劣迷亂を叱咤するやうにも聞きなされて、思はず身の毛をよだてる程の一聲でありました。
ムクは強いけれど可哀想に鎖につながれてゐました。こんな騷ぎになる前に誰か氣を利かして鎖を解いてやれば宜かつたものを、その方には誰も氣が附く者がなかつたから、鎖につながれたままでゐるうちに、火が其の背後から燃え出しました。
「ああ、ムクが繫がれてゐる、ムクは強い犬だ、誰か行つて鎖を解いてやらなくては燒け死んでしまふ、可哀想に、誰かムクの鎖を切つておやりよう」
お角は氣がついて高い處から叫んだけれども、組み合ひ押し合ひで誰れも其れに應ずるものがありません。
猛犬ムク！　お角もよく其の猛犬であることを知つてゐます。ムクが吠えると牛や馬までが竦んでしまつた事を此の道中で實見しました。
ムクが通ると街道の何れの犬も尾を捲いて軒の下へ隱れてしまつたことも知つてゐました。桂川筋で一座の女が一人、橋を渡るとて誤つて川へ落ちて押し流された時、あれよあれよと騷ぐ人を駈拔いてムクは水中へ飛び入り着物の襟を咬へて難なく岸へ飛び上つた事も實見してゐます。旅藝人に因緣をつけたがる雲助や破落戸の類が、强い面をしてやつて來た時にムクが居て、ジッと其の面を見なが

ら傍へ寄つて行くと、雲助や破落戸の啖呵が怯えて物にならなかつた事も再三あるのを心得てゐました。猛犬ムクは第一にお君に取つて忠實な家來であると共に、此の一行にとつては二つとなき勇敢なる護衛者であつた事を、お角は今の此の場合に於て思ひ出さないわけには行きません。

「ムクを解いてやりさへすれば、ここに居る折助共なんぞ幾人來たつて怖くはない、ナゼ早く其處に氣が附かなかつたらう、力持のおせいを恃みにするよりは彼のムクの方がドノ位強いか、ああ早く鎖を解いて此の奴等に嗾しかけて嚙み散らかさしてやりたい、誰かムクの鎖を解いてやるものはないか」

お角は自衞の剃刀を逆手に持つて、一方には寄せ來る折助の强襲に備へて味方を勵まし、一方には繫がれたムクの方を見て焦れに焦れたが

「ええ、仕方が無い、ああして置けばムクは燒け死んでしまふ、おせいさん、力持のおせいさん、お前はわたしに代つて此處を守つて皆んなの指圖をしてお呉れ、わたしは今ムクを助けて來るから、ムクの鎖を解いて來るから」

「親方さん、危ない」

「ナニ大丈夫だよ」

お角は剃刀を口に咥へて、着物の裾をキリキリと捲くる。

今でこそ一座の親方になつて自分は舞臺へ立たないけれども、お角も此の道で叩き上げた女、高い

處から舞臺を見下して人の頭の薄い處を見定めてヒラリと躍らして飛び下りた身の輕さ。お角が下へ飛び下りたのを見ると

「それ美い女が飛び下りた」

登りあぐねてゐた折助が折り重なつてお角の方へ抱きついて來る。

「何をしやがるんだい、折助奴」

剃刀を振ると、鼻梁を横に切られた折助の一人が、呀ッと云つて面を押へる。紅殼のやうな血が玉になつて飛ぶ。

「この阿魔、太え阿魔だ」

多勢の折助がお角一人に折り重なり折重なつて取りつく。

「何をしやがるんだい、お前達の手に合ふやうな輕業師と輕業師が違ふんだ、さまあ見やがれ」

お角は血に染みた剃刀を打ち振つて群がり來る折助の面を望んでは縱一文字、横一文字に斬つて廻る。けれども、多勢を恃む折助、賭博打ち、後から後から押して來る。揉まれ揉まれてお角の帶は解けた。上着は辷り落ちる、其れを引張る、引きちぎる。眞白な肉。お角は其の覺悟で、下には輕業の娘の着る刺繍の半股引を着けてゐた。剃刀一挺を獲物の死物狂ひ。髮が亂れ逆立つて半裸體で荒れ狂ふ有樣、物凄いばかり。併しいくら氣が焦つても多勢の男に一人の女、お角の剃刀はいつか打ち落されてしまふと、忽ちに手取り足取り

「口惜しイッ」

お角は齒噛みをしたが最早如何ともすることは出來ません。斯うしてお角を取つて押へた折助共は忽ち胴上げにして関の聲を揚げて表の方へ擔ぎ出す。高い處で其れと見た力持のおせいさん。

「あれ、親方が捉まつてしまつた、この野郎共、覺えてゐろ」

城を守ることの任務を忘れて、お角を折助共の手から取り戻すべくやつと聲を掛けて力持のおせいは高い處から飛び下りたが——これは輕業が本藝でない力持專門であるからヒラリと身を跳らしてといふわけには行きませんでした。ただお角の危急を見て夢中でドシンと飛び下りたのは臼を轉がしたと同じことだから、下へ落ちても暫く起き上る事は出來ないのを、それと云つて多勢が寄つて集つて押へる、いくら荒れても俯向きに落ちた處を上から押しつぶされたのだから動きが取れないでゐるうちに、演藝用の綱渡りの綱を持つて來てグルグルと縛つて難なくこれも生捕。主將、副將共に捕はれた後の美人連は、慘憺なものであります。羊の中へ狼が亂入したやうに一溜もなく引抱へられて引擔がれる、泣き叫ぶ、狂ふ。

眞先きに多勢に擔がれて行くお角は齒を食ひしばつて

「口惜しイッ、ムクは如何したらう、何だつてムクに氣が附かなかつたんだらう、早く氣が附いてムクの鎖さへ解いてやつて置けば、此ん事は無かつたんだ、斯うと知つたら君ちやんにムクを附けてやれば宜かつたものを、今となつては仕方がない、誰かムクを助けてやつて下さい、ムクの鎖を解いてやつて下さい、さうすれば斯んな折助なんぞ幾人來たつて此んな口惜しい目に會やしないのに、ムクを、ムクを、ムクの鎖を解いてやつて下さいよう」

聲を限りに叫びました。

九

お君が神尾主膳に柳屋へ呼ばれて三味線を取直した時に此の騒ぎが起りました。

お君は三味の絲を捲く手を留めて

「何でございませう、あの音は」

廊下をバタバタと駈けて來た女中が

「喧嘩でございます、あの女輕業の小屋の内へお仲間衆が押し掛けて、今大騒ぎが持ち上つたのでございます、人死が出來ました、火事になりました」

「あの女輕業の小屋へ城内のお方が押し掛けてあの騒ぎ、それは大變、斯うしては居られませぬ」

お君は三味線を投げ出して立ちかける。其の袖を神尾主膳は押へて

「あの騒ぎの中へ一人で行つては危ない」

「危なくても宜しうございます、斯うしては居られませぬ、どうぞお暇を下さいまし」

神尾主膳の袖を振り切つたお君は三味線も撥も投げ出して跣足で飛んで歸りました。

「ああ、大變な事、火が附いてしまつた、此んな事ならモツト早く來れば宜かつた」

お君の來て見た時分には小屋の裏手へ一面に火が廻つてゐます。表へ廻ると、小屋の中から雪崩を打つて押し出す群集。

「あれまあ、親方さんが擔がれて、力持のおせいさんまでが、彼して、まあまあ、皆んな娘達が連れて行かれてしまふ、何といふ亂暴な人達でせう、これはまあ如何したんでせう、誰も助けて上げる人はゐないのかしら、どうしたものでせうね、あれあれ、何處へ連れて行かれるんでせう、わたしはまあ如何したらいいでせう」

その時に、猛然として火の中より起るムクの聲。

「ああ、さうだ、ムクだ、ムクは何をしてゐるんだらう、皆ながあんな目に會つてゐるのにムクは何をしてゐるんだらう、おお、さうさう、ムクは鎖が濟むと、いつもあの鐵の棒につながれてゐたから、事によるとあのまんまで誰も氣がつかないで、ムクを鎖で繋ぎ放しにして置くんぢやないかしら、それだと幾らムクだつて動けやしない、皆んなが彼んな目に遭つても助けてやりたくても助けられやしない、きつと左樣だ、ムクは繋ぎ放しにされてあるに違ひない、そんならムクは人を助けるどころではない、自分が此の中で燒殺されて終ふぢやないか、可哀想に、ムクが可哀想だ、ムクやムクや」

お君はムクの名を連呼して驀然に此の火の中へ飛込んでしまひました。煙に捲かれることも、火に

煽られることも考へる餘裕はなくてお君は火の中へ飛込んでしまひ

「ああ、ムク、怪我をしないでゐてお呉れかい、鎖につながれてゐるだらうね、今解いて上げるから待つてお出で」

袖で面を隱して烟の中に駈け込んだお君の手が鎖にかかると、ムクは五體が張り裂けるばかりの身震ひをしました。

「ああ、早く逃げよう、逃げてお呉れ」

難なく鎖が外されるとお君とムクとは丸くなつて此の小屋の火と煙の中から逃げ出しました。お君には、もう逃げ場がわからなかつたがムクはよく知つてゐる、犬と人とは辛うじて火の外へ逃げ出して

「わたしは宜いから、早く親方さんや、娘達を助けておやり、わたしは最早大丈夫だから、早く、お前、皆んなの娘たちを助けて上げてお呉れ、惡い奴に擔がれて向ふの方へ連れて行かれたんだから、早く……」

十

女輕業の連中を引擔いで來た折助共は、闇に紛れて荒川の土手、葭や篠の生えた處まで來てしまひ

ました。

土手の蔭へ女輕業の連中を珠數つなぎにして置いて

「さあ、大變な騒ぎになつてしまつた、これから先を如何するのだ、まさか燒いて喰ふわけにもゆくめえ、さうかと云つて此處まで持つて來たものを、拋りぱなしにして逃げて行くと娘達が蚊に食はれてしまふ、繩を解いてやれば最前のやうに荒れ出して始末に行かねえ、何とか面白い工夫はないか」

「成程、斯うして置いて蚊に食はせてしまふのも殘念なわけだ、繩を解いてやれば荒れ出す、其のうちにも此の力持と來た日には三人や五人では手に負へねえ、また身の輕い方は商賣柄だから、ここらの田圃へ突ん逃げたら蝗を捕まへるやうな手數がかかる、如何したものだ」

「宜い事があるわい、一度に繩を解いてやると物騒だから、一人づつ繩を解いてやらうぢやねえか、ここにゐるおれ達仲間と、女の仲間と數を讀み合はせて置いて、籤引とやらうぢやねえか、籤を引當てた順で、この女達を片つ端から一人づつ連れて、何處へでも勝手な處へ屆けてやる事にしたら面白からうぢやねえか」

「其奴はいい處へ氣が附いた、籤引にしよう、籤引はいいけれど、この力持なんぞ引き當てたら災難だ、下手な事をやれば此方が却てギュウと潰されてしまふんだから、あんまりジタバタさせねえやうに、物和かに道行といふ寸法に行きてえものだ」

「物和かに道行といふ寸法に行けば其れに越した事は無えが、お互に和事師といふ面でも無えし、

兎に角、籤として見よう、籤を引いて見た上で、また何とか面白い趣向があるだらうよ」

「籤を引く前に斯ういふ趣向は如何だ、手荒な事をしなくても、女を逃さねえやうにする法がある、それは裸にして置くことだ、裸にして置けば、女は恥かしがつて何處へも逃げやしねえ、さうして置いてから籤を引いた方が宜からう」

「成程、おれ達の仲間には智惠者が多い、裸にして置けば女は暗い處に居たがつて、明るい方へ出るのを忌がる、それは宜い處へ氣がついた、それは宜い心がけだ」

折助はたうとう斯ういふ決議をしてしまひました。

「さう定まつたら、悠くりするが宜い、誰か火種を持つてゐねえか、一ぷくやつてから仕事にかかりてえ」

この時、一蓮寺の境内で盛んに燃えてゐる見世物小屋の火の手を心よげに折助共が見返つて、それから悠々仕事にかからうと云つてゐる途端に

「あつ、何だ、如何したんだ、えつ、如何したと云ふんだ、痛い！」

暗中摸索、折助共が引繰り返り且つ引繰返り、何を如何したのか、一時に混亂して騒ぎ出しました。

「やつ、狼だ、狼だ、狼が出て來やがつたぞ、ソレ大變だ」

山國にゐると狼の怖るべき事を誇張して聞かされます。その狼の來襲と聞いて、さしもの折助共が總崩れに崩れ立つたのは無理もないことです、鳥の羽音でさへ大軍を走らすのだから、狼の一聲が折

助を走らすのは誠に無理もない事でした。

事實また、此の眞暗な中へたしかに眞黑な怪物が音も立てずに飛び込んで來て、ヒラリヒラリと飛び違へながら、當るを幸に折助を嚙みつぶし嚙みつぶして廻る早業は、たしかに類を呼ぶ千疋狼の類が、よき獲物ござんなれと一擧に襲ひかかつたものとしか思はれません。

それ狼！　と云つて總崩れに崩れて逃げ出したから、まだ幸でした。もし愚圖々々してゐて、それ、狼ではない、犬だ何ぞと正體を見屆けたつもりで踏み止まらうものならば、擧げて一人も殘さず折助が嚙み伏せられてしまつたに違ひない。それでも一人か二人の死人を殘し、多數の怪我人を出して、逸早く此の場を逃れ得たのが幸でありました。

併し、可哀想に輕業の女達、折助は逃げ去つたが今度は一層怖ろしい骨までしやぶる獸、それの襲撃と聞いて齒の根が合はなくなりました。けれども其の怖ろしい獸は、存外女達にはおとなしくありました。

縛られて齒の根の合はない女達の傍へ寄つて、クフンクフンと鼻を鳴らして狎れて來るのが不思議であります。

「おや、ムクだよ、ムクが來て吳れたんだよ、ムクが助けに來て吳れたのだよ」

親方のお角が先づ斯ういつて叫び出した時に、女達一同の恐怖の念が歡喜の聲と變りました。眞先にお角の身にかけられた繩に牙を當ててグイと引くと、お角の繩は無造作に外されました。

「まあ、ムク、よく助けに來て吳れたねえ、ほんとにお前はわたし達の命の親だよ」

お角はムクの首を抱へてしまつて、さすがに氣丈な女が聲を揚げて泣きました。一人の身が自由になれば、あとは皆んな樂に解放されてしまひます。

斯うして美人連はムクに助けられて再び一蓮寺の境内へ歸つて來た時に火事は鎭まつたけれども、餘炎はまだ盛んなものでした。火消も來たり役人も來たりして騷動はスツカリ納まつてしまひましたが、お君の姿を何處へ行つたか見出すことが出來ません。

十一

「それぢや、何かい、如何しても江戸へ出かけるのかい」

宿で七兵衞とがんりきの會話。

「兄貴、色々とお世話になつたが、江戸へ出て一旗揚げるつもりだ、がんりきも此處等が年貢の納め時だから小商賣の一つも始め、飯盛上りの女でも連合にして、これからは溫和しく暮して行きてえものだと思はねえ事もねえが、天道樣が左樣は卸ろして吳れめえから、トテもの事にまた逆戻りで、疊の上の往生は覺束ねえだらう、何方が早いか知れねえが何分お賴み申すよ」

「成程、お前も腕一本取られたのがあきらめ時だ、江戸へ落着いたら、そんな事で疊の上の往生を

專一に心掛けて呉んねえ、若しまた、自分は其のつもりでも世間が承知しねえ時はまた其の時の了簡だ」

「俺も其の了簡で、此れから生れ代るつもりだ」

「餞別といふ程でも無えが、裏街道を通つて萩原入りから大菩薩峠を越す時に、峠の上の妙見堂から丑寅の方に大きな栗の木があるから、其の洞の下を五寸ばかり掘つて見て呉れ、小商賣の資本位は其處から出て來るだらう」

「折角だが、そいつは止さう、悪錢身に着かずといふ事になると幸先が宜く無えからな」

「悪錢といふのも可笑しなものだが、それぢやお前は性質のいい資本を持つてゐるのかい」

「一文なしだ、江戸へ出る小遣も無え位のものだ」

「腕もなし、資本もなし、それで眞人間にならうといふのはちつと無理だ、今奉公に出ればと云つて、其の腕ぢやあ誰も使ひ手はあるめえ」

「何とか成るだらうよ、運だめしだから、一文なしで出かけて見よう、途中でのたれ死したら其れまでよ」

「其の了簡なら其れでいい、自分はそれでいいけれど、若し人のかかはり合で金が無ければ男が立たねえといつたやうな時節があつたら遠慮なく俺の土藏から出して使つて呉んねえ」

「兄貴、大層なことを云ふが、お前の土藏といふのは何處にあるんだ」

「それは今云ふ裏街道では大菩薩峠の上、青梅宿の坂下、江戸街道の丸山臺、表の方では小佛峠の二軒茶屋の裏の林の中と府中のお六所様の森の後と、日野の渡し場に近い處、まあ此の繪圖面を見て置くがいい、江戸から持つて來た金は裏の方へ藏つて置く、甲州で稼いだのは表の方へ預けて置くんだ、幾らになつてゐるか自分でも其の額はわからねえが、ああして置いても利息がつくわけでは無えから入用の時は、いつでも出して遣つて貰ひてえものだ」

「成程、兄貴の仕事は中々手堅いや、斯うして娘を彼方此方へ片附けて置けば、いざといふ時、何處へ飛んでも居候が利く、だが此の繪圖面は見ねえ方が宜かつたな、これを見た爲に折角の婆婆氣が立ちおくれをして、どうやら元のがんりきに戻つてしまひさうだ」

「俺はそんなつもりぢや無えんだ、手前に此の金を器用に使つて貰へば金の冥利にもなるし、罪ほろぼしにもなるんだから、それで手一杯に地道な商賣をして、世間に融通をして貰ひてえんだ」

「其れぢや、ドノ道此の繪圖面は貰つて置かう、併し、これに手をつけるやうぢやあ、がんりきもやつぱり疊の上では死ねねえ、それぢや兄貴、これから出かけるから、壯健で居て呉れ」

「さうか、さう定まつたら引留めもしねえが、途中隨分氣をつけて猪や狼に食はれねえやうに」

「裏街道を行くつもりでゐたが、夜道は表の方が無事だから、やつぱり表を突切つてやらう、今から出りや夜明けまでに江戸へ入るのは樂なものだ、そのつもりで、最前、握飯を三つ四つ拵へて貰つてあるから、あれを嚙じつて江戸まで行けば、それから先はお膝元だ、どつちへコロげるかがんりき

の運試し、兄貴また彼地で會はう」
「江戸へ行つて居所が知れたら、神田の明神様へ額を納めて置いて呉れ、めの字を書いた繪馬を一枚、そのうらへ處番地を書いてお堂の隅つ子へ拋り込んで置いて呉れ、訪ねて行くから」
「合點だ」
「おや、表が何だか騒々しいな」
二人は云ひ合せたやうに耳を傾けて
「半鐘が鳴るぜ」
「火事だ火事だと云つてるよ、姉さん、火事は何處だい」
「一蓮寺でございますよ」
「一蓮寺、おや、喧嘩々々と云つてるぜ」
「成程、喧嘩らしい、火事と喧嘩とお祭祀と一緒に來たんぢや事だ」
がんりきは片一方の手で脚袢をひねくる、それを七兵衛は他から穿かせてやつて、身輕な扮裝が出來上りました。
二人が外へ首を出して見ると、火の子は此の家の上を撩亂と飛んでゐます。
それとはまた違つた處で其の翌日、最初にあの騒ぎの口火を切つた役割の市五郎が寢てゐる處へ見

舞に來た金助。
「役割、どうでございます、痛みますかね」
「うん」
「飛んだ御災難で」
「忌々しい奴等だ」
「役割を見損なつて木戸を突くなんて、盲蛇物に怖ぢずとは此の事だ、その代り、散々、敵を取つて奴等を空裸にしてやりましたから其れで胸を晴らしてお呉んなさいまし、身から出た錆とは云ひながら、彼奴等こそ小屋は燒かれる衣裳道具は臺なし、路頭に迷ふやうな騒ぎで手んテコ舞をしてゐやがる、ざまア見ろ」
「狼が出て苛い目に遭つたてえぢやあねえか」
「狼には弱りましたね、怪我あした奴等は大部屋で一々手當をしてゐますが、片輪者が大分出來上りさうで、面を嚙み潰されて如何にも始末に行かねえのが五六人ありますよ、あんなのこそホンとに面目玉を踏み潰されたとか嚙み潰されたとか云ふんだらう、それに比べりや、役割、こちと等は災難が輕い方でございますよ」
「まあ俺の方は俺の方でいいが、金公、手前こそ命拾ひをした上に俺の命を拾つて呉れたんだから、廻り合せがよく出來てゐる」

「役割から言ひ付けられて、神尾の殿様の容子を見ようと石燈籠の蔭で隙見をしてゐる處を取捉まつて、すんでの事に息の根を止められようとする處を不意にあの騒ぎで、神尾の殿様も、こちと等を構つちゃ居られず、急にお立ちとなつてしまつたから命拾ひをしたつもりで騒ぎの方へ飛んで行つて見た時分には、人間の騒ぎは済んだけれども、火の威勢が馬鹿に強くて、通り抜けられねえから迂路迂路してゐると役割の死骸……ぢやあ無かつた、役割が打倒れてウンウン言つておいでなさるから、此奴は大變だと肩に掛けて引擔いで逃げると、拾ひ運のいい日はいいもので、役割の命を拾つた上にもう一つの拾ひ物、それは斯ういふわけなんですよ、わつしが役割を肩に引掛けて煙に追荒けられながら彼の椎の大木の處まで來ますとね、其處にまた人間が一つ倒れてゐるんです、尤も今度の人間は役割の前だが前に拾つたよりもズッと綺麗なんですから、それこそホンタウの拾ひ物で、其の時、わつしは如何しようかと考へましたね、椎の大木の下に倒れてゐたのは綺麗な女の子、女輕業の中でお君といつて道成寺を踊る評判者、それが矢張役割と同じ事、死んだやうになつて倒れてゐるのを見付けたものですから、わつしは其處で考へたんで、一層の事、役割を抛り出して此の娘に乘り換へた方が得用だと、すんでの事に役割の方を諦めて終はうかと思ひましたよ、まあ怒つちやいけません、一時はさうは思ひましたけれど本來わつし共も善人ですから其んな薄情な事は出來ません、と云つて一人で一度に二人の人を助ける譯には行きませんから、役割を大急ぎで稲荷の處まで擔ぎ出して置いて、それから取つて返して、其の女の子を首尾よく擔ぎ出しました、が、此の方が餘つぽど擔ぎ榮がしました。まあまあお聞き下さいまし、その女の子はわつしの働きで宜い處へ隱して置きますよ、あいつはね、人質になるんですから、大事な代物ですよ、役割が快くなりなすつたら、御相談をするつもりでわつしが宜い處へ隱して置きますがね、役割、これが癒つたら、彼奴を妾にしておしまひなさいまし」

十二

宇津木兵馬が單身で、白根の山ふところを指して甲府の宿を出かけたのは一蓮寺のあの騒ぎの翌日の事でありました。

秋もすでに晩く、國をめぐる四周の山々は雪を被つてゐます。風物と人の身の上を考へると兵馬にも多少の感慨があります。此の度こそはと思うて、いつも心は勇むけれども、旅から旅を歩く間には隨分果敢ない思ひをするのです。

兵馬は此の頃になつて漸く七兵衛の擧動に不審の點を發見して來ました。片腕を落されたがんりきといふ男との話しぶり、その調子が自分等と話をするのとは大分違つた處がある、七兵衛の擧動に合點の行かぬ節々を感づいて見ると其處にも亦多少の心淋しさが湧いて來ないわけには行きません。

そこで、この度の山入りも七兵衛には置手紙をしただけで出かけてしまつて、白根の山めぐりをし

てから後は、また次第によつては東海道筋へ廻るのだなと思ひつつ歩いて行きました。

一蓮寺の境内を通りかかつて見ると如何でせう、昨日あれほどに賑はうた見せ物小屋のあたりはすつかり焼けてしまつて、祭禮も臨時休業のやうな姿で、焼跡のまはりには消口を取つた仕事師の連中が立ち働いてゐる有様を見て、昨夜の火事は此んな大きな事になつたのかなと、舌を捲きながら通り過ぎてしまひました。それから荒川の土手の處を歩いて行くと、土手の上の雑草が踏み躙られて、血痕があちらこちらに飛んでゐます。

兵馬は其れが正しく人間の血であるらしいから、少しく驚かされました。人間の血であつて見ると、四邊の草木の荒された模様から見て餘程の人數が入り亂れて爭つたものとしか見えません。祭禮で氣が立つた餘り、ここで血氣の連中が大格闘をやつたものだらうと兵馬は心の中で推察しました。

此れは昨夜の折助の狼藉と女輕業の美人連の遭難、その血の痕といふのはムク犬の勇猛なる働きの名殘であることは申すまでもありませんが、その風聞は兵馬の耳へはまだ入つてゐませんでした。其の土手の處を通り過ぎ龍王村といふ處へ出ようとする廣い畑の中道で

「頼むよう、助けて呉れ！」

白晝とはいへ、人通の餘り無い處で助けを叫ぶ人の聲。

「頼む、頼む、助けて呉れ」

足を留めて見ると凡そ二町ばかりを距てた道の傍の柿の木と覺しい大きな木の上で頻りに助けを呼

んでゐる者がある。

これはヲカしい、木の上で、ひとりで呼んでゐる。氣狂ひではあるまいかと兵馬は思ひました。木の上に登つて助けて呉れといふのは、大抵大水の場合に限るやうです。下を見れば水も何もありはしない、尋常平凡な畑道の中で、木の上から助けを呼ぶのはヲカしいと思ひながら、宇津木兵馬は其の方へ急いで行つて見ると、木の下に眞黒な動物。

成程、犬に逐はれたな、狂犬だらう、大きな犬だ、あれに逐ひつめられて木の上へ登つて其處から助けを呼んでゐるといふのは笑止な事だ、その聲を聞けば子供でもないやうだが、大の男が犬に逐はれて、助けて呉れは、いよいよ以て笑止な事だと、兵馬は微笑しながら木の下へ近づくと

「どうか助けて下さい、其の犬を追拂つて下さい、狂犬でございます、この通り向脛を掻拂はれて、衣服なんぞもズタズタでございます、すんでの事に命を取られる處をやつと此處へ逃げ上つたんでございます、そこに附いてゐられちゃ逃げる事が出來ません、どうか犬を追拂つてお呉んなさいまし、助けてお呉んなさいまし」

木の上にゐた男は半狂亂で叫んでゐます。

「叱！」

兵馬が犬を叱ると、犬は首を振り向けてブルツと身を慄はせました。

其の時

「見たやうな犬だ」
兵馬は一見して其の非常なる猛犬である事を知り、同時にまた何處かで見た事のあるやうな犬だとも思ひましたけれど、咄嗟には其れと思ひ當ることもありません。
「叱！」
兵馬は小石を拾つて覘ひをつけると犬はまた後退りして、兵馬の面を睨みながら唸る。
「叱！」
兵馬は石を振上げて追ふ。犬は少しづつ後退り。
「どうか其の犬をお斬りなすつて下さい、お腰の物で二つに打つ斬つてやつてお呉んなさいまし、とてもとても石なんぞで驚く犬ぢやございません、斬つて終はなけりや駄目でございます、どうかお斬りなすつてお呉んなさいまし」
木の上で男が喚く。
「エイ」
兵馬が打つた石礫、猛犬の額に發矢と當る。犬は一聲高く吠えて飛び退き、爛々たる眼を以て、遠くから兵馬を睨む。二つ目の石を兵馬が振り上げた時に、何と思うたか犬はクルリと廻つて、兵馬の面を睨みながら鷹揚に後へ引いて行く。犬は兵馬の面と其の手中の石とを見比べながら、徐々と引上げて行く態度、丁度、名將が戰ひ利あらずと見て、味方を繰引きに引き上げる兵法が此の態度であら

うと、兵馬は敵ながら獸ながら其の退却振の雄大にして痛快なのに感心せずには居られませんでした。
上杉謙信が退却する時には此んな陣立であらうかとさへ思はせられました。
「石なんぞで驚く犬ぢやございません、打つた切つてお呉んなさいまし」
木の上でガムシャラに叫んでゐるに拘はらず、兵馬は此の石で犬を逐ひ、犬は遂に兵馬に逐はれて何處へか行つてしまひました。
「何處の畜生だか知らねえが、人を脅かしやがる畜生だ、この近所ではついぞ見かけた事の無え畜生だが、いやはや、馬鹿と狂犬ほど怖いものはないと太閤樣が申しました」
木の上から下りて來た男を何者かと見れば、これは先程役割の市五郎を見舞つた折助の金公でありました。さすが定まりの惡い面をして、それでも兵馬に禮を述べるより先に犬の惡口をはじめます。
「何だつて旦那、わつしが此の村へちつとばかり用事があつて甲府から出かけて來ると其處の森の中から、のそりと飛び出して來やがつたのが此の犬でございます、何だか氣味の惡い眼つきをして、わつしの面を見詰めながら後を食附いて來るでせう、癪に觸るから今旦那がなすつたやうに石を振り上げて追拂はうとしますと、彼奴が凄い聲で唸りましたね、その聲でブルブルと、わつしは慄へ上つてしまひましたよ、旦那のやうに睨みが利きませんから逃げ出しました、到頭此處まで追ひ詰められてこんな怪我をした上に、御覽なさい、着物の裾なんぞ此の通りズタズタでございます、ほんとに忌々しい畜生つたら」

金助は兵馬に禮を云ふことを忘れて犬の惡口ばかり云ひます。

「一體、この村の奴等が惡い、彼んな性質の惡い狂犬を放し飼にして置くのが宜しく無え、叩き殺してしまやがりやいいんだ」

今度は村の人へ飛沫。

この男は頻りに狂犬呼ばはりをするけれど、兵馬は決してあの犬を狂犬とは思つて居りません。

「さて、お前さんは此れから何處へ行かれるな」

「つい其處の龍王村といふ處まで參りますんで」

「歸りに、また犬が出たら何となさる」

「脅かしちや可けません、もう懲々でございます」

「併し歸りには必ず出て來る」

「戯談ぢやありません、今度出やがつたら村の若い衆を大勢頼んで叩き殺してしまひます」

「そんな事をすると却て宜しくない、察するのにお前は何かあの犬に怨みを受けるやうな事をした覺えがありさうぢや」

「驚きましたね、いくら人間が下等に出來上つてゐたからと申しましてまだ犬に恨みを受けるやうな事をした覺えはございません」

「犬といふものは三日養はるれば生涯其の恩を忘れぬ代り、一たび受けた恨みも亦死ぬまで覺えてゐるといふ事だ、どうかするとお前はあの犬に對して意地の惡い事をした其の祟りを受けて見込まれたものと、どうも左樣しか思はれぬ」

「そんな事は決してございませんよ、第一あんな大きな黑犬を見るのは今日が初めてなんでございますから、初めて見たものに恨みを受ける筈が無いぢやございませんか、狂犬の人食ひに違ひございませんよ」

「兎に角、わしも彼方へ行く者、龍王村まで一緒に行きませう」

兵馬は金助を連れて龍王村へ入ります。この時分から時雨の空模樣が怪しくなつて來ました。

「降らなけりや宜うございますね」

宇津木兵馬は一緒に龍王村の方へ入る途すがら話して行くと、此の金公といふ折助が如何にも下らない人間である事を知りました。下手に優しく話して行くと、直ぐに附上がつてしまふ、さうして今の先、木の上で助けて呉れ助けて呉れと叫んだ事などは打忘れて、自分の得意氣な事をベラベラ喋べる。兵馬は成程下らない人間だと思つていい加減に話してゐると、自分が川柳をやる事だの雜俳の自慢だのを、新らしさうな言葉で齒の浮くやうに吹聽する、兵馬は愈ゝ下らない折助だと思つたが、ただ下らないばかりではなく、兵馬の話しぶりを見ては折々引掛けるやうな事をする。これでは犬に逐はれるのも無理はないと、胸に不快な思ひをしながら、兎も角も龍王村へ入つて來ました。

龍王村へ入つて村を横切ると釜無川の河原へ出ます。信玄の時代に築かれたといふ長さ千間の一の堤防。その上には大きな並木が鬱蒼と茂つてゐる、右手には高く龍王の赤岩が聳えてゐる、金公が先に立つて其の堤防の並木の中へ分けて行く時分に、さき程から怪しかつた時雨の空がザーツと雨を落して來ました。

金助は、兵馬の先に走つて、同じ堤防の並木の中の、とある神社の庭へ走り込んで

「今日は、今日は」

戸を叩いたのは三社明神の堂守の家。

「金公かい」

破れ障子から面を出したのは腰衣をつけた人相の良くない大入道。

「木蒐入ゐたか」

ここは神社である筈なのに、この堂守は怪しげな僧體をしてゐるから兵馬は變に思つてゐると、金公が

「さあ、どうかお入りなすつてお呉んなさいまし、これはわつし共が大の仲よしで木蒐入と申しまする、見た處は氣味の悪い入道でございますが、附き合つて見ると氣の置けないお人良の坊主でございます」

金公は金公で此の坊主を捉まへて木蒐入々々々と云ひ、坊主は坊主で金公を捉まへて金公々々と呼び捨てにしてゐる處を見れば中々懇意な間柄らしいが、兵馬は此處で雨宿りをするつもりで中へ入つて見ると、爐の中には釜無川で取れる川魚が盛んに燒かれてあるし、貧乏徳利が幾つも轉がつてゐます。

雨は中々やみさうもないから、兵馬もつい勸められるままに草鞋を取つて上へあがりました。

さうしてゐるうちに坊主と金公が碁を打ちはじめました。見てゐると金公も可成に打てる、坊主は中々強い、金公に三目置かして打つてゐるがまだ坊主の方がズツと強い、金助は連りにキザな面をして例の齒の浮くやうな文句と一緒に石を並べて、時々キウキウ云はせられてゐると、坊主は其の度毎に高笑ひをして金公を頭ごなしに馬鹿にする。

「どうだ金公、こいつが負けたら四つ置くか、それとも一升買ふか、キウキウ云つた處で碁になつて居らんわ、投げた方が宜からうぜ」

實際、金公は弱らせられてゐるらしく、キウキウ云つて盤面を見詰めてゐたが、やがて窮餘の一石をパチリと置く。

「おやおや、自暴とおいでなすつたね、自暴と氣狂ひほど怖いものは無いと權現樣が仰有つた、自暴も亦侮るべからず、斯うして繼いで置けば問題はござるまい」

「成程、うーん」

金公が唸り出してやがて降參してしまふと大入道大得意、カランカランと打ち笑ふ、兵馬は其れに

興を催して

「御出家、一石お願ひ致しませうか」

「おやおや、お前様も碁をお打ちなさるか、それはそれはお若いに頼もしい事ぢや、金公では下拙聊か喰ひ足らず思うてゐた處、さあ遠慮なく入らつしやい」

「然らば此の人と同じこと、三目でお相手を致して見よう」

「宜しい、三目、さあ入らつしやい」

「パチリ」

「パチリ」

「これは感心、定石を心得ておいでなさる處が感心、兎角、初心のうちは左様打つてお出でになるが宜しい、其許は中々立が宜うござるな、見込のあるお手筋ぢや、さうして定石から素直に打ち上げて行かぬと悪い癖が出て物にならぬ、物の譬が此處にござる、金公などを御覽じろ、器用一邊であつちへ遣り繰り此方へ遣り繰り、キウキウ、ヒド苦面をしながら打つてゐる、それで年中ビービー苦しみ通しで、お終ひの果が投と來るから目も當てられない、其處へ行くと下拙の如く定石から打ち込んだものには、悠揚として迫らぬ處がある、よし勝負には負けても碁には勝つと云ふものぢや、ここに御座る金公の如きは、勝負には無論負け、碁に於ては元より問題にならず」

引合に出された金公が苦い面をする。

「パチリ」

「パチリ」

「ええ、これは旨い手を打つたな、これはやられたわい、中々油斷のならぬ手筋ぢや、金公を相手にする了簡ではチト六づかしい、金公の如きを相手にしてゐる故、下拙もつい見落しが出來て困るて、仕方が無い、そこは其れ若い者に花、併し此れは如何も金公とは違ふ」

一口上げに金公々々と、善い方へは引き合ひに出さないから、金助はいよいよ不平な面をします。

「いや中々やるやる、お前様は好い師匠に就いて稽古をなされたな、殊に上手のものとのみ手合せをしておいでと見えて、下手より上手へ強いお手筋ぢや、いや頼もしうござる、ハテ此の一手、これが判らぬ、いやこれは如何も」

木蒐入は頭の上へ手を置いてしまつたが、大分こたへたと見えて、金公の棚下しも出なくなつて唸り出すと、今度は金公が首を突き出して

「入道、少し困つたな」

「うーん」

「成程、定石から打ち込んだものには違つた處があるな」

「うーん」

「入道、投げた方がお爲になりさうだぜ、碁になつて居らん、投げて一升買ふか、さうでなければ

白をお渡し申して出直すんだ」

「うーん」

やつとの事で入道が一石、千貫の石を置くやうな手附。

兵馬は番町の伯父の家にゐる時、伯父から手ほどきの定石を習ひ初め、餘技とは云ひながら相當に心得たものでありました。この坊主中々弱くはないけれど、自分に對して白を持つほどの腕ではないと見て取つたのに、三目置いてゐるから兵馬に取つては樂なもの、入道は中ば頃から散々に苦しんで、たうとう降參してしまつて苦い面をすると、金公が大よろこびで復讐の意味を兼ねた駄句を作つたりなどして嘲弄します。入道甚だ安からず思つて、また一石戰ひを挑む、こんな閑つぶしをやつてゐたが雨は止まないのに、入道は負ければ負けるほど躍起になつて、兵馬に疊みかけて戰ひを挑む、兵馬も其の相手になつて、たうとう其の晩は金公と一緒に此の堂守の家へ一泊することになりました。

兵馬は其の晩勸められるままに此の堂守の家へ泊り込んでしまひました。

兵馬を一室に寢かして置いて、彼の木蒐入と金公とは、酒を飲み出します。金公が薄つぺらな口先で頻りにキザを云つては入道に愚弄されるのが兵馬の寢間へよく聞える。愚弄されても金公は一向お感じがなくベラベラ喋る、さきに柿の木の上で、助けて呉れ助けて呉れと泣き聲を出した事などは嗳にも出さず、鬼の三匹も退治して來たやうな事を云つてゐるから、兵馬はイヤな奴だと思ひます。

この二人はベチヤクチヤと喋つた揚句に、打ち連れて此の堂を出かけて行きました。あとに獨り殘

された兵馬、大方あいつ等は此處だけでは飲み足りないで近所の居酒屋へでも飲みに行つたものだらうと思ひました、それで兵馬は落着いて眠ることが出來ました。

其の夜中に俄然として兵馬の夢が破れたのは凄じく吠える犬の聲からであります。

兵馬は其の犬の聲で夢を破られると同時に外で

「痛ッ」

と絶叫する人の聲、ガバと刎起きて雨戸を推し燭臺を取つて外の闇を照して見ると、二人共打倒れてウンウンと唸つてゐるのは金助と木蒐入であるらしい。その傍に立つてゐる人の影が一つ。

「もし、あなたは宇津木樣ではございませんか」

「エエ」

外から呼ばれた我が名、それは女の聲である事だけは慥かです。

「もし、わたしは君でございます。伊勢の大湊を出る時に船でお世話になりました、あの君と申す女でございます」

「ああ、お君どのか」

「そんなら宇津木樣でございましたか、宜い處でお目にかかりました」

「不思議な處でお目にかかる、兎も角も此れへお入りなさい」

「御免下さりませ、ムクや、このお方はわたしの御恩になつたお方ですから吠えてはいけません」

「ああ、その犬は、お前さんの犬であつたか、畫のうちに此の先の原の道で見かけた犬、そこに怪我してゐるのは誰ぢや、おお此處の堂守と途中から一緒に來た男、さてこそ何か仔細のありさうな」

「これには長いお話がございまする、この人達は、わたしに向つて良くない事をしましたから、それでムクが怒つて此んな目に合はせたのでございます、お氣の毒でございますけれど、斯うしなければわたしが助からないのでございますから、どうかムクの罪を許して下さいまし、ムクが惡いのでございませんから」

「何しても此のままにて置けぬ」

兵馬とお君とは力を合せて木蒐入と金公とを家の中へ擔ぎ込んでムクに嚙まれた傷を介抱してやりました。

十三

兵馬とお君とは思ひがけない對面でありました。お君の語る處に依れば、一蓮寺の火事の時、椎の木の下に昏倒してゐる間に、自分は誰にか助けられて見知らぬ處へ伴れて來られたが、その助けたといふのは此處にゐる金助で、連れて來られたのは此の堂守の家であります。

堂守は此の明神の御輿倉の中へ自分を隱して置いたといふ事、それは金助の賴みで、今宵は入道と二人醉つぱらつて來て自分をまた伴れ出して、妾にするとか女郎に賣るとか云つてゐる處へ、突然にムクが現はれて此の有樣となつたといふ事です。

お君はまた兵馬と別れて舟から上つて以來の事を落ちもなく語ると、兵馬は飽かずに聞いてゐてお君の身の上に波瀾の多いこと、其の度毎にムクの手柄の大きな事に感嘆せずには居られませんでした。

「ああ、それで思ひ當つた、この犬がどうも尋常の犬でないと思つたらいつぞや伊勢の古市の町で、槍をよく使ふ小さな人、あまりに不思議の働き故、賴まれもせぬに槍を合せて見た處、其の傍にゐた一匹の黑い犬、その面魂些とも油斷がならなかつた、さては此の犬であつたか」

二人の話はそれからそれと續きました。その時、不意にけたたましい警板の音。

警板は此の堂の、すぐ背後、杉の大木に掛けてあつたのを、いつの間に拔け出したか其處へ上つて堂守の入道が力任せに叩いてゐるのです。

「あの音は」

兵馬もお君も驚きました。

二人が其の音に驚くとムクも首を上げて尾を振ります。

さうすると、わーといふ人聲、早くも其れと覺つた宇津木兵馬は

「お君どの、こりや大事出來、早く逃げにやならぬ」

「何でございませう、あの音は」

「ここの堂守が拔け出してあれを打つた、それで村の人を集めてゐる」
「わたし達は何も悪いことは致しませぬ」
「元より悪い事はしないけれども、何をいふにも此方は旅の身、向ふは土地馴染のある人、悪い名を着せられても急には明りが立たぬ、そのうち血氣に逸る土地の人、どのやうな亂暴をすまいものでもない、今のうちに早く逃げなければならぬ」
戸の外では人の聲が噪がしい。
「泥棒が入つたぞ、俺も此の通り傷を負つたが、甲府から來た金助は殺された、お堂の本尊様も明神の御寶藏も荒された、賊はまだ若い、若い前髪の侍と女が一人に犬が一疋、その犬が強いから嚙まれないやうに用心さつしやい」
警板の木の上で入道が大いに叫ぶ。
兵馬はお君を促がして一目散に逃げ出しました。
大並木をくぐり拔けて、堤を駈下りると釜無河原。
兵馬は遂に堪へ兼ねてお君を背に負つて河原を走りました。提灯や松明で追ひかけて來る多勢の人。
「それ河原へ下りたぞ、向ふの岸へ合圖をしろ」
漸く川の流れへ來て宇津木兵馬、淺瀬を計り兼ねて暫らく思案に暮れてゐたが、そのうちに乘り捨てられた川船の一隻をムク犬が見つけて飛び込むと、兵馬はこれ幸ひと同じくその舟へ飛び乘つてお

君を下ろすと共に、竹の竿を取つて岸を突きました。
舟は難なく釜無川の闇を下つて行きます。
程經て舟を着けたのは高田村といふ處、そこで陸へ上りました。
高田村で舟を捨てた時分には、夜が明けてゐました。鰍澤まではいくらも無い道程。兵馬はお君の爲に道を枉げて鰍澤まで來て宿を取ります。
それから兵馬は、甲府へ沙汰してお君を元の輕業の一座へ送り返さうとしてゐるうちに、困つた事にはお君が病氣になつてしまひました。
行手に心の急ぐ兵馬も已むことを得ず其れを介抱せねばならなくなりました。
幸にお君の病氣は大した事は無く、四日ばかりするうちにすつかり快つてしまひ、お君はやつと愁眉を開いてゐると、其處へ甲府から便りがありました、其の便りは又も兵馬とお君の二人を當惑させるものでありました。
お君が入つて來た輕業の一座は、あれから散々になつてしまつて、又も旅廻りをしてゐるか、江戸へ歸つたか、それさへ消息が無いといふ事でお君は落膽しました。兵馬も困りました。
お君は、仕方がないから、わたしはムクを連れて江戸へ歸つて見ようといひ出しましたけれど、それは隨分危險な事と云はねばならぬ。結局兵馬は、お君を當分の間此の宿へよく賴んで預けて置いて、自分だけが山入りをすることに定め、お君は兵馬に氣の毒で堪まらないけれども、其の好意に從つて

暫らく鰍澤の町に逗留する事になりました。

今朝、お君を殘して山入りをした兵馬。

ムクを連れて兵馬を送つて行つて別れた最勝寺前、お君には兵馬の面影が胸を搔きむしるほどに迫つて來て、一人ではゐても立つても居られなくなりました。

十　市中騷動の卷

一

白根入りをした宇津木兵馬は例の奈良田の湯本まで來て、其處へ泊つて其の翌日、奈良王の宮の址と云はれる辻で凄い見物を見ました。兵馬が歩みを留めた處に、人間の生首が二つ竹の臺に載せられてあつたから驚かないわけには行きません。捨札も無く、竹を組んだ三脚の上へ無造作に置き捨てられてあるが、百姓や樵夫の首では無くて兎も角も武士の首でありました。

「これは何者の首で、如何なる罪があつて斯様な事になつたものでござるな」

通りかかつた人に尋ねると

「これは悪い奴でございます、甲府の御勤番衆の名を騙つて、此處の望月様といふ舊家へ強請に來たのでございます、望月様は古金銀が澤山あると聞き込んで其れを嚇して捲き上げようとして來ましたが、悪い事は出來ないもので、丁度この溫泉に泊つてゐたお武家に見現されて此んな目に遭つてしまひました、あんまり圖々しいから首は斯うして晒して置けと其のお武家が仰有る、望月様もあんまり酷い目に合はせられましたから口惜しがつて、其の武家のお言付通り此處に斯うして見せしめにして置くのでございます、今日で三日目でございます」

「して其の望月といふのは何れの家」

「あの森蔭から大きな冠木門が見えませう、あれが望月様でございます、大へんに大きなお家でございます、若し此の惡者の餘類が押し掛けて來ないものでもないと、此の頃は用心が嚴重で、若い者を集めて夜晝劍術の稽古をやつたり鐵砲などを備へて置きますから、あなた樣にも其の心持でお出でにならないと危なうございますぞ」

こんな事を話して呉れましたから、兵馬は教へられた通り其の望月家の門前へ走せつけました。兵馬は望月家の門前へ立つて案内を乞ふと、成程、廣庭でもつて若い者が大勢劍術の稽古をして喚き叫んでゐました。

胴ばかり着けて莚の上で勝負をながめてゐた若い者の頭分らしいのが出て來て

「何の御用でござりまする」

「あの宮の辻と申す處に出てゐる梟首の事に就いてお尋ね致したうござるが」

「あ、あの梟首の事に就て、さうでございますか、まあ如何か此れへお掛けなすつて」

若い者の頭分は其の事に就て語ることを得意とするらしく、喜んで兵馬を母屋の椽側へ導くと、村の劍客連は其の周圍へ集つて來ました。

「今から丁度五日ほど前の事でございました、當家の望月様へ甲府の御勤番と云つて立派な衣裳をしたお武家が二人、槍を立て家來を連れて乘り込んで來ましたから、不意の事で當家でも驚きました、丁度それにお慶たい事のある最中でございましたから、尙更驚きました、けれども疎略には致すことが出來ませんから、叮重にお扱ひ申して御用の筋を伺ふと、いよいよ驚いて慄へ上つてしまひました、其の勤番のお侍衆の云ふ事には、當家には公儀へ内密に夥しい金銀が隱してあるといふことを承はつて其の檢分に來た、さあ隱さず其れを出して了へば内濟ですましてやるが、さも無い時には重罪に行ふといふ申渡しなんでございます、あんまり突然に無法な御檢分でございますから、當家の老主人も若主人も、親類も組合も土地の口利も皆んな呆氣に取られてしまひました、尤も當家には金銀が無いわけではございませぬ、金銀があるには有るのでございます、他に類のない金銀が當家には藏つてあるには違ひございませんけれども、その藏つてあるのは有るだけの由緒があつて藏つてあるので決して公儀へ内密だとか、隱し立てを致すとか其んな譯なのぢやございません、先祖代々金銀を貯へて置いて宜しいわけが有るんでございますから、まあ其れからお聽き下さいまし……御存知でもございませうが甲州は金の出る處なんです、金の出るのは國が上國だからでございます、其の金の出ますうちにも此の邊では雨畑山、保村山、鳥葛山なんといふのが昔から有名なのでございます、今でも入つてごらんになれば昔掘つた金の坑のあとが、蛙の腸を擴げたやうに山の中へ幾筋も喰ひ込んでゐまして、私共なんぞも雨降揚句なんぞに其處へ行つて見ると奥の方から押流された砂金を見つけ出して拾つて來ることが度々ありまして、何しろ金の事でございますから、其れを取つて貯めて置くと一代のうちには畑の二枚や三枚は買へるのでございます、けれども其れでは濟まないと思つて、拾つた金は皆んな當家へ持つて來てお預けして置くのでございます、さうしますと當家では年に幾度とお役人の檢分

がありまする度に其金を獻上し奉ると、お上から幾らかづつのお金が下るといふ仕組になつてゐるのでございますよ、まあ話の順でございますからお聞き下さいまし、文武天皇卽位の五年對馬國より金を貢す、よつて年號を大寶と改むといふ事を國史略を讀んだから私共は知つてゐます、何しろ金は天下の寶でございますから私共が私しては濟みませんので、今いふ通り拾つたものまで皆んな當家へ預けてお上へ差上げるやうにして居ります位ですから、當家で其れをクスネて置くなんていふ事が出來るものではございません、當家にありまする金銀を申しますのは御先祖から傳はる由緒ある古金銀で、山から出るのとは別なんでございます、その當家の御先祖といふのは……當家の御先祖は權現樣よりズツと古いのでございます、このあたりから金を盛んに掘出しましたのは武田信玄公の時代でございます、尤も其の前に掘り出したものも少しはございませうけれど、信玄公の時が一番盛んで甲州金といふのは其の時から名に出たものでございます、權現樣の世になつてからも隨分掘つたものでございますが、其の金を掘る人足は皆んな此の望月樣におことわりを云はないと土地に入れなかつたもので、信玄公時代からの古い書付に、金掘の頭を申付候間、何方より金掘り罷り越候とも當家へ申しことわり掘り申べく、此旨をそむく者あるに於てはクセ事なるべき者也とあるんでございます、その位の舊家でございますから代々積み貯へた金銀が些とやそつと有つた處で不思議はございますまい、古金の大判から甲州丸形の松木の印金、古金の一兩判、山下の一兩金、露一兩、古金二分、延金、慶長金、十匁、三朱、太鼓判、竹流しなんと云つて、甲州金の見本が一通り當家の土藏には納めてあるのでご

さいます、それは何も隱して置くんでも何でも無く、お役人が後學の爲に見て置きたいとか、學者たちが參考の爲に調べたいとかいふ時には、いつでも主人が出して見せてゐるのでございます、處が今度來たお役人は大枚三千兩とか五千兩とかの金銀を隱して置くに相違あるまい、それを出さなければ重罪に行ふと云ふのでございませう、飛んでもない事でございます、當家の主人が其んな金銀を隱して置くやうな人でない事は、私共はじめ村の者が皆んな保證を致しまする、そんな事はございませんと、言譯をしますと、如何でございませう、若主人を引きつれてあの宿屋へ云つて拷問にかけてゐるのでございます、さあ三千兩の金を出せば內濟にしてやる、それを出さなければ甲府へ連れて行つて磔刑に行ふと云つて夜通し責めてゐるのでございますから、丁度婚禮最中の當家は上へ下への大騷ぎで、村の大寄合が始まつて其の相談の上年寄達が土產物を持つて御機嫌伺ひに行つてお願ひ下げにして來るといふことになりましたが何の事に直追ひ歸されてしまつて取附く島がございません、私共若い者達は血の氣が多うございますから其んな沒分曉の非義非道な役人は夜討をかけて殺付けてしまへと、勢揃ひまでして見ましたが、年寄達がまあまあと留るものですから我慢をしてゐました、さうすると可いあんばいに其處に立ち會つて定りを着けて呉れたのが一人の武家でございます、そのお武家は御病身と見えまして其の前から此の溫泉で湯治をなすつてゐたのでございます、身體も惡いやうでございましたが、眼が潰れておいでになりました」

「ナニ目が潰れてゐた」

前口上は、どうでも宜しいが、これだけは聞き洩らすまじき事です、此の男の口から語られた机龍之助の擧動は斯うでありました。

擬ひ者の神尾主膳であつた折助の權六を一槍の下に床柱へ縫ひつけた時、主膳の同僚木村は怒り心頭より發して刀を拔き放つて、龍之助に斬つてかかつたが、脆くも其の刀を奪ひ取られて、あつと云ふ間に首を打ち落されてしまつたから、一座は慄へ上つてしまひました。

役人に附いて來た下人共は、もう手出しをする勇氣もありませんでしたが、今まで役人共の爲す處を齒咬みをして口惜しがつてゐた望月方の者でさへも、これには青くなつてしまひました。

口を利いて吳れる事は有難いけれどもこれでは餘りである、こんなにまでして吳れなくとも宜かつたものを、後難が怖ろしいと誰も役人の殺された事を痛快に思ふものは無くて、却て龍之助の擧動の慘酷なのに恨みを抱く位でした。

「飛んでもない事が出來た、假にもお役人を斯んな事にして、さあ、これからの難儀の程が怖しい」

蒼くなつて口を利く者もなく手を出す者もなかつたのを龍之助が察して

「心配することは無い、これは本物の甲府勤番の神尾主膳ではない僞り者である、その證據には自分が本物の神尾主膳への紹介狀を持つてゐるし、自分の友達は其の神尾をよく知つてゐる、これは近頃流行の浮浪の武士が、こんな狂言をして乘り込んで金を盜らうとして來た者だ、それだから二人共殺してしまつた、以後の見せしめに此の首を梟し物にしてやるが宜い、後難は更に憂ふる處はない、此の二人が乘つて來た乘物の中へ自分が乘つて甲府へ行つて此の責は引受ける、村の人達にはかり合ひはさせぬ」

と云つて龍之助は二人の僞役人が乘つて來た乘物にお伴の連中を其のままにして乘り込んでしまひました。お伴の連中が狐を馬に乘せたやうな面をして龍之助を荷つて此處を立つて行つたのは昨日の朝、若い者の頭分は其れを色々な仕方話で竹刀で刀型を見せたり何かして大分芝居がかりで話しました。殊に龍之助が槍で突いた時の呼吸や、一刀の下に首を打放した時の仕草などを見て來たやうにやつて見せて

「何しろ強い人でございます、滅法界もなく強い人でございます、あれから當家へお出でなすつた時に、斯うして私共が劍術をしてゐるのを見て……ではない、其の容子を聞いてゐまして、さあ、斯うして拙者が立つてゐるから打ち込んでごらんと竹刀を片手に其處へ突立つておいでなさる處を大勢して覘つて打ち込んで見ましたけれども、如何しても身體へ觸ることが出來ませんでした、眼が見えないであの位ですから眼が見えたらドノ位強いんだかわかりません」

「その盲目の武士といふ者こそ永年拙者が尋ねてゐる人」

兵馬は一禮して此の家の門を出て行きました。

望月の家を走せ出した兵馬が此の村を後にして元來た道、其處へ丁度通りかかつたのは空馬を引い

た背に男の子を負うた女。

「其馬は此れから何方へ行きます」

「これから三里村を通つて七面山の方へ参るのでございます」

「はて、それでは少し方角が違ふけれど、拙者はちと急ぎの用があつて甲府まで歸らねばならぬ者、お見受け申すに、馬は空荷の容子、せめてあの丸山峠を越すまで其の馬をお貸し下さらぬか」

兵馬は其女の人に頼んで見ました。

「お急ぎの御用とあらば……わたくし共には少し廻りでございますけれど、お貸し申しても宜しうございます、お乘りなさいませ」

兵馬は此の婦人が快く承知して呉れたの嬉しく思ひました。

併し、馬に乘りながら見ると、此の婦人が眼に涙を持つてゐるのが不思議であります。

二

斯うして宇津木兵馬はまたも甲府まで戻つて來て見ました處が、机龍之助の乘物が神尾主膳の邸内へ入り込んだ事は確かに突き止めたけれども其れから先何處へ行つたか、それとも此の邸内に留まつてゐるものだか、其處の見當が一向つきませんから是非なく非常手段に出でて、夜分ひそかに神尾の邸内へ忍び込んで見ようと思ひました。

三日目の晩は雨が降つて風も少し吹いてゐたから、兵馬は其れを幸に城内の神尾が屋敷あたりまで密に入り込んで夜の更くるのを待ち、追手濠の櫓下へ來て濠端の木蔭に身を寄せてゐる時分に、思ひがけなく、濠の中からムツクと怪しい者が現れて來ました。片手には金箱のやうなものを抱へ覆面して脇差を一本差し、怪しいと兵馬が思ふ間に、其の男は金箱を濠の端に置いて櫓の方へ、また取つて返します。

間もなく櫓の下から、また一人の男、今度は金箱のやうなものを脊中に確と結びつけてムツクリと出て來ました。それと同時に前に取つて返した男、それも亦ムツクリと出て來て、濠の中へ引張つた細引の縄を手繰り寄せ、その一端を前に置き放した金箱に結びつけて背中に引背負つて二人は煙の如く消えてしまひました。

其處には二重の怪しみがある。これは必定曲者と思うた怪しみと、もう一つは、その曲者二人共見覺えのあるやうな形。先に出て來たのが背といひ恰好といひ七兵衛そつくり、あとから來たのは片腕が無いやうであつた、して見れば德間の山の中から拾つて來たあのがんりきといふ男であらうか。

兵馬は實に不審に堪へませんでした。大外れた甲府城内の御金藏破り、今眼のあたり見れば、それもドチラも自分の知つた人、のみならず自分が世話になつた人、つい幾日前まで同じ宿にゐた人。餘りの不審に兵馬は後を追ひかけて見ました。併しもう何處へ行つたか姿が見えません。

これを二人の方にしてからが解せぬ事であります。百藏も江戸へ出て小商ひでもして堅氣になるといひ、七兵衛も亦それを贊成したのに、まだ此の邊に滯つてゐて遂に此んな大外れた事をやり出すやうになつたのか、さりとは測り方ない成行と云はねばならぬ。

兵馬は其の事から、七兵衛なる者に對する疑點が深くなりました。若しも彼は表面あんな事にして內實は此んな惡事を働いてゐる人間ではなかつたか知ら、さうだと知れば少くとも其の世話になつた事のある自分に取つては一大事だ。人は見かけに寄らぬもの恃みがたい者であるわいと兵馬も茫然として我を忘れてゐました。

その時に追手の橋の方で提灯の光り數多。

「櫓下の御金藏破り、出合へ出合へ」

兵馬が氣がつけば、危ない事、自分も疑はれるには充分な立場にゐる。さて何處へ避けたものと思つて見廻したが、何方にも提灯、はて迷惑な事が出來たわい。

兵馬は是非なく覆面を外して追手通りの方へ引返しました。無論の事、其處には警固の侍足輕が澤山ゐる、その網へ引かかるは覺悟の上で、引かかつた時は尋常に云ひ譯をしようと心を定めてやつて來たが、果して

「待て！」

バラバラと兵馬を取り捲いて來た警固の者。

「神妙に致せ」

そこで兵馬は調べられてしまひました。

「今時分、何しに此處へ來られた」

「ちと用事あつて」

「何用があつて」

「神尾主膳殿方まで罷り越たく」

「神尾主膳殿方へ、して貴殿は何者」

「拙者は江戸麴町番町旗本片柳伴次郎家中、宇津木兵馬と申す者」

「神尾殿と御昵懇の間柄か」

「まだ御面會は致しませぬ」

「面識も無いものが此の眞夜中に人を訪ねるとは心得難し」

「大切の用向あるにより」

「大切の用向とは」

「それは御城內勤番衆二三の方にも知合があるにより事情を述ぶれば委細明白の事」

「その言譯は暗い、他國の者、夜中此のあたりを徘徊致すは不審の至り、尋常に繩にかからつしやい」

「縄に」
「溫和しくお縄を頂戴致せ」
「縄にかかるやうな覺えはない」
「手向ひさつしやるか」
「なかなか、縄を戴くべき覺えなきにより手向ひ致す心もどさらぬ」
「言ひ逃れを致さんとするか、不敵者」
「これは理不盡な」
兵馬の言譯は聞き入れませんでした。それで兵馬に縄をかけようと群がつて來た時に、其の中から分別あり氣な武士が一人出て來ました。
「お見受け申す處、お年若のやうでもあるし、兩刀の身分、且は番町片柳殿の家中と申されるからには捕者にも多少の思ひ當りがござる、人違ひして滅多な事があつては宜しくあるまい、併し乍ら今宵の大變に出會なされたが貴殿に取つての不仕合せ故、兎も角も尋常に奉行までお同行下さるやう、委細の申開きは奉行に逢つてなさるが宜しからうと存ずる」
斯う穩かに云はれて、兵馬は大勢に圍まれて勘定奉行の役宅の方へ引かれて行つてしまひました。
兵馬は勘定奉行の役宅へ預けられて殆ど牢屋同樣の處で其の夜を明かしました。夜は明けたけれども、兵馬の身の明かりは立たなくなりました。

盜賊の行方は一向わからない上に、彼等が忍び出でた痕跡のある濠端は丁度兵馬が通りかかつたと同じ方向でした。其上に兵馬は神尾主膳を尋ねると云つたけれども神尾は兵馬なるものを一向知らないと云ふし、それは兎に角、兵馬が何故に夜分あんな處へ來合せたかといふ事が、誰に取つても解けぬ不審でありました。すべてが兵馬に不利になつて行くから、氣の毒にも兵馬は獄に下されるより外に仕方のない破目に陷りました。

三

さる程に道庵先生がまた飛び出して來ました。何處へ飛び出したかと云へば貧窮組の中へ飛び出して來ました。
この貧窮組といふものが前に申すやうに山崎町の太郎稻荷から初まるには初まつたが、此の位不得要領な組合もなかつたものです。幾百人の男女が市中を押し廻つて町の角や辻々へ大釜を据ゑて町内の物持から米やお菜を貰つて來て粥を炊いて食ひ、食つてしまふと鬨の聲を擧げて、また次の町内へ繰込んで、貰つて炊いて食歩くのです。その仲間に入らないと受が悪いから相當の家の者共が皆んな一ぱしの貧窮人らしい面をして粥を食ひ歩く、食つて歩くだけで別に亂暴をするのではない。大鹽平八郎が出て來るでもなければトロツキーが指圖をするわけでもない。ただわーと騷いで歩くだけの事

だから、道庵先生が出現するには恰好の舞臺です。

長者町の先生の家へ町内の遊び人がやつて來て

「今日は、わつし共の町内でも、いよいよ貧窮組をこしらへますから、此方様でもお仲間入をして下さるか、さうでなければ、いくらか奉納して貰ひてえんでございます、それが出來なければ此方にも覺悟があるんでございます」

と出ました。

それを聞いたから道庵先生が飛び上つて喜びました。

「占めた」

草履を逆さにして遊び人を其方退けにして駈け出してしまつたわけです。

「馬鹿にしてやがら、貧窮組なら此方が先達だ、おれに斷り無しに拵へたのが不足な位なもんだ、押しも押されもしねえ十八文だ、十八文の道庵は俺だ」

丁度米友が柳原河岸へ行つてしまつた時分に、道庵先生は昌平橋で大勢の貧窮組が粥を食つてゐる處へ駈けつけました。

「さあ道庵が來たぞ、十八文の道庵は俺だ、見渡した處、貧窮組の先達で俺の右へ出る奴は有るめえ」

自分から名乘りを上げてしまひました。元より道庵先生は此の近所で人氣があるのです。人氣があ

る上に丁度斯ういふ舞臺へ乘り出すには打つて附けの役者でしたから、一同が其の名乘りを聞くと、やんやと云つて喝采しました。道庵先生の得意想ふべしで、嬉し紛れに米俵を引いて來た大八車の上へ突立つて演說をはじめてしまひました。

「さあ、皆の衆、俺は御存知の通り長者町の十八文だ、今度皆の衆が貧窮組をこしらへたと云ふのは近頃宜い心がけで俺も感心した、俺に沙汰無しで拵へた事が些とばかり不足といへば不足だが、それは感心と差引いて埋め合せて置く、一體物持といふ奴が癪にさはる、歩が成金になつたやうな面をしやがつて、我々共が食ふに困る時に高い金を出して羅紗なんぞを買ひ込みやがる、そこで皆の衆が物持から米や澤庵を持つて來てウンと喰ひ倒してやるといふのは天道様の思召だ、實にいい心がけである、贊成！」

煽つてしまつたから堪まらない。

「やんや」

「やんや」

四方から喝采が起る、道庵先生、いかめしい咳拂ひをして

「此れから俺が先達になつてやるから安心しろ、併し俺は大鹽平八郎では無えから、危なくなれば逃げるよ、俺に逃げられたく無えと思つたら亂暴をするな、人の物を取るな、女をいぢめるな、役人が來たら俺も逃げるから皆んなも逃げろ」

「やんや」

「やんや」

「相對で物を貰つて喰ふ分には差支へ無えが人の物を盜つたり亂暴をしたりすると捉まつて首を斬られる、首を斬られるのは俺もいやだがお前達もいやだらう、だから亂暴をしては可けねえ」

この不得要領な貧窮組は其の夜は昌平橋際へ夜營をしてしまひました。この位の騷ぎだから役人の方へも聞えない筈はありません。けれども幕末の悲しさ、これを取押へん爲に捕方が向つて來る模樣も見えませんでした。さうなつて見ると貧窮組の組織は決して此の一ケ所に止まらない事です。

江戸市中至る所に此の貧窮組が出來てしまひました。道庵先生の如きは興味を以て此の貧窮組に贊成をしたけれども、貧窮組に馳せ參ずるものの總てが道庵先生の如き無邪氣な煽動者ばかりではありません、と云づて幸ひな事に、大鹽もトロツキーも出て來なかつたからそれを天下國家の問題にまで持ち上げる豪傑は入つて來ないで、小無賴漢のうちの拔目の無いのがこれを利用する事になりました。

困つたのは道庵先生で、本業の醫者を其方退けにして貧窮組の太鼓を叩いて歩いてゐます。因果な事に先生には此んな事が飯よりも好きなのでただ嬉しくて堪まらないのです。嬉し紛れに一種の煽動者となつてしまつたけれど、時々穩健な說を唱へて、大した亂暴を働かせまいと苦心してゐるのは感心なものです。

この貧窮組が昌平橋に夜營してゐる時分に、これより程遠からぬ處に住居してゐる金貸の忠作はお絹と夕飯を食ひながら呟いて云ふには

「惡い事が流行り出した、ここは表通りではないけれど、其の中には何か集めに來るだらう、其の時は手嚴しく斷つてやる」

お絹は其れに對して

「そんな事をして惡まれると可けないから少し位出してやつた方が宜いだらう」

「可けません、癖になるから可けません、あんな性質の惡い組合をお上が取締らないといふのが手緩い」

忠作は子供の癖にこの頃ではもう前髮を落して肩揚の取れた着物を着て一ぱしの大人ぶつてゐます。

「でも大勢に惡まれてはつまらない」

お絹は氣のない面をしてゐたが、忠作は一向撓まずに

「貧乏な奴は日頃の心がけが惡いんだ、有る時は有るに任せて使つてしまひ、無くなると有る奴を嫉んで、あんな騷ぎを持ち上げる、あんなのを增長させた日には眞面目に稼いでゐる者が災難だ、わたしは鐚一文もあんなのに出すのは御免だ」

「そんな一難な事を云つて、大勢の威勢で打ち壞しにでも會つた日には些とやそつとの金では埋合せが附かない」

「たとへ打ち壞しに逢つたからと云つて、あんな筋の違つた奴等に物を出してやる事は出來ません、

あんなのが出來た爲に日濟の寄りの惡い事、一體役人が何を愚圖々々してゐるんだらう、一々括り上げて牢へ打ち込むなり首を斬るなりしてしまへばいいのだ」

此んな事を云つてゐる時に、表の戸がガラリと開いて

「へえ、御免下さいまし、町内でもいよいよ貧窮組をこしらへますからお宅様でも如何か應分の御助力を願ひたいもので」

ドヤドヤ入つて來たものがあります。

「それやつて來た」

忠作は苦い面をして玄關へ出て見ると、威勢のよい遊び人風をしたのが二三人先へ立つて、あとは雜多の貧窮組。

「へえ、御存知の通り町内でも貧窮組をこしらへましたから、此方様でも、誰方かお出で下さるやうに、若しお手少でございましたら幾分か費用の寄進について戴きたいものでございます」

それを聞いた忠作は

「折角でございますが、私共は無人でございますから」

「それでは如何か、思召の寄進をお願ひ申します、この通り町内様で皆んな賛成をして戴いたんでございますから」

帳面を繰ひろげて、穀屋では米幾俵、薪炭屋では店の品幾駄といふやうに夫れ夫れ寄進の金高と品物の數が記されたのを見せると

「宅なんぞは此の通り裏の方へ引込んで居りまして、とても表通りのお歴々と同じやうなお附合は致し兼ねまする、どうか其れは御免なすつて下さいまし」

「それでは誰か貧窮組へ出てお呉んなさるか」

「宅は女と子供ばかりで」

「やい、巫山戯やがるな、貧窮組を何だと思つてるんだ、愚圖々々吐すと此方にも了簡があるぞ」

「皆さんの方に了簡がお有りなさるなら了簡通りになさいまし、宅では貧窮組なんぞへ入る人間は一人もございませんし、そんな處へ出すお金なんぞは鐚一文もございません」

「何だと、この若造、やい、皆んな聞いたか、今の此の野郎の言草を聞いたか」

威勢のいい兄いが片肌を脱いでしまひました。其れに續いた面々が皆眼を三角にする。

「貧窮組なんぞへ入る人間は一人も無えんだとよ、そんな處へ出す錢は鐚一文も無えんだとよ、皆さん方に了簡がお有りなさるなら了簡通りになさいましと吐したぜ、箆棒奴、了簡通りにしなくつて如何するものか、貧窮組を何だと思つてやがるんだ、憚りながら貧窮組は貧乏人だ」

「此家の宅は、これで金貸をしてやがるんだ、貧乏人泣かせの親玉は此家の宅なんだ、今のあのコマしやくれた若造が、あれで鬼見たやうな奴なんだ、主人はお妾上りだといふ事だ、金持を欺して絞り上げた其金で、高利を貸して今度は貧乏人の生血を絞らうと云ふ奴等なんだ、だから貧窮組が嫌ひ

なんだらう、誰も貧乏の好きな者は無えけれども時世時節だから仕方が無えや、馬鹿にするない」

「貧窮人が如何したと云ふんだい、そりや錢金づくでは敵はねえけれど頭數で來い、憚りながらこの通り目高のお日待のやうに貧乏人がウヨウヨ居るんだ、これが皆んなビービーしてゐるから其れで貧乏人なんだ、金が有るといつて餘まり大きな面あするない、これだけの頭數は皆んな貧乏人なんだ、逆さに振るつたつて血も出ねえんだ、その貧乏人が組合つたから貧窮組といふんだ、貧乏でキウキウ云つてるから其れで貧窮組よ、馬鹿にするない」

多勢の貧窮組が口々に惡態を吐き出したけれど忠作は意地つ張りで

「何と仰有つても私共は、皆さんが貸せと仰有るから貸して上げるだけの商賣でございます、何も皆さんに筋の立たない金を差上げる由がございませんから」

斯う云ひ切つて、玄關の戸をパタリと締めてしまつて中へ引込んだから納まらない。

「それ打ち壞してしまへ」

遂に貧窮組が此の家の打ち壞しをはじめました。

貧窮組の一手は遂に忠作の家をこはし始めました。火を放けると近所が危ないから火は放けないで、門、塀、家財、道具を滅茶々々に叩き壞します。忠作は素早く奥の間に駈け込んで、證文や在金の類を詰め込んで用心してゐた葛籠の始末にかかると、何時の間に入つて來たか覆面の大の男が二人突立つてゐました。

この大の男は、貧窮組とは非常に趣を異にして、其の骨格の逞しい處に、小倉の袴に朱鞘を横へた風采が、不得要領の貧窮組に見らるべき人體ではありません。忠作が始末をしてゐる葛籠の處へ來て、默つて忠作の細腕をムヅと掴んで捻ぢ倒すと同時に一人の男は其の葛籠を輕々と背負つて立ち上がります。

「盜賊！」

忠作が武者振り附くのを一堪りもなく蹴倒す。蹴られて忠作は悶絶する。大の男二人は悠々として其の葛籠を背負つて裏手から姿を消す。

貧窮組は表から盛んに叩きこはしてゐたが、いい加減叩きこはしてしまふと鬨の聲を揚げて引き上げました。

元より宿意あつての貧窮組ではないから二度まで盛り返して來ず昌平橋へ行つてお粥を食つてゐます。貧窮組は此の位無邪氣といへば無邪氣なものだけれど合點の行かないのは朱鞘を横たへた小倉袴の覆面の大の男。表で無邪氣な貧窮組を騷がして置いて、金目の物を引浚つて裏から消えてしまふといふのは武士に有るまじき行であります。

この勢で貧窮組は江戸の市中へ蔓延して、遂には貧窮組へ入らなければ人間でないやうになつてしまひました。男ばかりではない、女も入らなければならないやうになりました。職人は職人同志、藝人は藝人同志で貧窮組を作らなければならない義務が出來て、萬一貧窮組に加入してゐない事が知

れようものなら人間の仲間を外されて非人の仲間へ組入れられなければならなくなりました。さうして貧窮組は遂に江戸市中を風靡してしまつたけれど、其の不得要領な事は何時まで經つても不得要領で、お粥を食つて歩く事、せいぜい忠作の家を叩き壞す位の處であつたが、解せぬのは其の貧窮組が騒いで行つたあとで必ず貧窮組らしくない仕業が二つ三つ必ず殘されてゐる事です。この手段は前の忠作の家を荒した時と同じやうな手段で、表で貧窮組が騒いでゐる時、裏で、前に見る通り、朱鞘を差した堂々たる武士が仕事をするのであります。

其の强奪の仕方が餘りに大膽で大袈裟で、然も遮る人があつても人命を殺めるやうな事はなく、衣類や小道具などには眼も呉れず、纏まつた金だけを引浚つて悠々として出て行く。

不得要領で何處までも擴がつて行く貧窮組、それと脈絡があつて此の强盗武士に要領を得さするものとすれば貧窮組も決して不得要領ではないけれど、貧窮組に其んなアクドい根のない事は其の成立の動機が煙見たやうなのでわかるし、其成行がお粥以上に出でないのでわかります。然らば其の貧窮組を表にして、其れとは全く沒交渉でありながら、巧みに其れをダシに使つて大金を奪ひ歩く武士體の强盗は果して何者、さうして其の盗つた金を何事に使用するだらう。市中の大商人で、この朱鞘の武士の强奪に會つたものは無數であつたけれども、後の祟りを怖れて其れを表立つて申出でない、申出でても當時の幕府の威勢では其れを充分に取締るの力さへ無かつたものです。

四

徳川幕府の影が薄くなつて、其のお膝元でさへ此の始末。

貧窮組が斯うして不得要領の騒ぎを續け、浪士と覺しき强盗が蔭へ廻つて惡事を働き、なほ火事場泥棒式の惡漢が出沒するけれども、それを取締る捕方は出て來るといふ評判だけで、些とも出て來ません。

人形町の唐物屋を貧窮組が叩き壞した時は、朝の十時頃から初めて家から土藏まで粉のやうに叩き壞してしまひました。いくら多勢の力だからと云つて此れは人間業とは思はれませんでした。表の店の鐵の棒が飴を捻るやうに捻切つてありました。其を捻切つたのは十五六の子供であつたといふ事、それは天狗の子に相違ないといふこと、天狗の子供が先に立つて大勢の指圖をして歩くのだといふやうなことが言ひ觸らされました。

「天誅」の文字が江戸の市中にも流行り出して來て市民を戰慄させたのは其れから幾らも經たない時でありました。此の「天誅」の文字は大和の「天誅組」から筋を引いたものか如何か判らないが、武士と武士との間に行はるるのみではなく町人にまで及びます。私に人の首を斬つて、橋の上や辻々へ捨札と共に掛けて置きます。市民の財産の危險は漸く生命の危險に脅かされて來ました。

さても本所の鐘撞堂の相模屋といふ夜鷹宿へ、やつと落着いた米友はお君から何かの便りがあるかと思つて、前に兩國の見世物を追出された晩、お君と二人で宿を取つた木賃宿へ行つて容子を聞いて、まだ何も消息が無いと聞いて失望して歸りがけに、兩國橋を渡りかかると、多くの人が橋の上に立つてゐますから、米友も何氣なく覗いて見ました。米友ではトテも人の上から覗き込むことは出來ないから、人の腰の下から潜るやうにして見ると橋の欄干へ板札が結び付けてあります。米友は學者（お君に云はせれば）ですから直ぐに其の板の文句を讀むことが出來ました。

本所相生町二丁目、箱屋惣兵衛、右之者商人の身ながら元來賄金を請ひ府下の模樣を內通致し、剩へ婦人を貪り候段、不屆至極につき、一夜天誅を加へ兩國橋上に梟し候所、何者の仕業に候哉、取片付候段、不屆きに且不心得につき、必ず吟味を遂げ同罪に行ふべき者也

報國有志　　月　　日

此高札三日の內取片附候もの有之ば、役人なりとも探索の上、必ず天誅すべきもの也

米友は其の文句を讀んでしまつたが、腑に落ちない事がありました。

「この札は此りや誰が立てたんだ」

米友は獨り言のやうに聞いて見ましたけれど誰も返事をするものがありません。

「此の高札三日の內取片附候ものあらば、役人なりとも探索の上、必ず天誅すべきもの也、てえのは穏かでねえ」

米友が仔細らしく此んな事を云ひ出したから、集まつてゐた人は其れを聞いて滑稽に思ふよりは怖ろしく感じました。さうして何者が其んな事を言ふかと思つて、聲の出た處をよく見ると人の股の間にモゴモゴしてゐる米友でしたから皆んなブツと吹き出しました。

米友に取つては笑はれる自分よりも、笑ふ奴等の方が可笑しい。單純な米友は理由なきに冷笑された事を不本意としてムツとして來ました。

「何が可笑しいんだい、俺らの言ふ事が何が可笑しいんだい」

「若い衆、さう怒るもんぢやねえよ」

米友がムキになつたのを和めたのは老人。

「こりや天誅組といふ奴なんだから、お役人でも始末に行かねえんだ」

「天誅組といふのは何んでございます、お爺さん」

米友は老人の面を見上げる。

「天誅組といふのは、この頃流行り出した惡い貼紙で、疱瘡神よりモツト險呑な流行神だ」

「其んな險呑な流行神を平氣で眺めてゐる奴の氣が知れねえ」

見物はまたドツと笑ひ出して

「うむ、全く氣が知れねえ、若い衆、お前何とか一つ其の流行神を始末をして見ねえな、人助けになるぜ」

「馬鹿にするない」

米友が眼をクルクルして群集を見廻した、その面つきと身體を見て群集はやはり笑はずには居られません。高札よりも此の方が餘ほど見榮があると思つて

「豪い！」

拍手喝采して此の奇妙な小男の本氣になつて憤慨するのを彌次り立てて樂しまうとすると、米友は却て其れ等を相手にしないで、欄干に結びつけてあつた高札の綱目を解きにかかつたから

「おやおや」

彌次連の面の色が變ります。

「おい、若い衆、小せえの、何をするんだい」

慌てて留めたのは老人。

「冗談ぢやねえ、煽てに乘るも大概がいい、その高札へお前、指でも差さうものなら、大變な事になるぜ、引込んでゐなせえ、ゐなせえ」

「ナニ、構はねえ」

「三日の内取片付候ものあらば、役人たりとも探索の上必ず天誅すべきもの也、この字がお前にも讀めたんだらう、天誅といふのは首が飛ぶことなんだ、いいかい、この高札を動かさうものなら、お前の首が無くなるんだ、お前が遠からず首を斬られてしまふんだぜ」

「誰が俺らの首を斬りに來るんだ」

「天誅だよ、天誅だよ」

「天誅が首を斬りに來るのか、天誅といふのは何だ、俺らはまだ天誅に首を斬られるやうな事をした覺えは無え」

米友は留めて呉れる老人の手を振拂つて、苦もなく高札の縄を解いてしまひ、其の高札を振上げて橋の上から川の中へポンと投げ込んでしまひました。

「無茶な事をする奴だ」

さすがの彌次馬も舌を振つてしまひました。

これが不思議な縁で米友は其の翌日から本所の相生町の箱屋惣兵衛一家の留守番になつてしまひました。それで鐘撞堂の相模屋から氣輕く其處へ移つてしまひました。

この縁は昨日の高札の一件からであります、米友が高札を川へ拋り込んだ爲に町内からこの家の留守番を押つけられたものです。

米友も亦押しつけられた事を却て幸ひにして箱惣の留守番を欣んで引き受けてしまひました。

米友が留守番を押しつけられた箱惣の家は大きな家でした。けれども誰一人も住んではゐないのです、ガラ空です。ただの空屋と違つて誰も留守居をし手のない空家なのです、昨日、米友が投げ込ん

だ札の文句にも

本所相生町二丁目

箱屋惣兵衛

右之者、商人の身ながら、元來賄金を請ひ、府下の模樣を內通致し、剩へ婦人を貪り候段……と

ある通り、浪士達に惡まれてツイ此の間の晩、首を斬られて、兩國橋へ梟らし物にかけられた惣兵衛の家です。その首が誰が如何したか直に片附けられてしまふと、其の後へ立てられた高札が卽ち米友の川へ投げ込んだものであります。その後難の人身御供の意味で留守居を押し附けられ米友は主人の居間であつた贅澤な一間にゴロリと横になつてゐる、其の傍には例によつて槍が一本あります。

何者が來るか知らないが、仕返しに來たら此の槍で拶挨をしてやる、もとの主人には何か恨む處はあるか知れないが、自分は疚しい處が無いと、一人力んでゐたけれど二晩三晩といふものは、サツパリ何も手答がないから、米友も力瘤が弛んで來ました。四晩目の晩、雨が降つて鬱陶しいものだから、行燈の下で、やはり寢ころんで繪草紙を見てゐました。

「今晩は」

「今晩は」

二聲目で初めて氣が着いた米友は、外で呼ぶのが女の聲で、表の大戸を輕く叩いてゐるやうでしたから

「今晩は」

返事をして次の文句を待つてゐましたが、不思議な事に其れッ切り。

「怪しいな、人を呼びつ放しにして引込むなんて」

「今晩は」

「返事をしてゐるぢやねえか、何か用事があるのかい」

「あの、仕出し屋でございますが……」

ナンダ、いつも辨當を運んで呉れる仕出し屋か、辨當ならば、もう食べて終つたから入用はないと思つて

「辨當箱を取りに來たのかい」

「さうではございません、若い衆さんに一口上げて呉れと町內から頼まれまして」

「ナニ、俺らに一口上げて呉れつて、そんな人は無え筈だが」

「どうか此處をお開けなすつて下さいまし」

「どうも怪しいな」

米友は怪しいと思ひながら戸を開けると、いつも來る仕出し屋の女が丸に山を書いた番傘を指して

岡持を提げて立つてゐます。

「俺らに御馳走して呉れるといふのは誰だらう」

「町内の衆でございます」
「町内の誰だらう」
「ただ町内から屆けたと、さういへば判ると申しました」
「俺らの方ではよく判らねえ」
米友は一合の酒と鰻の丼を受取りました。仕出し屋の女は歸つてしまひます。米友は、また元の處へ歸つて、鰻の丼と一合の酒を前に置いて、頻りに其れをながめてゐました。一合の酒も飲んで見たくない事はない、鰻の丼も食慾を刺戟しない事もない、けれども町内の誰が寄越したんだか、それが判らないのが不足である、うつかり御馳走になつていいものだか如何だか……米友は一合の酒と鰻の丼を後生大事に睨めてゐました。
一合の酒と鰻の丼を睨めてゐる米友。
「飲んで終はうか、それとも飲まずにゐた方がいいか、この鰻の丼を食つて終へば其れまでだが食はずに置いて見た處で其れまでだ」
米友は色々に考へて見たが結局、この無名の贈り主から贈られた酒は一滴も飲まず丼は一箸も附けずに放つて置く方が宜しいと覺悟をして床の間の方へ持つて行つて飾つて置きました。飾つて置いてそれをやや遠くからまた暫らくながめてゐたが
「斯うして俺らに酒を飲まして置いて酔つた處を見計らつて計略にかけるつもりだとすると、其んな計略に引つかかつても詰らねえ」
誰も米友を毒殺しようといふ程の物好きも無からうけれど、米友の方でたうとう一合の酒と鰻の丼を敬遠してしまつて、それからまた本を見出してゐると
「今晩は」
又も表で人の聲、前と同じやうに女の聲。
「誰だ」
「仕出し屋でございます」
「ちェッ、また仕出し屋か」
「まことに相濟みませんが、先程のお丼と御酒は間違ひました」
「ナニ、間違へたつて」
「御近所へ持つて上るのをつい間違へまして申譯がございません」
「そんな事だらうと思つた、俺らに御馳走して呉れる奴は無い筈なんだから」
米友は跛足を引きながら、今床の間へ飾つて置いた一合の酒と丼、果して手を附けなかつた事の幸ひを感じて、其れをそつくり持つて來てやりました。仕出し屋の女中の方では食はれてしまつても此方の粗忽だから文句の無い處へ、米友が手も附けずに返して呉れたのだから大へん喜びました。
「氣をつけなくつちや可けねえ、俺らだから手を附けなかつたが、外の者なら食つてしまふんだ、

俺らも實は食つてしまはうか如何しようかと色々考へたんだ」

「どうも相濟みません」

仕出し屋の女は定まりの惡い面をして、一合の酒と鰻の丼を持つて急いで敷居を跨いで外へ出ました。米友は一合の酒と鰻の丼の香ばかりで妙な面をして見送つてゐたが、表を二三間歩いたと思はれる仕出し屋の女中が

「あれー」、

ガチヤン、ビシーンといふ音、それによつて見ると、女中は其邊で轉んで倒れて泥濘の中へ折角の一合の酒も鰻の丼も皆んなブチまけてしまつたやうですから、米友は舌打をして

「だから云はねえ事ぢやあ無えや、粗忽かしい女だなあ」

潜り戸から面を出して雨の降る暗い處で轉んだ女中を嗜めようとする途端

「靜かにしろ」

その潜り戸から跳り込んだ二人、小倉の袴に朱鞘に覆面、背恰好共忠作の家で金目の葛籠を奪つて裏口から悠々と逃げた强盗武士其儘の男であります。

「さあ來やがつた」

覺悟の上、米友は不自由の足ながら傘のお化のやうに後へ飛んで返つて以前の一間に置いてあつた槍を手に取りました。

「待つてたんだ、雨國橋の立札を川ん中へ拋り込んだのは俺らの仕業に違えねえ、さあ何とでもして見ろ、宇治山田の米友の槍を一本食はせてやる」

米友の槍はこれを侮つても侮らなくても防ぐことは六づかしいものです。

「呀ツ」

内へ轉げないで外へ轉げた覆面の浪士は米友の一槍で太股のあたりをズブリと刺されたらしい。

五

折角金貸を初めた忠作、あの夜の一騒ぎから滅茶々々になつてしまつて、お絹は何處へ行つたか行き方が知れないし、金目の物は悉く奪はれてしまひました。

「癪にさはる、あの貧窮組といふ奴が癪にさはる、それにあの浪人者、浪人者といふ奴が彼方にも此方にもウロウロして事あれかしと覘つてゐやがる、貧窮組といふ奴はワイワイ騒ぐだけだが、浪人者といふ奴は大ビラで强盗をして歩く樣なものだ、斯うして歩いてゐる中には何處かで出會すだらう、出會したら後をつけて手證を押へて町奉行へ訴へ出るんだ、此方も意地だ、キツト尻尾を捉まへて見せる、おれの家から取つて行つたものだけは、取返さなくつて置くものか」

忠作は齒噛みをしながら、此の頃では毎夜蕎麥屋の荷物を擔いで、蕎麥は賣つたり賣らなかつたり

して、夜遅くまで市中を歩いて佐久間町の裏長屋へ歸ります。今宵は淺草方面から賣り歩いて兩國橋手前まで來ると

「駕籠屋」

闇の中から人の聲。それに呼ばれて朦朧の辻駕籠が

「へえ」

と云つて振り返つた。とある家の用水桶の蔭に眞黑な二人。兩方共長い刀を差してゐます。

そこで駕籠屋を不意に呼びかけたから、駕籠屋も驚いたやうであつたし、通りかかつた忠作も少し驚きました。

「駕籠をこれへ持つて參れ」

「どうもお氣の毒樣、これから藏前のお得意まで行くんでございますから」

「默れ！　默つて駕籠を持つて來い」

嚇かして置いて長いのをスラリと引拔くのではなく、懷中から投げ出したのは若干の酒料らしい。

用水桶の蔭に隱れてゐた浪人體の怪しの者は背に引掛けてゐた一人を勞つて駕籠の中へ入れると

「旦那、何處まで行くんでございます」

「默つて拙者の行く處まで行けば宜い」

駕籠側に一人が附き添うて無暗に走り出しました。

それを見てゐた忠作は何と思つたか蕎麥屋の荷物を拋り出して一目散に駕籠の跡を追ひかけました。

神田へ出て日本橋を通つて丸の内へ入つて芝へ出て愛宕下の通りをまた眞直に何處までともなく飛ばせる。遂に駕籠は芝の山内へ入る。丸山の五重の塔、其の五重の塔の姿が丸山の上に浮き立つてゐるのを横目に睨んで、土塀だの板塀の物見だの長屋だの幾つも廻つて駕籠が飛んで行く。左右を見廻すと、やつぱり丸山の五重の塔、はて其れではあの塔の廻りをグルグル廻つてゐるのかな。

さう思つてゐる中に、大きな土塀つづきで右の五重の塔と向き合つた處に堂々たる黑塗の大門がある、その堂々たる大門の中へ駕籠はスツスツと入つて行きました。

何者の邸であらうか知らないが、入つて行つた者も武士の姿こそしてゐるが其の仕業は武士ではない、此の家から出てさういふ事をさせる筈も無からうし、外からさういふ事をした者を内へ默つて入れる筈も無からうと忠作が思つてゐると、門番が居るのか居ないのか知らないが、無事にスーツと其の駕籠は門内へ納まつてしまひました。

あの駕籠が通れる位なら自分も通れるだらうと、忠作も續いて入り込まうとすると

「コラ誰かッ」

雷のやうな一喝。

「今のあのお乘物の……お乘物の」

「乘物が如何した」

「あれは當家の御家中のお侍でございますか」

「馬鹿！」

頭から一喝した仁王のやうな門番が取つて食ひさうな劍幕ですから、忠作は怖ろしくなつて飛び出しながら黑塗の堂々たる大門を見上げると、正面三ケ所に轡の紋があります。

この門をよく見直すと、左右に門番があつて屋根は銅葺の破風造り、鬼瓦の代りに撞木のやうなものが置いてあります。

土塀を一周り廻つた忠作が通りの町家で聞いて見ると、これは薩州鹿兒島の島津家の門だと知れました。

鹿兒島の島津家といへば九州第一の大々名、其の門と邸の結構の堂々たることはさもあるべき事だが、判らないのは其處から强盜が出て町家を荒して歩くといふことです。あの二人の者は慥に自分の家へ入つた浪人體の强盜、その一人はどうやら手傷を負うたらしい一味の者。

それを無事に門内へ入れた處を見ると、これは疑ふべくもなき此の邸内の人、さうして見れば薩州の家來には强盜を内職にしてゐる者がある筈である。いかに亂世とは云ひながら大名の家來が强盜を内職にしてゐるといふのはあるべき事ではありません。

その晩はそれで歸つて、翌日忠作は神田佐久間町の裏長屋を引拂つて此の薩州の屋敷の傍へうつる事にしました。幸、三田の越後屋といふ蕎麥屋に雇人の口があつたから直ぐに其處へ雇はれました。

忠作が此の蕎麥屋へ奉公して見ると此の界隈の物騷な事は神田や本所のそれ以上でありました、越後屋は大きな蕎麥屋で、奥座敷などが幾つもあるが、其の奥座敷は屢々一癖ありげな侍に借切られる事があります。忠作は算勘が利いて才氣があつたから、出前持をせずに帳場へ坐らせられる事になつて三日目の晩、店へ現れた田舍者體の男と計らず面を見合せて

「おや、お前さんは」

「お前さんは」

これは甲州の、德間入の山の中以來の會見であつて、田舍者らしい男は七兵衞であります。

七兵衞は奥座敷を一つ借り切つてそこで一人で飲んでゐると、暫らくして忠作がやつて來て一別以來の話になりました。

お絹の事や、がんりきの事が出て、七兵衞は可なり忠作をからかつてゐたが

「私の姪が此の蜂須賀樣に御奉公をしてゐるんで、それで斯うしてやつて來ましたよ」

六

七兵衞がここで姪と云ふたのはお松の事であります。お松は此の時分、德島藩の中屋敷へ奉公して

居りました。徳島藩の中屋敷は薩州の邸とは塀一つを隔てた處にあつて、お松は其處に奉公してから日もまだ浅いけれども、目上にも朋輩にも信用され可愛がられて、前に神尾の邸にゐた時のやうな危ない事は更になし、まことに無事に暮して居りました。

此の際お松は今までにない一つの縁談をほのめかされました。この話は至極實直に持ちかけられ、さうして自分の身を落ち着けるには決して爲にならない處ではないし、自分も亦身を落ち着けてから、見込んで世話した人の鑑識を裏切るやうな事はないつもりだと自信はしてゐるけれども、お松は如何しても其れを承諾する氣にはなれませんでした。

斷るならば何と云つて斷らうか知ら、其れが一つの難題で、折角ああ云つて呉れる親切を無下に斷つてしまへば、お互に氣マヅくなつて、また自分は此のお邸を出なければならない事になるかも知れぬ、さうなるとまた落着く處に迷ふかも知れぬ。お松は其の晩散々に此の事を考へてしまひました。

無事に暮らしてゐたけれども兵馬の事を考へないわけには行きません。兵馬の事は忘れたことは無いのに、幾度も其れを考へ直さねばならなくなりました。

深いやうで浅い二人の縁、浅いやうで深い二人の間、お松には其れを如何して宜いかわからない、兄妹のやうにして永らく一緒にゐたけれど、どうも物足りない、兵馬其の人に不足は無いけれど、自分よりは仇討の方を大事がる兵馬がお松には如何しても物足りないのでした。

と云つて兵馬さんは、わたしを可愛がらないのではない。わたしを一番可愛がつてゐるし、わたしも亦兵馬さんが一番可愛ゆいけれども其れだけでは頼りがない、わたしが此處で外へお嫁に行つてしまつても、兵馬さんは口惜しいとも悲しいとも思ひはしないで、却て祝つて下さるでせう、それでは詰らない、お嫁に行つてしまつたのを喜んで呉れるやうな可愛がり方では其れでは詰らない、とお松は其れを物足りなく思ひます。

駿河の清水港で別れてから、船と共に江戸へ着いたお松、船頭が德島藩の出入りで此處へ世話をされて來てから兵馬の便りは一度甲府からあつた丈でした。七兵衞は二度ばかり訪ねて呉れたけれども、いつも風のやうに來て風のやうに歸つてしまふ。その度毎に手紙を書いて其れを兵馬の手許に屆けて貰ふことをお松は何よりの樂みにしてゐました。

近いうちまた七兵衞が來る筈、お松は此の頃、部屋に下がると毎夜のやうに手紙を書くことばかり、今も色々と思ひ惱まされた揚句がその思ひ丈を紙にうつすことによつて、其の憂を晴らさうとしました。

お松は自分の今の生活が至極平穏無事であること、御殿でも皆の人に可愛がられて昔のやうな心配は更に無い事、朝夕朋輩衆と笑ひながら働いてゐる事などを細々と書きました。自分の身は其んなに無事幸福であるけれども、江戸市中は日に増し物騒になつて行つて、兇器を拔いた浪人者が横行したり、貧窮組が出來たり、この末世は如何なつて行く事かと市民が心配してゐる事、それ故滅多に外出は出來ない事、附近に薩州を初め内藤家、久留米藩などの大きな屋敷があつて殊に隣の薩州家などは

浪人者が澤山に出入して朝夕戰場のやうに見える事もあるけれど、こちらのお屋敷は靜かであること
などを書きました。さうして幾度か讀み直したりした上で封をしてしまひます。
それを枕元に置いてお松は床に就きましたが、兵馬の事を夢に見ました。夢に見た兵馬は嬉しい人
であつたが、やつぱり物足りない人でありました。
翌朝起きて見ると、昨夜書いて机の上に載せて置いた自分の手紙の上に、それとは全く別の人の書
いた一封の手紙が載せてあります。
「誰が置いて行つたのでせう」
お松は其の手紙を取上げて見ると七兵衛の手蹟でありました。
封を切つて讀むと
「兵馬樣の身の上に變事が出來たから急に相談したい、少しばかり暇を願つて、越後屋まで來るや
うに」
との事であります。
お松は胸が潰れる思ひがして、直樣朋輩に賴んで少しばかりの暇をこしらへて越後屋の奥座敷へ訪
ねて見ますと、七兵衛が待つてゐました。
「突然にああ云つてやつたら驚いたらう、困つた事が出來たといふのは、兵馬さんが縛られて甲府
の牢へ入れられてしまつた事だ」

「ええ、あの方が縛られて牢へ、それは一體、如何したわけでございます」
「其のわけには中々入り組んだ仔細があるのだが、人違ひなのだ、人違ひで捉まつて甲府の牢へ入
れられてゐる、運惡く、惡い處へ通りかかつたのが、兵馬さんの因果、身の明りの立つまではああし
て甲府の牢內に窮命しておいでなさらなくてはならねえ」
「どうして其んな惡い處へ通りかかつたのでございます」
「盜賊だ、盜賊のかかり合だ」
「盜賊！　そんな事はありますまい、どう間違つても兵馬さんが盜賊なんぞと、そんな間違ひのあ
る筈がございませんもの、伯父さん、早く兵馬さんの身の明りが立つやうにして上げて下さい」
「それに就て、俺も實に困つたのだ、トテも當り前の手術で兵馬さんの明りを立てる事は出來ない
から、仕方が無いからお前に相談に來たのよ」
「だつて、伯父さん、盜賊をしない者が盜賊の罪を被るなんて、お役人だつて判りさうなもの、盜
賊をするやうな人としない人とは一目見て判りさうなもの、伯父さんが早く行つて兵馬さんは其んな
人ではございませんと明りを立てておやりなされば、お役人が直に御承知になりさうなものではござ
いませんか」
「いや、役人も兵馬さんが盜賊するやうな人でない事はよく御存知なのだが、どうも丁度、御金藏
へ盜賊が入つた晩、兵馬さんがちやんと身拵らへをして其處に居たのだから、如何しても本物の盜賊

が出て來るまでは兵馬さんは赦されまいと斯う思ふのだ」

「そんなら早く其の本物の盗賊が捉まるやうに骨を折つて上げて下さいまし」

「それは隨分骨を折るけれども、何しろ惡い事をするやうな奴だから何處に居て、いつ捉まるか判らねえ、それに就てお松、お前に相談だが、俺が一つ兵馬さんを牢内から盗み出して來るからお前何處かへ兵馬さんを當分隱して呉れないか」

「ええ、兵馬さんを御牢内から盗み出して來るつて、伯父さんが」

お松は眼を睜つて

「伯父さん、そんな事をしないで、お役人によく仔細を話して、さうでなければ他に其の道の人を頼んで兵馬さんを助けるやうにして上げて下さいまし、お上の牢内から盗み出すなんて、そんな危ない事をしてはお互の爲にならないではありませんか」

「それだ、何しろ、今の時勢は此んな時勢だから眞直な事ばかりは通らねえのだ、當り前の事をしてゐた日にはトテも急に兵馬さんを助け出すことは出來ねえのだ」

「困つた事でございますねえ、御牢内のおかかりよりもモット上のお役人を頼んでお願ひをして見たら如何でございませう」

「そこに一つの當りが無えわけでは無えのだ、實はあの方の係りがお前の知つてゐるあの神尾主膳様よ」

「神尾主膳様、あの傳馬町のわたしの元の御主人様……」

「いかにも其の神尾様が此方を失敗つたものだから甲府詰を仰付かつたのだ、お旗本で甲府詰になるのはよくよくでもう二度と浮ぶ瀬が無いやうなものだ、それであの神尾様も甲府へ行つて自暴半分に中々良くない事をなさるさうだ」

「そんなら伯父さん、その神尾様が御牢内の方のお係りでありましたら、わたしが此れから彼方へ行つてお願ひ申して見ませう、兵馬さんは決して其んな惡い事をなさる人では無いといふことを、わたしから神尾の殿様によく申し上げてお願ひ申して見ませう」

「それなんだ、お前も一旦の御主人であつて見ればお前から願つて見れば聞いて下さるかも知れぬ、と云つて、あの殿様は中々性質の良くない殿様だ、お前が取り成した爲に却て餘計な面倒が起りはしないかと俺は其れを心配するよ」

「神尾の殿様だつて、丸つきり物のおわかりにならないお方ではございませぬ、わたしが一生懸命になつてお願ひをして見たら、きつとお聞き入れ下さることと思ひます、若しそれで可けませんでしたら、伯父さんの仰有る通り、兵馬さんを盗み出すなり如何なりしたが宜うございませう、さうなればわたしも覺悟をしますから、どんなにしても兵馬さんをお隱し申します」

「成程……併し、お前も今は主人持、ここで甲府まで出かけるといふわけには行くまいからな」

「行きますとも、甲府までででも何處までででも參りますとも、他の事とは違ひますから、わたしはど

んなにしても、此方のお暇をいただいて甲府へ參ります」
「若し暇が出なかつたらお前は如何する」
「お暇が出なければ……わたしはお邸を逃げ出しても宜しうございます」
「成程……」
七兵衛は暫く考へてゐましたが
「お前が其處まで了簡を定めて呉れたなら、俺は一つお前を連れて甲府へ乘り込むことにして見よう、素直にお暇の出ない事は知れてゐるから、今夜、わしが人目に立たぬやうにお前の處へ迎ひに行く、其れまでに身の廻りの物を用意して待つてゐるがいい、それからお邸の間取、お前の部屋の案内を聞かして貰ひたい」
そこで七兵衛はお松から邸の内部の模樣をやや委しく聞き取つて二人は此の店を別れました。

七

お松は七兵衛と別れて、越後屋の奥座敷を出て藩州邸の長い土塀をグルリ廻つて德島藩の裏門を入りました。
その晩、お松は色々の思ひで手近のものを用意して、日の暮れるのを待ち兼ね、日が暮れると、夜

の更けるのを待ち兼ねてゐました。他の女中達は晝の疲れで早くから眠つてしまひました。お松は女中部屋の戸を細目に開けて待ち構へてゐます。
屋敷の庭には大きな池があつて池の向ふには高い火の見櫓が立つてゐます。お松が夜更けて七兵衛の合圖を待つ時分に、此の火の見櫓の上に二つの黑い影法師がありました。共に夜番や火の番の類ではなく覆面をして兩刀を差して一人は手に龕燈を携へてゐました。この二人の武士は相當に身分もあるものらしく、櫓の上から目の下に見ゆる藩州邸の内を仔細に見てゐました。さうして一人の丈の高い方が矢立と紙を取り出しては見取圖を作つてゐました。
お松は其處に人のあることは知らないで、一心に七兵衛の合圖ばかりを待つてゐると、池の中へトボーンと礫の音。
その音を聞いて、お松は立ち上がりました。戸を細目に開けると、闇の中ながら今何處からともなく落ちて來た礫が、池の水を動かして波紋がゆらゆらと汀の水草の根を搖つてゐるのを見て、お松は胸を轟かしながら四邊を見廻しました。續いて第二の礫の音。
この時、火の見櫓の上で見取圖を作つてゐた丈の高い方が
「今の音は」聞きとがめると
「池の中で魚が跳ねたのでムらう」
背の低い方が答へる。

「魚の跳ねる音では無かつたやうだ」
「と云うて此の夜中に」
「兎も角、あの音は礫の音、事によると薩州の方で誰か此處を認めた奴があるかも知れぬ」
「油斷はなり申さぬ」
薩州邸内の見取圖を作つてゐた二人の武士は、櫓の上から前後左右を警戒すると、背の高いのが急に紙と筆を下へ投げ捨てるやうに差し置いて
「怪しい奴」
手裏劍を拔いて發矢と投げる。投げた方角は薩州邸の馬場から此邸の隔ての塀あたり、低い方の武士は下に伏せてあつた龕燈を手早く持ち直して其方角に突き附けると、池の上を飛ぶやうに汀を走つて女中部屋の方へ行く怪しの者。
二人の武士は高い處にゐたから怪しい者の影を龕燈の光に照しては見たけれど、大きな聲を揚げて屋敷の中を騒がすべく遠慮する處があつたものらしい。それで
「怪しい奴」
「取逃がしたか」
と、火の見櫓の上で面を見合せて空しく下の闇を立つて見てゐると、池のほとりで
「何者だ！」

「あッ！」
淵然と水の中へ落ち込んだやうな物の音。
「出會へ、出會へ、今女中部屋へ曲者が入つた、早く出會へ」
丁度この時、邸外を通り合せたのが白金に屯所を置く莊内藩の巡邏隊でした。短い槍と小銃を携へた四人の隊士が、一人の伍長に率ゐられて三田通りを巡邏して此の邸の外まで來た時に邸内で、曲者あり出會へ、といふ聲を聞いたから、そこで五人が一時に立ち留まり
「御同役、何か此の邸内で變事が御座つたやうぢや」
「左樣、何か物騒がしい」
市中取締が、この時分には町奉行の手だけで始まりのつかなかつた事は前に言ふ通りであつたから、幕府は譜代の大名と五千石以上の旗本を擇んで、其れ其れ持場々々を定めて八百八街を巡邏させたのでありました。さうして最も危險區域とされた三田の薩州邸附近、伊皿子、二本榎、猿町、白金邊を持場として割當てられたのが莊内藩でありました。
この莊内の巡邏隊は今、德島藩邸内の騒ぎを聞いて足を留めて中の容子を覗つてゐると、脇門がギーッと開いて其處から形を現はしたのが、以前火の見櫓で繪圖面を取つてゐた覆面の兩箇。
「さてこそ」
巡邏隊は短槍と小銃とを二人に附きつける。

「これは巡邏隊の諸君か、お役目御苦勞」
中から出て來た兩箇は、却て心安げに言葉を掛けたが此方は油斷をしないで
「名乘らつしやい、我々は莊内藩の巡邏隊でござる」
「拙者は上の山の金子六左衞門」
大きいのが答へると、低い方のが
「拙者は堤作右衞門」
上の山の金子六左衞門は六左衞門で通る人でありました。六左衞門といふよりも其の一名與三郎の方が通りが宜かつた事もあります。さきに新徵組が淸川八郎を覗ふ時、屢〻其金子の家で會合した事があります。金子は新徵組の連中と交りが善かつたばかりでなく、其の頃聞えたる各藩士及び志士とは大抵往來してゐました。其の主張する處は幕府を佐けて尊王の志を成さんとするのであります。朝廷と幕府との間の調和を謀るが爲には非常に働いた人でありました。藩内では家老であり、その時代には一種の志士として畏敬されてゐたのであつたから、莊内藩の巡邏隊は其れを聞いて、やや意を安んずる處あつて
「これはこれは、上の山の金子殿でござつたか、それとは知らず失禮を致しました、我々は白金屯所の莊内藩巡邏隊、拙者は伍長の齋藤角助と申す者」
と名乘りました。

そこで齋藤角助は隊士に槍と鐵砲を引かせ
「この邸内が物騷がしいやうでござるが……」
「如何にも、只今怪しい奴が忍び込んで女を一人奪つて逃げたと申す事」
「女を奪つて逃げた、それは聞き捨てならぬ事」
「あの土塀を乘り越えて逃げたとやらだが、まだ遠くへは行くまいと思はれる」
「諸君、追ッ蒐けて見給へ」
それは遣り過ごしてしまつて、金子六左衞門は先に立つて歩きながら堤作右衞門を顧みて
「一網打盡にやつてしまはねば可かぬわい」
といふ。堤は其れに答へて
「如何にも、思ひの外念が入つた仕方でござるな」
「不屈きな奴等ぢや、誰か大きな頭があつて指圖をしてゐるのに違ひない、中の容子は丸で要塞だ、いざと云へば幕府の兵を引受けて防戰する覺悟であるから、まづ謀叛と見ても差支へない」
「お膝元を怖れぬ振舞ぢや、若し大きな頭があつて、其の指圖とあらば、此のままに置くは幕府の威信に關する」
六左衞門と作右衞門の話は徳島藩邸内で女が浚はれたといふ事は全く別な話で、斯うして二人は、三田通りの越後屋まで引上げて來ました。

八

この頃、また上野の山下へ一軒の變つた床屋が出來ました。

變つたといつても店の體裁や職人小僧の類、お客の扱に別に變つた處なく、「銀床」といふ看板、髮盥、尻敷板、毛受、手水盥の類まで別段世間の床屋と變つた事はない。ただ一つ變つてゐるのは此處の主人がてんぼうであつた事だけであります。

どうしたわけか、此床の主人には右の片腕がありません、滅多には店へ出て來ないけれども、職人小僧の使ひぶりは上手であるらしい。この床屋の店先きで

「如何です、皆さん、大きな聲では讀めねえが、此んなものが出ましたぜ」

「何でございます」

「まあ讀むからお聞きなさいまし」

「聞きやせう」

懷から番附やうのものを取り出して、お客の一人が

「宜うございますか、恐れながら賣弘めのため口上……」

「成程」

「此度德川の橋詰に店出仕り候、家餅と申すは本家和歌山屋にて菊の千代と申弘め來り候も、此度相改め新製を加へ極あめりかに仕立趣向仕り候處、これまで京都堺町にて賣弘め候牡丹餅も少し流行に後れ强慾に過ぎ候、三條通にて山の內餅をつき込み……」

「ははア、成程、御養君の一件だね、誰がこしらへたか大層なものを拵へたものだが、うつかり其んなものは讀めねえ」

「ナニ、御威勢の盛んな時分なら此んなものを拵へる奴も無からう、拵へたつて世間へ持つて出せるものではねえが、何しろ今のやうな時勢だから公方樣の惡口でも何でも斯うして版行になつて出るんだ」

「それだとつてお前、滅多に其んな物を持つて歩かねえがいいぜ、岡ツ引の耳にでも入つて見ろ、ただでは濟まされねえ」

「大丈夫だよ、何しろ公方樣の御威勢はもう地に落ちたんだから、トテも治まりは着かねえのだ、ああやつて貧窮組が出來たり、浪人强盜が流行つたり、天誅が持ち上つたりしてゐる世の中だ」

「惡い惡い、公方樣の惡口なんぞを云つては惡いぞ」

「權ふものか、公方樣も今時の公方樣は餘ツ程エライ公方樣が出なくちやあ納まりが着かねえ、このお江戸の町の中で、お旗本よりもお國侍の方が鼻息が荒いんだから、もう公方樣の天下も末だ」

「何だと、此の野郎」

「何でも無え、實地の處を云つてるんだ」
「野郎、巫山戯た事を吐すな、この膝元で、永らく公方様の御恩になつてゐながら、公方様の悪口を云ふなんて飛んでもねえ野郎だ」
雑談が口論となり、口論が喧嘩にならうとする處へ
「まあまあ、皆さん、お靜かになさいまし」
現れたのは問題の片手のない中剃の上手な親方。
「憎い野郎だ、公方様の悪口なんぞを云やがつて」
一人は餘憤勃々、それを銀床の親方は和めて
「少し酔つぱらつてるやうでございますね」
「太え野郎だ、どうも眼つきがヲカしいから彼んな奴が薩摩の廻し者なんだらう」
「ナニ御酒の加減でございますよ」
親方が頻りに和めてゐる處へ
「これ神妙にしろ、今、公儀へ對して無禮の言を吐いたものは誰だ」
ヅカヅカと茶袋が一人入つて來ました。入つて來ると共に茶袋は店前に落ちてゐた紙片を手早く拾ひ取つて威丈高に店の者を睨みつけます。
茶袋といふのは、幕府が此の頃募集しかけた歩兵の事で、筒袖を着て袴腰のあるヅボンを穿いてゐ

るから其れでさう云つたもので、あんまり良い人が集まらなかつたから、多くは市中の破落戸を集めたものであります。どうも仕方が無いから此の破落戸を集めて歩兵隊を組織して西洋流に訓練をさせて行つたが、本來破落戸であつたのが急に茶袋を穿き、かりそめにも二本差すやうになつたから是等の連中の威張り方といつたら無い、それで市民は茶袋々々といつてゲヂゲヂのやうに思つてゐたものです。今も今とて、公方様の不敬問題で口論した揚句の處へ此の茶袋がやつて來たから、床の者は皆んな悪い奴が來たなと思ひました。
「公方様へ對して悪口を申上げるなんてソンな事は決してあるものぢやございません」
腕の無い親方が詫をいふ。
「默れ默れ、ここにゐる客人のうちで、公方様の悪口を申し上げた奴がある、恐れ多くも今の公方様では納まりが着かぬ、浪人者の方が旗本よりもズツト鼻息が荒いなどと高聲で噪いでゐたと知らせて來た者がある、誰が其のやうに無禮な事を申したか、名乘つて出ろ、これへ名乘つて出ろ、名乘つて出なければ店の者共を片つぱしから引括る」
どうも相手が悪い、と店の者は震へ上りました。
「そんな譯ではございません……實は」
最後の口論の相手になつた男、然も其れは公方様を悪く云つたのではなく、公方様を悪く云つたのを憤慨した方が何か申譯をしようとすると

「貴様だらう、無禮者奴！」
茶袋は飛んで行つて、其男の横面をビシリと打つて、其の手を逆に捻上げてしまひましたから
「ア、これは、これは、滅相な事をなされますな、私は公方様の悪口なんて、そんな事を申上げた覺えはございません」
「いや、貴様に違ひない、お膝元に住居致し永らく徳川家の御恩を蒙りながら、公儀に對して悪口を申すとは言語道斷な奴」
「いえいえ、私が何で其の様な事を申しませう、實は……私の方でそれを留めましたので、そんな事を云つては恐れ多いと其れを留めましたのでございますから、飛んでも無い、私がそんな事を」
「此奴が此奴が、自分の罪を人になすり附けようと致すか、いよいよ以て圖々しい奴」
茶袋は其の口を捻ぢ上げました。それを見兼ねて片腕の親方が割つて出で
「これは歩兵様、まあお聞きなすつて下さいまし、このお方は決して左様な事を申上げたのではございません、實は斯ういふわけなんでございます」
「貴様は何だ」
「私は此の店の亭主でございまして、銀と申します、私が細かい事を存じて居りますから、どうかお手をおゆるめなすつて一通りお聞きなすつて下さいまし」
「貴様、知つてゐるならナゼ最初から知つてると申さん、正直に云つて見ろ」

「公方様の悪口を申上げるどころではございません、ただ、話の調子でございまして、ツイ威勢のいい事を申しましたのが、少しばかり聲が高くなりましたので、それも此のお方ではございません、そんな事を申しましたお客様はたつた今お歸りになつてしまひましたので、このお客様なんぞは傍で聞いて居りまして其んな事を言つては宜くなからうぜと氣を附けて上げた位でございます、どう致しまして、公方様の悪口なんて、私風情が其んな事を申上げようものならロが曲つてしまひまする、この方は其れをお留め申しただけでございます、どうか御勘辨なすつて下さいまし」
「ナニ、この男が悪口を申上げたのではない、他の客が云つたのを此の男が留めたのだと、然らば其の客といふは誰だ」
「其は只今お歸りになりました」
「歸つた、歸つた處で貴様の店の得意だらうから所番地は知つてるだらう、何の町の何といふものだ、さあ其れを云へ」
「それが丁度お通りがかりのお客でございまして、ツイお名前も處もお聞き申して置きませんでございました」
「白々しい言譯を申すな、どうも當節はややもすればお上の御威光を輕く見る奴が有つて奇怪ちや、見せしめの爲に嚴しくせんければならん、亭主、この上彼是申すと貴様も同罪だぞ」
「飛んでも無い事で、どうか其のお方はお許しなすつて下さいまし、其のお方が悪い事を申上げた

ので無いことは、ドコまでも私共が證人でございます」

「喧しい、強つて此奴が悪口を申上げた事で無いとならば、其の本人を此處へ連れて來い、その本人が出て、私が申しました、恐れ入りましたと白狀した時に限つて此奴を許してやる」

「それは御無理と申すもので、丸つきり證據も何も無い事でお捕まへなさるのは餘り御無理な事で……」

「ナニ、證據が無いから無理だと、證據呼ばはりをして言ひ拔けをしようなどとは、いよいよ以て圖々しい、證據が有らうとも無からうとも、我々歩兵隊の耳に入つた以上は退引のならぬ事ぢや、併し理非曲直が立たねば政道も立たぬ道理ぢや、歩兵隊は無理を云はぬといふ證據に其の證據を見せてやる、これ見ろ、これは今貴樣の家の店前で拾つたものぢや、さあ、此れを見たら文句はあるまい」

突き出したのはこの店へ入りがけに茶袋が拾つた一枚の紙、それは今讀んだ「恐れ乍ら賣弘めの爲の口上、家傳、いるもち、別製煉ようくん」と書いた、紛れもなく今の將軍家を誹謗した刷物です。

悪い奴に悪い物を拾はれました。

「この證據を見た上は文句はあるまい、文句のない上に、亭主、貴樣の罪が重くなつたぞ、さあ、拘者と同道して兩人共に我々の兵營まで罷り出ろ、後の奴等は神妙に待つて居れ、お差圖があるまで此處を動いてはならん」

この危急存亡の秋に天なる哉、命なる哉、ゆらりゆらりと此の店へ繰込んだものがありました。それは別人ならず、長者町の道庵先生でありました。

「親方、これは如何したといふものだ」

道庵先生は拔からぬ面。

九

「おや、これは長者町の先生、お出でなさいまし、實は斯ういふわけなんで……」

片腕のない髪結床の亭主は手短に此の場の仔細を物語ると、道庵は感心したやうな面をして聞いてゐましたが

「ははあ成程、それは歩兵さんのお聞き違ひだらう、時に歩兵さん、わたしは此の長者町に住んでゐる道庵と云つて、長者町では可なり面の古い男でございますから、どうか私にお任せなすつて下さいまし」

「相成らん、引込んでゐろ」

「そんな事を仰有らずに、私にお任せなすつて下さいまし、男に不足もございませうが、どうか道庵の面を立ててお任せなすつて下さいまし」

「諄い、外の事とは違つて苟且にも上様の悪口を申し上げた奴、その分には捨て置き難い」
「そんな事を仰有らずに、まあお任せなすつて下さいましよ」
道庵先生は幽霊のやうな變てこな手つきをして、突然茶袋の首根つ子へ噛じりつくやうにしましたから、茶袋は腹が立つやら可笑しいやら
「無禮な奴、控へろ」
「歩兵さん、そんな事を仰有つては可けませんよ、第一、私にした處で、ここにゐるお客にした處で皆んな此のお江戸で育つた人達ですよ、江戸に生れた人で權現様のお蔭を蒙らぬ人はございますまい、その權現様以來の上様の悪口なんぞを申上げる者が、江戸つ子の中にある譯のものではございませんよ、ですから其れは嘘に定まつてゐますよ、私が成り代つて此の通りお詫を致しますから、今日の處は大眼に見てやつてお呉んなさんせう」
道庵先生だつて、責任のある處へ出て口を利かせれば、さう無茶ばかり言ふものではありません。相當の條理を立てて詫びてゐると、茶袋はいよいよ附上り
「貴様は、今此處へ來たばかりで何も事情を知らん、其の事情を知らん者が、出しや張つて仲裁振をするとは猪口才だ、此方には確に訴へ出でた人もあり、この通り證據もある、なほ申開くことがあらば屯所へ出てから申せ、貴様も證人として出たくば引張つてやる」
歩兵は五月蠅いから道庵の胸倉を取つて嚇かすと

「歩兵さん、歩兵さん、まあお待ちなさいまし、どうか穏かに話を致さうではございませんか、一體、貴方様方は町奉行や酒井様などのやうな古手といつては失敬だが、舊式のお役人と違つて、斯うして開けて來た西洋の新式の調練を受けておいでなさる歩兵さんでございませう、それですからモウ少し話がわかりさうなものでございますね」
と云つて道庵は、自分の胸倉を取つた歩兵の腕を逆に取り返しました。逆に取り返したと云つても其れを逆指や片胸捕で鮮かに取締て大向ふを捻らせるやうな藝當が此の先生に出來る筈はないが、不思議な事に荒つぽく道庵の胸倉を取つた茶袋が、それを逆に取り返されると、甚だ大人しく其の手を外して
「うむ、左様言はれれば成程だ、我々は町奉行や新徴組のやうな融通の利かぬ者共とは違つて、新式の調練を受けてゐるものだ、高島流の砲術も江川流の測量も一切心得てゐる」
「左様でございませうとも、人の胸倉を取るなんていふ事は皆んな舊式の兵隊のする事でございます、歩兵さんに限つて其んな事はございません、やつぱり西洋流に斯うして握手といふ事をなさるんでございませうね」
歩兵が存外溫和しく外した手を道庵先生が握り締めると
「ははあ、貴様は中々話せる、醫者だけあつて脈處が旨いわい」
茶袋は急にニコニコして來ました。

今まで威張り腐つてゐた茶袋が急に面を崩して
「貴様は話せる」
と云つて道庵と握手をして
「よしよし、萬事貴様に任せてやる、貴様から此の者共をよく説諭してやるが宜い、拙者も今日の處は特別の穩便を以て聞き捨てにして遣はす」
「いや、どうも有難うございます」
道庵は額を丁と拍つて、取つて附けたやうなお辭儀をした時分には折角包みかけた道庵が危なく轉げ出して來ました。
「貴様は少々醉つてゐるやうだな」
「へえ、いつでも醉つぱらつてゐるでございます、町内では醉つぱらひで御厄介になつてゐるでございます」
何か判らない事を云つてまたお辭儀をする、茶袋は其の形を可笑しがつて澁面を作り
「以來、氣を附けろ」
と云つて出て行つてしまひました。道庵先生の出る幕は、大抵の事が茶番になつてしまひます。夫婦喧嘩でも何でも道庵一たび出づれば大抵は茶にして納まりを附ける、それが時としては道庵の一德であり、時としては道庵先生の人格を輕くする所以となる事もあります。併し乍ら此の場の働きは、

慥に先生の器量を一段と上げてしまひました。何となれば此れはお鍋や八公の夫婦喧嘩とは違つて相手が始末の惡い茶袋と來てゐた處へ、事は上樣の不敬問題だから、屯所へ引張られた上は先づ生命は覺束ないものと思はなければならない。それを道庵が出て易々と解決を着けてしまつたから、今まで黒山のやうに人集りしてゐた連中が、ここで一度に哄と喝采しました。さうして口々に先生の器量を讃める言葉を記して見ると斯ういふ事になります、
「如何でゲス、あの道庵さんは大したものぢやあございませんか、お前さん御覽なすつたか、ああして一旦胸倉を取られた處を道庵さんが逆に取り返した、彼處が見物なんでゲス、あれが其の柔術の方で逆指と云つて、左の指の甲の方から斯うして摑んで掌を上の方へ斯う向けて强く揚げるんでゲスな、さうすると其れ指を取られた方は、騷げば騷ぐ程此方が其の拳を自分の方へ向けて斯う曲げるものですから指が折れてしまふ、柔術取りの名人にああして指を取られてしまつたが最後、もう動きが附くことぢやあございませんからな、それで流石の茶袋も我を折つて降參してしまひました」
「左樣ですかな、あの先生が其んな柔術取りの名人とは今まで知らなかつた、醉つぱらつて引轉返つてばかりゐるから腰拔けかと思つたら、矢張其れぢやあ何でござんすかな、道庵先生は柔術の方もちやあんと心得てゐるのでございますかな」
「其處がそれ、能ある鷹は爪を隱すと云ふんで、先生ああして白ばつくれて醉ぱらつてゐるけれど、武藝十八般悉く胸へ疊み込んでゐる處を俺はちやんと見て取つた、その上にお醫者さんで脈處を心

得てゐるから鬼に金棒でございますよ」

「成程、それにしてもヲカしいのは、あの茶袋が道庵先生に手を取られると、痛いとも痒いとも云ふ面をしないでニコニコと笑つた處が判りませんな」

「いや左様でない、あの茶袋もあれで柔術にかけては中々の取り手だが、何しろ道庵先生に會つては其の敵でないと、つまり自分に心得があるだけに彼を知り己を知るんでゲスな、だから指を取られると直ぐにお前は話せると云つて莞爾と笑つて尋常に引上げた處があれで味のある處で、道庵さんが敵を取締ながらペコペコお辭儀をして、先を立てて置く呼吸なんぞも却々見上げたものでございます た、エライものでございます」

輿論は往々土偶人形をも偉大なものに擔ぎ上げてしまひます。道庵先生も此處で暫らく輿論の勝利者となりました。

其のあとで床屋の親方は道庵先生を座敷へ招いて一口差上げ

「先生、お蔭様で助かりました、一體どうしたわけでござります」

「あははは」

道庵先生は笑つて

「あれは二兩取りといふ新手だ、あれで首尾よく取締めてしまつた」

「いや町内では、もう大變な評判で、先きから入り變り立ち變りお禮にやつて來ますが、何でも先

生が柔術の達人で、茶袋を手玉に取つて投げたと云つて騒いでゐますが、その二兩取といふのは矢張り柔術の手なんでございますかね」

「あははは」

道庵は一段と大口を開けて笑ひ

「柔術の手だとも、俺が新發明の柔術の新手だわい、尤も古い型を少しは取り入れてあるんだがな、それを場合に當つて器用に施し用ひたといふのが拙者の働きさ」

「その型を一つ傳授を受けたいものでございますね」

「あはははは、宜いとも、二兩取りの型を一つ話して遣らう、先づ最初に茶袋が、わしの胸倉を取つた時、その手先を逆に取り返したわしの働きを見たかい、あの時それ、そつと一兩握らしてやつた」

「成程」

「さうして利き目の處を見てゐると、グンニヤリと來たから此奴は手答へがあるわいと其れを下へ持つて行つて西洋流の握手をやる時にまた一兩、それで都合二兩取り、わしの方から云へば二兩取られだ、それでスツカリ柔術が利いてしまつた、二兩取りの新手といふのは、つまり其れだけのものさ」

「成程、そんな事だらうと思つて、私もあの時にお手の中を見てゐました、私の方で其の手を先に用ひさへすれば何の事は無かつたのでございますが、あの茶袋の言ひ分が餘り癪にさはるものでございますからツイ持前が出て、先生に落を取られてしまひました、申譯のない事でございます」

「それは左様と親方、お前さんは何か此の道庵に内緒の頼みがあると云ひなすつたから、其れで俺はやつて来たのだが、内密の頼みといふのは一體何だね」

「其りや先生、本當に内密なんでございますがね、本人も先生ならばといふし、私共も先生をお見かけ申してお願ひの筋があるんでございますがね」

「大變に改まつたね、この呑んだくれをまた忌やに買ひ被つたね」

「全く先生をお見かけ申してお縋り申すんでございますから」

「氣味が悪いな、さうお見かけ申して見かけ倒しにされてしまつては堪まらねえ、餘りお縋り申されて引き倒されても遣り切れねえが、男が見込んで頼まれりや、おれも道庵だ、隨分頼まれて見ねえ限りもねえのさ」

「實は先生、人を一人預かつて戴きたいんでございますがね、ただ預かつて戴くんなら何處でも宜しうございますが、暫らく隱して置いて戴きたいんでございます、先生ならば預ける方も安心、預る方も安心なんでございますから」

「俺に人を隱匿へといふのか、そりや大方謀叛人とか兇狀持とか、碌な奴ぢや有るめえ、いくら男と見込んで頼まれても、其んなのを預かるのは御免蒙りてえが、それも事と品によつては隨分引受けて見ねえ限りも無えのさ、まあドンな人間だか云つて見て御覽」

「先生、謀叛人とか兇狀持とか其んな物騒な人ぢやございません、女の子でございます、女の子を一人預かつて戴きたいんでございますが」

ここで片腕の無い床屋の親方といふのが「がんりき」の百藏の變形であること申すまでもありません。道庵先生は、百藏の口から何事か頼まれると

「遠くの親類より近くの他人ともいふ事もあるテ」

と云つて飄々と其の床屋を出かけてしまひました。

道庵が此の床を出て行くと入れ違ひに

「少々物を承はりたうございます」

小またの切れ上がつた女が小風呂敷を抱へて店前に立つて

「おや百藏さん」と云つて驚きました。これは女輕業の棟梁お角であります。

それから百藏がお角を連れて山下の雁鍋へ來て飲みながらの話。

「親方、お蔭様で全く助かりました、近いうち兩國でまた一旗揚げる都合ですから何卒御贔屓を頼みます」

「それはまあ宜かつた、甲府へ殘して置いた連中も皆んな無事で居なすつたかね」

「ええ、皆んな無事で居りましたが、ただ一人だけ如何しても見つからないんですよ、あれがわたし共一座の花形なんですが、火事場から何處へ行つたか、燒け死んだ容子もないから何處かへ逃げた

んだらうと、よく土地の人に頼んで置きました、廣い處ではありませんから其のうちに見付かるだらうと思つてゐますよ、あれが見付かりさへすれば、一人も缺けずに面が揃ひますけれど、さうでなくつても近いうちに花々しくやつて見る當りが附きましたのは皆んな親方のお蔭でございますよ、あの時に親方がゐて下さらなければ一座の者は目も當てられない醜態になつてしまふ處でした」

「俺も少しばかりのお金が、お前さんのお役に立つて嬉しいといふものだ」

「それから親方、府中でお目にかかつた時はお前さんは慥か百藏さんと仰有いましたが、此處で銀造さんと仰有るのは如何いふわけでございます」

「百藏の方は近ごろ通りが惡いから、それで銀造と變へたのだ、銀造といふのが餓鬼の時分からの名前さ、これから百の方はやめにして銀の方だけにして貰ひたい、もう一つの頼みは成るべく甲州といふ事を云つて貰ひたく無えのだ、お前と俺との馴染もあの時限りの事にして、人が聞いたら兄貴だとか親類だとか云つて濟まして置いて貰ひてえのだ」

「宜うございますとも、それはさうと親方、お前さんは、ほんたうにお神さんが無いのですか、あの時のお話ではお神さんは三年前亡くなつたやうなお話でしたけれど、何だか當てになりませんね」

「ナニ、嘘をつくものか、お神さんなんぞは有りやしねえ」

「それが矢張り嘘でございますよ」

「それぢや何か、俺にお神さんが有るといふのかね」

「有りますとも、大有りです」

「此奴は聞き物だね、無いものでも有ると云はれりや惡い氣持はしねえが、お前から左樣いはれると如何やら痛くねえ腹を探られるやうだ」

「申譯をするだけ弱身があるんですね、隱したつて駄目ですよ」

「驚いたね、ああして男世帶の銀床に無えものは女氣と亭主の片腕だと町内でこんな評判を立てられてゐる處へ、お前だけが俺に濡れ衣を着せようといふものだ」

「そりや可けません、ここの家に女氣が有るか無いかといふ事は一目見れば直にわかりますよ、女は細かい處へ氣が附きますからね」

「それでは、俺の家に女がゐるといふのかね」

「左樣ですとも」

こんな事から痴話が嵩じて行きました。

十

其の時分、根岸に住んでゐたお絹が、今日は小女を連れて何處の奥樣かといふ風をして山下を歩いて歸ります。

雁鍋の前へ來た時に、見たやうな人が其の店から出かけたのに氣が附きました。
男と女と二人で微醉機嫌で店を出かけたうちの男の方が東海道下りから甲州入りまでつき纏つて來たがんりきの百藏に相違ないから、お絹は自分の面を隠さうとしました。
併し向ふは些とも氣が附かないで二人で笑ひながら話し合つて歩いて行きます、片腕の無い百藏は前と變らず元氣なもので、身なりなども小綺麗にしてゐるのでした、女はと見れば、これは眉を落した傳法な年增で中々美い女でした。
お絹は其れを見ると、むらむらと嫉ましくなりました。自分は何もがんりきに惚れてはゐない。東海道で附き纏はれた時も、内心では輕蔑しながら調子を合せて來たが、男は中々しつこい、しつこいほど面白がつて戯弄氣取で一緒に來て、たうとう腕を一本落させることにしてしまつて、死ぬか生きるかでウンウン唸つてゐるのを山の中へ置きぱなしで逃げ出して、その時は、さすがに氣の毒と思はないでも無かつたが、思ひ出した時分には、柄にない男振をしてわたしを張にかかつた其の罰はああしたものと腹の中で笑つてゐる位でしたが、今其の男が斯うしてピンピンしてゐる上に、仇し女と摺れつもつれつして歩く處を見ると、お絹は自分勝手な嫉みをはじめてしまひました。
「さう云ふわけなら、あの子をわたしが預かりませうよ」
それとも知らず男女の話は甘つたるい。
「其んな事は出來ねえ」

百藏は態とらしく首を振ります。
「そんなに、わたしといふ者に信用が置けないの」
「お前に預けて賣物にでもされた日には折角の生娘が臺無しだ」
「わたしは、またお前さんが預かつて食物にしやしないかと其れが心配だ」
「預かり物を食ふ奴があるものか」
「如何だかわかりやしない、猫に鰹節を預けたやうなものだから」
「第一、おれに食はれるやうな娘ぢやねえ、お邸奉公を勤めてゐた娘で堅いこと此の上無しだ、友達の義理で退引ならず預かつては見たものの、おれも實は心配なのだ」
「預けた方も心配でせう」
「心配といふのは其んな事ぢやねえが、何時までも俺の處へは置けねえわけがあるのだから、それで今日、よそへ預け換へる約束をしてしまつたのだ」
「何處へ預けようと云ふの」
「何處でも宜いぢやねえか」
「それを言はないと放さない」
人目の薄いのをいい事にして二人は肩と肩とを突き合せて、此んな事を話しながら行くのを、お絹は皆んな聞いてしまつて、この男も女も憎らしくなりました。よし何處へ行くか、行く先を突き止め

てやらうといふ氣になりました。

「詰まらなく嫉かれるのも嫌だから言つてしまはう、長者町の道庵といふ剽輕なお醫者さんへ預ける事にしてしまつたんだ」

「長者町の道庵さん」

斯う云つて男女が山下の銀床といふ床屋へ入るのまでお絹はちやんと見屆けてしまひました。

根岸の住居へ歸つてからお絹は異樣の嫉ましさで惱まされました。惚れてもゐない男だが、ああなつて見ると何だか仕返しをしてやらなければ納まらなくなりました。

と云つて、自分が男をこしらへて見せつけてやる程のことではない、何とかして一旦、自分の方に向いてゐた男の心をもう一ぺん向き直させなければ女の面目が立たないやうに思ひました。一緒に歩いてゐた女は、ありや女房だらうか妾だらうかと餘計な詮索までして見たくなりました。一體あの男が、德間の山の中で拋り放しにして置かれてあつたのを助かつて出て來たのが不思議、誰が助けて來たのだらう、事によつたら山の中へあの女が通りかかつて介抱した其れからの腐れ緣ぢやないか知らなどとも考へて見ました。それはそれにしても、あの女……

「ああ、さうだ」

たうとう思ひ當つてお絹は小膝を丁と打ちました。あの女は慥か忠作の處へ金を借りに來た事のある女である。さうださうだ、甲州へ旅興行に出る仕込の爲といつて五十兩の融通を人を中に立てて借りて行つたのはあの女に違ひない、そんならば事によると自分が持つて來た品物の中に、あの書付が殘つてゐるかも知れぬ。お絹は葛籠を明けて證文箱を取り出しました。

忠作と別れる前から、お絹は末の見込のない事を知つて、自分の物は廻して置きました。大切の證文も幾通りか逸早く取り纏めて持つて出たうちの

「有つた有つた、これに違ひない」

と皺をのばした一通の證文は、一金五十兩也と書いて、女輕業太夫元かく、といふ名前にしてあつたから、それであの女が、輕業師の興行人であり其の名前をかくといふ事までお絹は知ることが出來ました。斯うなつて見ると、お絹は其れや此れやを種に、二人をいぢめつけてやらなければ納まりません。

其の晩は寢ながらも此の仕組の事ばかり考へてゐました。

先刻、耳に入れた話、何か預かり物の一件、生娘だとかお邸奉公だとか云つてゐたが、あれは何、それを種に使へまいか。さうして店へ入る時に云つたのは、長者町の道庵といふ剽輕な醫者へ預ける事にしたといふ言葉。

「よしよし、道庵が入るならば芝居が榮える」

其の翌日、お絹は十二分の好奇心を以て長者町の道庵先生を訪れました。

「先生、今日伺つたのは外の事ではございませんが、先生の身の上に有りさうもない噂を聞きまし

たから共れで念の爲にお聞き申しに上りました」
「ははあ、モウあれを聞かれてしまつたか、それはそれは」
と云つて道庵は定まりの惡いやうな面をします。
「先生にもお以合なさらぬ事で……」
とお絹は何だか意味のありさうに云ふと、道庵は恐縮して
「ツイどうも彼んな事になつてしまつて甚だ申譯がない、わしも面白半分で出かけて行つて見ると、ワイワイ騒いでお粥を食つてゐる樣子が餘まり宜いもんだから、ツイ大八車の上へ乘つかつて餘計な事を喋づてしまふと、皆んながまた馬鹿に嬉しがつてやんややんやと讃めるから少しばかり調子に乘つてしまつてるうちに騒ぎがだんだん大きくなるので、こいつは堪まらねえと、逃げ出すのも面倒だから車の上へグウグウ寢込んでしまつたやうなわけで、其れを如何間違へたか道庵が煽てたのだ、貧窮組を持上げたのは道庵の仕業だ、それでお前の家を荒したのも道庵が指圖をしたんだなんて、餘計な事を言ひ觸らす奴が有つたものだから、危なくお上の手にかかつて腕が後へ廻る處を、それでも永年、道庵で賣込んでゐるだけに、役人の方で取上げずに、道庵か、道庵ならば道庵で宜しいテナ事になつて無罪放免で濟んだが年甲斐もなく馬鹿な事をしたものだよ、全く以て申譯がない」
「先生、そんな事ではありません、わたしの聞いた噂といふのは別な事ですよ」
「はて、共の外には、別に人に聞かれて後暗えやうな事をした覺えは無えのだが」

「先生が奥樣をお迎へ申す樣になつたと聞いてお祝ひに參りました」
「おやおや、わしが奥樣を迎へる事になつたつて、そりや初耳だ、さうして共りや何處から來るんだい」
「先生、恍けちや可けません、それだからワザワザお聞き申しに來たのですよ」
「そりや、おれの方からもお聞き申したい處だ、他の事と違つて此んな目出たい事は無い、何處から、どんなのが來るんだか早く聞かせて貰ひたい」
「先生が言はなければ、わたしの方で言つて見ませうか」
「是非、さういふ事にして貰ひたい、同じ値ならば若くつて綺麗な方にしてもらひたいが、斯う年を老つて飲んだくれの俺だから、とても共んな贅澤な事は云へ無え、萬事お前さんの方に任せる」
「處が若くつて綺麗なのだから不思議ですね、その上にお邸奉公までつとめて、遊藝の嗜みもあれば禮儀作法も心得てゐるといふのだから、如何したつて此れは先生に奢らせなければなりません」
「奢る！　さうなれば道庵も斯うして踏み倒されてばかりは居ねえ、さうして何かい、親許は一體何處で何時來て呉れるんだらう」
「親許は上野の山下で、もう結納の取り替せも濟んで近々のうちにお輿入れがあるさうぢや有りませんか」
「親許は上野の山下だつて、さうして共れは武家か町人か、ただしまた慈姑仲間が親許か、其の邊

も確かめて置きたい」

「山下の銀床といふ床屋が親許で近いうちに道庵先生のお邸へ乗込むといふ事を人の噂でチラリと聞きました」

「ハハア成程」

それと聞いて道庵先生が初めて氣がつきました。この女何處から聞き出して來たか、もうあの娘の事を知つてゐる、さうしてワザとこんな風に綾をかけて持ち出したのだな。

それと共に道庵がフト考へついたのは、此の女も隨分腑に落ちない處はあるけれども、立ち入つて人の世話をして見たがつたり存外人を調戯つて見たりする處に、いくらか道庵と共通の處があつて心安くしてゐるから、女は女同志で、寧そこの女に賴んだら如何だらうかと道庵は道庵なりに見當をつけた事件がありました。

「ははあ、あの娘の事か、何處から聞いて來たか知らねえが、お前さんにさう云はれると、ははあ成程といふ外は無いのだ、實は俺も其の用談を持ちかけられて始末に困つたやうなわけだが、如何でございませう、お前さんの方で何とかお考へがございませうか」

道庵は斯う云つてお絹に相談を持ちかけて見ると、お絹は二つ返事で其の娘を預からうと云ひ出しました。

道庵は共れでホッと息をついて、お絹を信用して百藏から賴まれた娘をそつくり共の方へ廻すことにしてしまひました。

娘を預けようとする道庵も無論、その娘がお松であるとは知らず、それを預からうとするお絹も固よりそれは一旦自分の手鹽にかけたお松であらうとは思ひも及ばず、道庵は賴まれて見たものの小面倒であるから其のままお絹に引き渡さうとし、お絹はただ、がんりきとお角の間に何か仕返しをしてやらうといふ、いたづら心で進んで共れを引き取らうと云ひ出したものです。

斯う話が纏まつてお絹が道庵宅を辭して出ようとする時に玄關で

「御免下さいまし」

藥籠持の國公が共の應接に出てゐると

「山下の銀床から參りました……」

その聲は聞き覺えのある聲、卽ちがんりきの百藏の聲でした。

道庵は自身で玄關へ立ち出でて見ると共處に駕籠を釣らせて來たのは、銀床の亭主擬ふ方なき元のがんりきの百藏で

「これは先生、豫てお願ひ申したのを只今連れて參りました、何分宜しく」

次の間で隙見をしてゐたお絹が

「おや」

と云つて驚いたのは、百が手を取つて駕籠から助け出したそれは自分が手鹽にかけたお松の姿であ

つたからであります。

次の間で隙見をしてゐたお絹が驚いたばかりでなく、迎へに出た道庵も亦驚きました。お松に取つては道庵は再生の恩人であり、伊勢參りをした時に大湊で會つて奇遇を喜んだ事もありました。

これはこれはと云つて道庵もお松も直に打ち解けた事情を聞いて、連れて來たがんりきも喜んで、なほ色々とお賴み申した上に無事に歸つてしまひました。

「お松ではないか」

お松は其の聲を聞いて水を掛けられたやうな心持がしました。其處に立つてゐるのは、姿こそ今は丸髷の奥樣風になつてゐるが、元自分を仕立てて呉れた兎も角も恩人でありましたから

「まあお師匠さん」

頓には二の句が告げませんでした。

「珍らしい處で會つたね」

「どうも御無沙汰を致して濟みませぬ」

「見ればお前は何處ぞお邸奉公でもしておいでのやうだが、何處に勤めてゐました」

「はい、三田の蜂須賀樣のお邸に」

「如何してお前、あの神尾樣のお邸を出てしまつたの」

「つい據どころない事が出來まして、それ故まことに……」

「人もあらうに風呂番の與太郎とやらいふ足りない男と逃げたといふぢやないか」

「如何も申譯がありません」

「お前があんな不始末をして呉れたお蔭で、わたしは殿樣の前へ、どんなに辛い思ひをしたか知れやしない、ほんとに考へ無しな事をして呉れたね」

「何卒お免し下さいまし」

「出來てしまつた事は仕方がないが、もう其の與太郎といふ風呂番とは手が切れてしまつたのかい」

お絹が與太郎々々といふのは與八の事ですけれど、お絹の口ぶりによれば、お松と與八と逃げたのは不義をして逃げたもの、お松が其の風呂番に嗾かされて逃げたものと思ひ込んでゐるらしいから、お松は

「あの人が、よく親切にして呉れましたけれど、わたしが上方へやられたものですから……」

「何が親切なんだらう、色戀にも名聞といふものがあるのに、風呂番と逃げたんでは話にも何もなりやしない、ほんたうにわたしはあの時位、情なく思つた事はありません」

「さういふ譯ではございませぬ」

「それからお前、上方へも行つてゐたさうな、一度位わたしの處へ便りをして呉れても宜かりさうなもの」

「そのつもりで居りましても、つい色々の目に遭つたものでございますから」

「此方へ來て其んなに御奉公するまでに何故わたしを訪ねて呉れなかつたの」
「まだ此方へ參りまして僅でございますからツイ御無沙汰を」
お松は疊みかけて叱られるのを苦しい受太刀をしてゐたが、お絹はあんまり深く追及しないで
「過ぎ去つた事は仕方が無いからこれから心を入れ更へて下さい、今お前を連れて來た人なんぞも如何やら性質の宜い人ではない容子、引受けたのが當家の道庵さんや、わたし達だから宜かつたけれど、一つ間違へばお前の身は臺なし、ほんたうに危ない處」
お絹は自分の子を危ない所から助け出したやうな言葉で云つてゐますが、これは丸きり作り言ではなく多少の親身が籠つてゐるやうです。

十一

斯うして道庵の手からお松は再びお絹の許へうつる事になりました。お絹は以前の事を一通り叱言を云つて見たりしたけれど、お松の詫方が餘り神妙でしたからお絹も和いで
「お前が、さういふ氣になつて呉れれば、わたしだつて昔の事なんぞを繰返すのではありません」
「お師匠様、それに就いては一つのお願ひがございますが、どうかお聞き入れなすつて戴きたうございます」
「改まつてお願ひといふのは、どんな事でせう、云つて御覽」
「お暇乞を致さずにお邸を出ましたのは、わたしの重い罪でございますから、何卒もう一遍、神尾の殿様へ御奉公にお出し下さいまし、さうして一生懸命に御奉公を仕直して、お師匠様の御恩報じを致したいと存じまする」
「成程」
お絹は本氣になつて成程と云ひました。それはお松の心が、あんまり正直だから多少動かされたのであります。
「けれどもね」
ややしばらく感心してゐたお絹は、けれどもといふ言葉を挿んで斯う云ひました。
「お前は、まだ知るまいが、神尾様も昔の神尾様では無いのだよ、今はお江戸にはおいでにならないのですよ」
「あの甲府の方へお役替になつたさうでございますね」
「よく知つてゐる」
お絹の眼には驚きの色がありました。
「甲府のやうな山の中へお出でになりましては何かにつけて御不自由でございませうから出來ますならば、お傍にゐて相當の御用を勤めてお上げ申したいと存じまする」